

道徳編



芥子園
画傳

芥子園





ソバメ印 ニッポン レコード

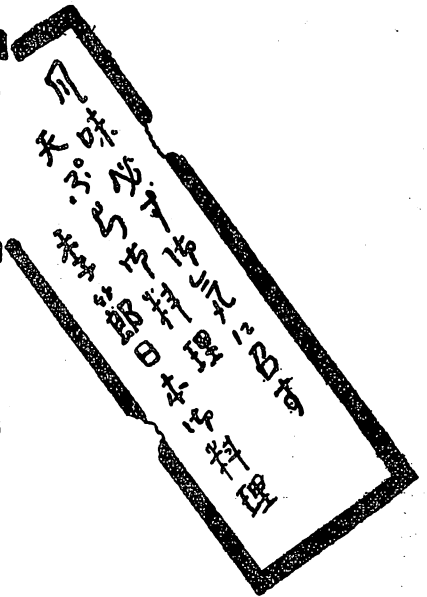
夏期特別臨時新譜

小モ ダン 曲	同	ジ ャ ズ	映共 書説 明演	謠 曲	清 元
ア銀 ラ座 ！行 失進 禮曲	活月 華 惚撰	ダ誰 ブ？ リ教 ンへ 灣て	ラ モ ナ	船 辯 慶	喜 撰 法 師
清ビ ア岡 ノ水 昌	澤ハ ーモ ニカ 岡正 太郎	日 の丸 ジ ャ ズ バ ン ド	松里 木見 木義 郎郎	大 阪 松 竹 座 高 宮 敬 一 郎	清 元 延 壽 太 夫
		松 竹 座 管 絃 團		觀 世 左 近	

日 東 蓄 音 器 株 式 會 社

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



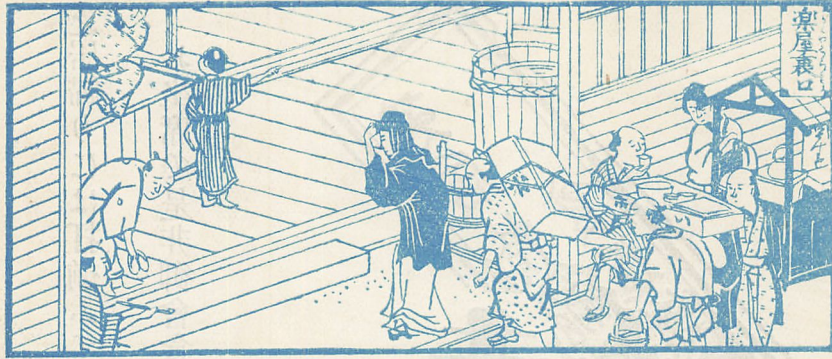
高又屋食堂

道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

涼屋表口



道頓堀 (葉月號) 第三年・第二十二輯

◇表紙……………(新四ツ谷怪談)……………山口草平 誌

口眞寫繪
◇「紅燈新話」河合の染次、小織の篠崎◇「新四ツ谷怪談」河合のお峰◇「研辰の富園」五郎の研辰◇「牛」五郎の母親のお種◇「人形の家」岡田嘉子のノラ◇「道頓堀行進曲」岡田嘉子の女給花子◇「血染の瀑布」中田の岩瀧の十藏、辻野の金引の吉三郎◇「オ・マイ」ニユウヨオク」の舞臺面。

◇中座◇
研辰の富園 (芝居ものがたり)……………不二見珍吉 (三)

◇浪花座◇
牛 漁師のお作 (芝居物語)……………不二見珍吉 (四)

◇新話◇
紅燈新話 (芝居見たま)……………和田伸三 (六)

◇角座◇
新四ツ谷怪談 (芝居ばなし)……………石原泉二 (一〇)

◇芝居物語◇
歸つて来た噂 (芝居物語)……………素木宗一 (三)

◇芝居小説◇
雨 情 (芝居小説)……………福隅一孝 (五)

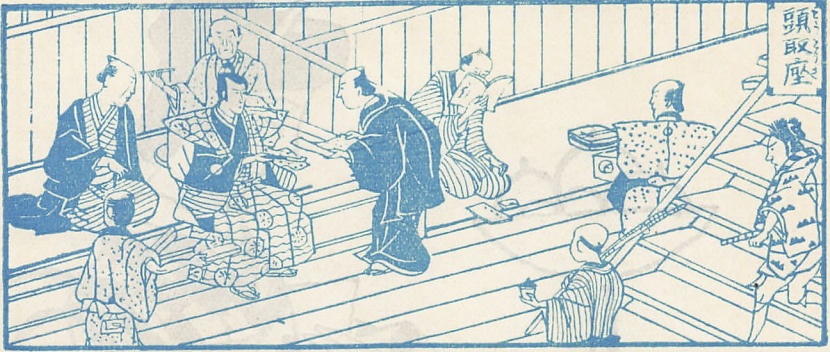
◇芝居物語◇
人形の家 (芝居物語)……………平一平 (元)

◇芝居物語◇
原作冥途の飛脚に就いて……………角屋宗十郎 (三)

◇芝居物語◇
近八考證……………木谷蓬吟 (六)

◇芝居物語◇
曾我廻が是れから踏まうとする道……………豊島扇三郎 (六)

◇芝居物語◇
曾我廻が是れから踏まうとする道……………石割松太郎 (四)



◎五郎 雑考……………山上貞一(四)

◎使命を果した五郎劇……………豊岡佐一郎(七)

◎漫評漫談五郎劇……………高谷伸(九)

◇七月の浪花座◇
◎「己が罪」劇に就いて……………菊池幽芳(五)

◎怪談……………沼田藏六(五)

◎三人の女……………河合武雄(五)

◎紅燈新話雑記……………櫻井芳太郎(六)

◇七月の角座◇
◎岡田嘉子のこころ……………日比繁治郎(六)

◎踊らせ上手の岡田嘉子……………北村兼子(六)

◇天座◇
◎新聲劇と思ひ出の辨天座……………徳田純宏(六)

◇漫談あじやら鸚鵡石……………正岡蓉(四)

◇關西藝界昔ばなし……………瀬川春江(五)

◇俳句……………煤蓑選(六)

◇芝居短歌……………山上貞一選(五)

◇劇評……………編輯部選(六)

■天井裏の散歩者(浪花座上演脚本)……………瀬戸英一(七)

□編 輯 後 記……………朝 塚 郎 克 三
□カ ッ ト……………大 塚 郎 克 三



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

涼やかな夏のお献立が

お待ちしております

園
梅
園

お芝居でのお食事は食堂にて……………
お歸りには白鷹にて一寸ぶく江戸すしを……

中
座
食
堂

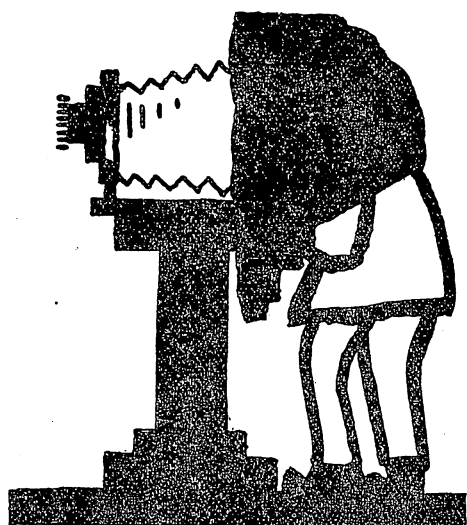
本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

細旗
製十
緞帳

植原商店

神戸市
植社西門

電話
元町一六五番



うすぎぬの爽さ

そのお姿を

……ぜ
ひ。

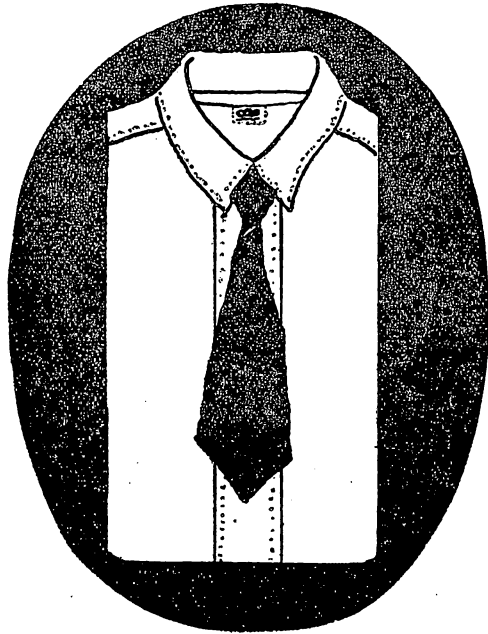
高津郵便局東

山崎寫真館

電話南四二四四番

透きとほる涼趣

粹なお見立を



井上のワイシャツ

お誂のワイシャツ

お好み柄・タタヒと合つた快心

しめ既製品と変ぬらぬ安値段

御報せ下さるすまじば様お伺致すまし



綿 綿 布

ワイシャツ

カ ラ ー

大阪天王寺区筆崎町七七
東成区中道町八十九

本店
工場

井上勝美

商標 (福)

萬袋物製物造卸問屋

大坂市東區博勞町電停前

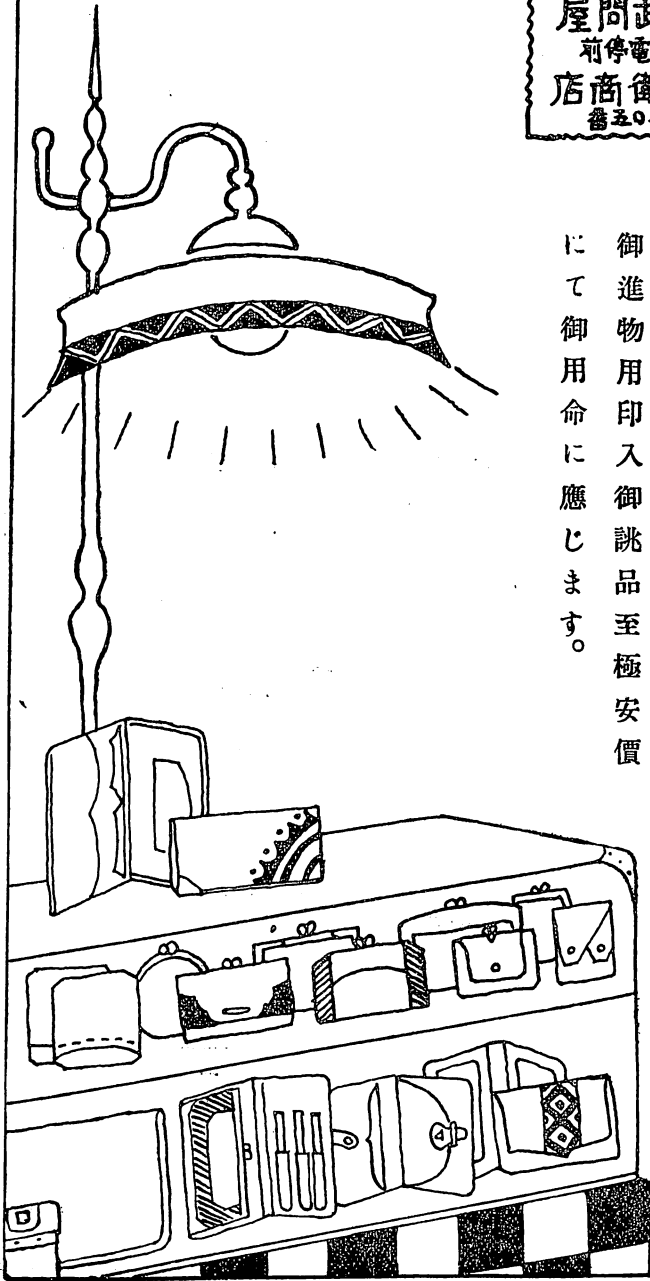
福本又兵衛商店

電話三〇五番

只一回の御取引で

堅實なる取引。品質の優良。絶対安價等の
主要問題が譯もなく解決されます。

御進物用印入御詠品至極安價
にて御用命に應じます。



御家族揃つての御観劇
 楽しい集團的の御観劇

↓是非當所を御利用下さい。

大阪市南區久左衛門町八(松竹合名社内)



松竹觀劇案内所

電話 南(一四〇番)
 (六六八五番)

中座	辨天座	樂天地
浪花座	松竹座	春日座
角座	朝日座	

京都松竹經營各劇場
 神戸松竹經營各劇場

◆御申越次第即時參上御相談申上げます。

ルベンキ
 清涼飲料
 シモンレキ

ルビヒサア
 清涼飲料
 シモンポリ

松竹キネマ

超特作映畫!!!



主演 千早晶子 林長二郎

人非人

監督 平凡二
撮影 杉山公平

『主婦の友』連載

原作 吉屋信子女史

空の彼方へ

監督 柳田芳子 監 薦見丈夫

主演 柳田芳子

野寺 正一 岡田宗太郎 土方勝三郎
結城 一郎 河原 侃二 鈴木 歌子
高尾 光子 他 蒲田オールスターキャスト



スキナ脂取紙

あぶら

ス

テキニ好いあぶら取紙はスキナ

キ

に入つたご皆様から賞讃を博せるスキナ

ナ

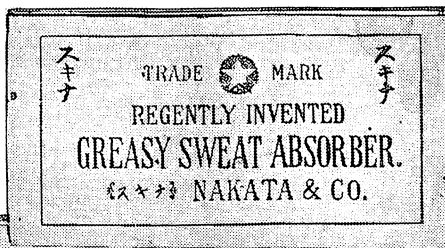
んご云つてもあぶら取紙は

スキナに限りません

是非あなた様も御試用を!

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖
スキナのあぶら取紙

“GREASY SWEAT ABSORBER”
Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舖
ス キ ナ 屋 號
中 田 商 店
大 阪

パールオイル 松竹石鹼

日本に初めて

完成せる石鹼

「パールオイル」は純粹の植物性油で絶對に酸性なく、石鹼原料として最も優秀なものであります。

歐米には既に之を主原料とした高級石鹼がありますが、日本では此度發賣された松竹石鹼が全く唯一最初のものであります。

而も松竹石鹼は野村南洋事業部特産の最良「パールオイル」を主原料として居ますから決して目にしみず、肌を荒さず、完全に皮膚を清潔に滑かにします。従て洗粉、クリーム等を使ふ必要は全くありません皮膚の保健上最も有効な石鹼として推奨する事が出來ます

有名化粧品店・小間物店・薬店にあり



演上行興月七座花百

衛兵崎篠の郎一桂織小 次染妓葵の雄武合河 詰大の[話新燈紅]



演上行興月七座花浜

峰おの雄武合河 [談怪谷四新]



中座七月興行上演

辰研の郎五 [園富の辰研]



演上行飛月七座中

ねたお親母の郎五 [半]



角座七月興行上演

イセツ作『人形の家』岡田嘉子の子ラノ



演上行興月七座角

子花給女の子嘉田岡 [曲進行堀頓道]



演上行興月七座天辨

藏寸の瀧岩の田中
郎三吉の引金の野辻 [布瀑の染血]



演上座竹松

面臺舞のクオヨウユニ●イマ●オ

中座七月興行上演

芝居物語(五郎の喜劇)

研辰の富囃

不二見 珍 吉



意久地いくぢがなくて腰こし抜けで、それでゐて人一倍ひとばい狡猾くわつで、更に辨口べんこうが此上こゝもなく健者けんしやに出来上できあがつてゐるのだから、研屋辰次けんやたつじなるもの、誠に厄介えきがい極ごくな存在そんざいである。もごく、斯かうした人物じんぶつが侍ざむらいで御座ござる等なまこそり返かへつて居ゐられるのも、泰平たいへいの世よの有難ありがたさであらう。だが然しかし、研屋辰次けんやたつじは、満更まんず憎にくみ切きれる男おとこではなかつた。ある一面ひつめんから見みれば、無邪むじゃ氣きで人間味にんげんみたつぷりな、可愛い處せうごころもないではない。

辰次たつじは、常日つねひ頃ころから、二本差ほんふさしの身分みぶんに憧あこがれてゐた。商賣しょうばいの研屋けんやは自然しぜん侍ざむらいに近ちかづく機會きかいを興あへてくれた。彼は、傳手でんてから傳手でんてを求めて遂ついに士分しぶんに取立とてられるやうになつた。それもつい近頃ちかごろの事ことで、まだ侍ざむらいになり立たてのほやくである。

従したがつて彼の目課めくわは目の廻まわるやうに忙いそがしい、やれ小笠原流おがさわらりゅうがさうした。諺ことわざは何々なにんげん、劍道けんどうは何流等なにりゅうなまミ、一通りひととおりの心得こころえがなくては一人前ひとりまへの侍ざむらい。

こは言へぬ、流石は商賣人上りだけあつて、斯うした骨は充分呑み込んでゐるのだが、下素の悲しさ、餅は餅屋で、一通りの儀式作法を覺へるのには仲々の骨折らしい。

事の起りさいふのは、道場歸り、竹生島の謠の稽古から起つたのだ。何も往來端で謠の稽古なんかしないでもいいのだが、其處は見得坊の研辰だ。ふんぞり返つて謠さいふ上品な音楽を知つてゐるぞ、ミ町人共に見せたい自惚れからも知れない。

處が、町人共も、意地悪くお題目を稱へた解ではないのだが、研辰の謠が、何んさなく念佛を稱へてゐるやうに聞えるので、人形使ひが鉦を叩いて拍子をこるこ、研辰の謠もついで引づられて益々念佛のやうに聞え、するミ町人共は更にお題目のやうに聞えるので『近所にお葬式でもあるのだらう』なんてさんだはき違へから、夢中になつてお題目を稱へるさいふ順序になつたのだ。こうした有様を側で見てゐるものは、必ず面笑しいに違ひない。浪人高橋平馬は聲高らかにかんらく、豪傑笑ひをした。謠の研辰、さあ怒つた、果ては眞赤にのほせ上げて『拙者の謠が何故面笑しい』ミ町人共を睨み廻す。『面笑しいから笑つた。それがさうした』平馬は平然と怒鳴り返す、研辰も口先までは負けてゐない。『何つ、浪人の分際にして無禮な一言、そこ動くな、眞つ二つだ』斯うなる

ミ眞つ二つの手前、其處が武士の意氣地だ、さうしても刀を抜かないではゐられなくなつた。眞劍勝負だ。

處が研辰、突然からりミ刀を投り出した。

『待つた、お待ち下され、何も、貴方ミ私がかよく恨みのある筈はないのだから喧嘩をしても始らない。貴方が私を殺せば、矢張り人殺し、私が貴方を殺しても矢張り人殺しいや、決してお手向ひは致さぬ、この通り、この通りでゐる』ミ態度はがらり一變する。相手の平馬も少々氣拔けの體たらくである。先づ、喧嘩はやつミおさまつたが、茶屋の女房お瀧が心配して『お怪我はなくて幸せでゐました』さいつたので、例の變な空元氣から『何侍さいふものは單純なもので……』なんて餘計な事を口走つたので、一旦靜つた高橋もかつミした。

今度こそは研辰の生命は風前のさもし火だ。研辰すつかりいよけて仕終つた。彼は再び平身低頭する。何度でも平身低頭をするやうだが、研辰にミつて斯麼こは、頭がちよつミ前にのめる位で大した問題にも、又苦にもならぬらしい。成程、頭を下げるのミ、血を流すのミは、何方が損か言へば三つ兒に聞いたつて判り切つた話だ。だが浪人は仲々承知しない。生え抜きの侍なんて全く始末に終へぬものだ。

『あもし、あんたはん、待つておくれやす……』ミ研辰は一生懸命に哀願する。……ただ……残念なのはこの差料である

これは自分が十分に取立てられ、腕に覺えは無きまでも、せめて武士のたましいの刀だけは立派なものを、求めたのがこの一刀、御覽なされ備前長船の名刀で御座る。……こ彼は差料を平馬に示す。平馬も名刀に聞いては思はず身體を乗り出して、ふふんご感心する。此時ごばかり、研辰は、安くまけて置くから買へみすめ。高い安いのせり合ひから、研辰は遂に何兩かの損だが、残念さうに刀を平馬に賣りつける。一體、喧嘩か商賣か解が判らないのだ。思はぬ堀出し物に、平馬は意氣揚々み引上げる。後で研辰、せら笑つて、『ふん、これでも三兩儲かつた』と獨り合點は流石に抜けない仕方だ。所で、刀を賣つた金を財布に仕舞はうとして研辰は愕然とする。……生命から二番目の金入を落したのだ。『さては道場で……(ミウなづいて)中味はたいしてなかつたが、富圃が入れてある、若し富圃が當つたら五百兩……』取つて返さうとする處へ、研辰の友人神原三平太がのつそりのつそりやつて来て研辰の肩を叩く『これ研屋氏、血相變へて何んごなされた』『いやあの急ぎ居りますので』と振切らうとする袖を擱へて『はて惶しめさるな、御身が探してゐられるのはこれで御座らうがな』と示されたのは財布である。早速中を調べて見るが無い！五百兩の富圃がない！『これでムるかのか』『あつそれはつ……』と惶てる辰次の腕を擱へて神原は『これ研辰氏、御身も只今では武士でゐる、富圃を求め

等ごは以つての外、若しこの事がお上の耳へ這入つたら如何なさる』と詰めかける、研辰、今は悔後の念にかられて『ごめん』と計り脇差で腹をぶすり……『あつ、研屋氏、これ早まつた』と流石の神原も顔色を變へる、が相手は研辰だ。切るご見せたのは嘘で、實は心配をかけまいと思つてこの通りまだ腹は切らないのだごいふ、だが何にしても武士である、研辰は富圃を持餘して仕終つた。折角一兩出したものだ。捨てるのは惜しい、ごいつて武士の面目も大切だ。ミつ、おいつ、可なり頭を痛めて居る處へ珍妙な形構をした水茶屋の亭主吉兵衛が出て来て、富圃を買はうごいふ。甘く話はまごまつた。さて富圃は當つたか、當らぬか、……處が運は何處にあるか判らない、富圃は當つたのだ。

約束の五百兩のうち半分は吉兵衛、半分は研辰の儲けで、神原の立場だが、され程武士は食はねご……なんておさまつてるたつて、金の前には誰れだつて案外だらしのないもので遂に研辰に五十兩で買収されて仕終ふ、ごいふのが幕になる

牛

お花は憎えたやうにおづくご伊之助の前に現はれた。伊之助は何んごなく落付かぬ態度で指先きをふるはし乍ら懐中から百圓札を取出した。『これは友達が送つてくれた金



だ、これさへあれば、阿母さんの生活費はある、私達は是れから直ぐ都へ行かう』とせき立てた。

お花が、辛苦を重ねたためた百圓で牛を買ったと聞いて、伊之助はかつみのほせて仕終つた。おのれ……と思はず拳を振上げた『まつてくれ、まつて下され、お花は赦してくれ』と仲に割りこんで泣き叫ぶのはお花の母親お種であつた。

老ひ先の短い身體である。連れ添ふ夫に死に別れて、可弱い女手一つでお花を今日まで育て上げるのには一通りの苦心ではなかつた。そして伊之助といふ立派な婿を貰つてやれ嬉しやと思ふ間もなく、娘夫婦は、出世を求めて都に出るこいふ。それからのお種はまるで別人のやうに變つて仕終つた。朝から晩まで女だてらに酒はのむ、無理難題を持ちかけては夫婦の者を困らせる。が、それも皆若い二人に残された後の自分の淋しさ便りなさを思へばこそ自暴自棄に陥つてゆくのだ『牛をぬすまれたツ……』源兵衛が血相を變へて飛んで来た……お種さん、お前に賣る約束をした牛を盗まれたから警察へ届けて来る……然う言ひ残して源兵衛は一散に走つて行つた。

『牛盗人は俺だツ……』『ええ』『一人は愕然とする。『私です、牛を盗んで賣つたのは私です』伊之助の悲痛な叫び……。

都の夢も、立身出世の望みも絶え果てたのだ。『私は警察へ自首して行きます……』その時、お種は、よろめくやうに立ち上つた。『もし源兵衛さん……牛は私が賣りました……』お種は、伊之助の百圓札を半布のやうに打ふり乍ら源兵衛の後を追つた。

浪花座七月興行上演(菊池幽芳氏作)

芝居見たまま

一 己が罪 漁師のお作

和田伸三

房州根本海岸の場

これは人の世の奇しい運命の絲に綴られた悲しい物語である。青春! いたみやすく傷つき易き薔薇の小徑に、踏みあやまれた魂の十字架が、いかにかなしい結果をもたらしたか。この芝居は、母親環の罪業の十字架を、いたましくも負はされて生れ出た可憐の子玉太郎が、十一歳の夏と共に幕は開かれるのである。静かな漁師町、房州根本にも、夏が来るに、都からの海水浴の人達で

賑ふ。櫻戸正弘も、父の子爵櫻戸隆弘、母の環、祖父の傳三なごに伴はれて、旅宿養命館に来てゐた。その日の夕方近く街の子が海への物めづらしいままに、海岸に散歩に出て、悪太郎達にいちめられてゐるころを、ゆくりなく來合せた貧しい漁師岩藏とその妻お作との間に育てられてゐる孤兒玉太郎に助けられる。さうして二人はすぐ仲好しになる。

玉太郎はかうした漁村に珍らしく上品な子であつた。けれども、父も知らない。母も知らない。物心ついた時から人の好い爺や岩藏と、優しい乳母やお作との愛の翼の下で大きくなつて行つた。正弘に父母があるを聞いて……しみじみ言ふ。

「……俺もほんたうのお母さんに逢つてみてえや」
二人は顔立から姿までよく似てゐる。村人達に言はれるま

に、水滴に姿をうつし合つて、お互に「似てゐるね」こ、無邪氣に笑ひ合つたりする。事實、玉太郎の育ての親お作さへも、たづさへてゐた籠を落して驚いた程である。

二人は仲好く遊んでゐる。そこへ正弘を探しに來た母の環が、女中のおはまをつれて出て來る。やがて、父の隆弘、祖父の傳三なども來合す。正弘は自分のこの土地で得た一新らしい遊び友達「玉坊」を父母達に引合せる。一同はこの正弘に「兄弟のごましく似てゐる」子供玉太郎に、驚き乍ら、その子供の、田舎には珍らしい氣さくさや、人なつづこさなきに、正弘がよい友達を得たのを喜ぶ。なかにも父の隆弘なきは、女中に菓子包を出させて手渡ししたりし乍ら、名前を問ふたり、父母がなければ淋しいだらうこ、正弘も仲好くしてやつてくれ、なきこ言ふ。

「たゞ母の環のみは玉太郎の顔を見つめ乍ら何も言はない。彼女は玉太郎が何故かしら我が子のやうな氣がして仕方がなかつたのだ。わが子なれば十一年以前に……死んでゐるか、生きてゐるか……彼女は胸底深く扉を閉してゐた心の密室にあるほのかなる戦慄を感じたのである。環の口はおそろしく蒼ざめて、指先が神經質におののいてゐる。

こ、上手からお作が出て來た。彼女はすがりつく玉太郎を抱きよせ乍ら、菓子包のお禮を言ふ。お禮を言ひ乍ら、傳三

こ顔を見合した！一瞬！二人の表情には驚の強いシヨックが表れる。二瞬！三瞬！けれども、その表情は二人の内心深く藏はれてしまつたらしい。誰も氣付くものはない！否！敏感なる子供の何が何のかを讀み取つた！

かうした危機をはらんだま、舞臺の緊張は續く。二人の子供は手に手を取つて仲好く遊びに行つた！けれども勿論、危機は滅殺されない。そのま、お作も隆弘の會話は續く。玉太郎の身の上についてである。子供の新しい友達の養母であるこのみ知る隆弘も、少なくも何かを直覺したお作の！

「……ほんとうに素直に育つてゐる……孤兒ださうだが、亡くなられた御両親は相當な人達だつたらうね」

「へえ、いゝえ、両親は亡くなつたんぢや御座いませんが……立派に有るので御座いますが……父親の名は譯あつて、聞かぬいつもりで預つたが、母親の各はよく知つてゐます名ばかりぢやねえ。顔まで知つて居ます……」

それからお作は語る。

それはお作が十何年か以前、東京の舊主人の家に身を寄せてゐた折である。或る晩、使ひに出て厩橋まで歸つて來た時若い娘が身を投げやうこしてゐる。驚いて止めて連れて來てわけを問ふこ、女は男にだまされて身重になつた果てに捨てられた。——その生れた子が玉太郎。

「あの子は赤子の時から運が悪い子だよ……今、その母親はさうしてゐるか、さだめし立派な人の奥様になつて、子供でも出来て、玉坊の事などは忘れ果て、居やう。……だが、不びんな子はそれでもその母をしひ續けて……」

これ以上の臺辭は環に對して残酷ではないだらうか。彼女は今はずきり何れもかも知つてしまつた。恐れてゐた事がつひに事實であつたのだ！ だがさりけなさを装はねばならない彼女でもあつたのだ！ 彼女は泣き度いであらう。叫び度いであらう。けれども、それに對してまるで他人の如く答へねばならない彼女であつた！ それは「淫き世」の義理や、恩愛の絆が太く細かくからんでゐる！ さうして彼女は石のやうに冷淡を強ひられたまゝで、一同に伴に養命館の方に歸つてしまふ。正弘の手を引いて！

あごには取のこされた浪の音である。
あごには取のこされたお作と玉太郎がある。見よ！ 何ものか、何ものかが玉太郎を花道をほるかに見送らす。

「あゝ、あのひとも玉坊のお母さまではなかつたのか——自分にもあんなお母さまがひそり欲しい」

お作の胸に顔をうづめて「お母さんに逢ひてえや」ミ、聞きわけない玉太郎である。その言葉にお作も苦しい。あゝ、この子の母は知つてゐる。けれども立派に名乗らすこも出

來まい。せめて——せめて、——あの女から一言でも——、玉太郎よ、よい子よ、養命館に遊びに行つておいで——そしてあの小母さまに會つたら、そしてあたりに人がなかつたらたつたひここ「お母さん——」ミ、小聲で、だが精いつばい叫んでおいで——

喜んでかけ出した玉太郎、けれども氣弱さから養命館に入れない。「羞しい」ミ歸つて来る。そして東京に去る養父の岩藏に「クレオンの色鉛筆を土産に買つて」ミ、無邪氣にねだるのである。

夜になつた。いや、夕方である。玉太郎一人、松の木により物思はしげに花道の方を見てゐる。波の音。

「沖のかもめに汐時聞けば、私や立つ鳥浪に聞け
唄尻があわれにふるへて、そして又、波の音!!!
花道から環、悄然として一人靜かに出て来る。あゝ、つひに一切を投げすて、「母」ミして——然りか——否か！

二人は共に走り寄つた。そして幾度か抱かうミした。そして抱かれやうミした。何故に、その手は勇敢に抱かないのだその前に手をさしのべた最愛の者を、環よ！

環よ、お前は、この場になつても「わたしはお前の母なんだ」ミ、言ふ事が出来ないのか。

「おいらお母さんに逢ふためだつたら何處まででも……」

「玉坊よ、世の中には、いろ／＼悲しい掟があるのだよ。……だけれどね。此處にゐる間だけ、妾、お前のお母さまになつてあげる……」

「おいら誰にも言はねいから、ちつちやい聲でもいゝから本統のお母さんだと言つて下さいね。ね、ねい」

流石、「母」は玉太郎を抱きよせた。しつかりミ。そして無言、月に向つて立ちつくした。石のやうに無表情で——一切の表情が化石したやうな無表情で——その心情は月のみが知つてゐる。彼女はかうして立つてゐるのだ。永遠に！

和田お作の家の塙

第一塙を語り過つた自分はこの塙は荒筋だけで終る事とする
お作の家、佛壇、その前に漁師四五人が玉太郎と正弘の屍體を運んで来る。運命はより悪いめぐりふだを彼等に與へたのである。正弘は水に溺れた。それを救はうとした玉太郎も死んでしまつた。健氣にも……

この二人の死を前にして、その母親環は、湧出する悲しみを制する事が出来なかつた。彼女は同じ悲しみに閉ざれたお作にさんけする——

「二人は妾——その母親の罪を背負つて死んだのです」
「奥様、あなたが玉坊のお母さんである事を妾は初から知

つて居ました。何言生きてゐる間に一言母だ」言つてやつて下さらなかつた。二人は兄弟知らずに死んでしまつた！——環は答ふる言葉もなかつた。二人は涙に埋れて行く——やがて隆弘が来た！環は思切つて、自分が隆弘に嫁ぐ前に塚口さいふ男にだまされて玉太郎を生んだ事實を懺悔する（この事實を言へなかつた故に母親と名乗り得なかつたのだ）隆弘は淋しく、しかし男らしく「離別しやう」言ふ。

所へたま／＼來合せた塚口が、環のために大に辯ずる。即ち自分が環をだました事、環に罪のない事、だから環をゆるしてやつてくれと頼む——塚口も生來の悪人ではなかつた。時、おはまが、養命館で環の父傳三が自殺した事を傳へる父ミ子の死にはさまれてもかく環！

腕組して立つた隆弘の口から言葉が洩れた。
「環、私はお前を許しました」
かくしてこの運命にゑがかれた物語の幕は閉ぢるのである

配 役

漁師	岩造	高梨
お作	和田玉太郎	工藤
櫻戸息	正弘	藤正
漁師	お作	伊東
櫻戸慶	三作	河合
隆弘	三作	伊志井
環	三作	小織
		田桂
		式一
		部郎
		寛雄
		齋夫
		堂

浪花座七月興行上演(眞山青果氏作)

芝居
見たまま
紅燈新話

石

原

泉

二



序幕 鶴見花月園

遠く神奈川の海濱を見晴した高臺
新緑の滴る夏の風景を配して、下手
に茶屋がかつた休息所の一部が見え
ます。

平塚火薬會社の納涼會の當日、藝
者多勢に取巻かれて社員等が八木節
の踊を観てゐます。會社員の西茂吉
が赤阪の藝妓染次を連れて來る。西
は火薬會社の技師長稻岡桂吉に染次
の取もちをたのまれたのでした。稻
岡さいふのは新進の學說とその卓抜
の見識を以て斯界の錚々たる權威こ

して、社内でも彼の明晰な頭腦を縦横に働かす機智は、重役仲間
の氣に入つて特別の待遇を絶對信用を措かれて居ます。し
かし、このよき性質の反面には又大きな缺點もありました。

性來多情な彼は女の問題になると分別も理解もなくなつてそ
れがためには忌しい行爲も敢て辭さない程の痴け者になつて
終ふのでした。彼の天性の美貌と巧な辯口は、單純で無智な
狹斜の女たちをいくたり陥入れたか知れません。俗に色魔さ
いふのは彼のやうな人間をいふのでしよう。稻岡の繩張りで
ある芳町邊の藝者を漁りつくして、最後に彼の眼に止つたの
が、嘗て稻岡が書生時代の恩師篠崎兵衛の情人で芳町の姐さ
ん株の染次でした。一度思ひこむと矢も楯も堪らない彼の性
質ではありますが、何をいふにも恩師に當る人の情人、まし
てその間には子供までも生じたこともある、それを薄々知つ
てゐる彼をして、他の女を口説くやうに鐵面皮くも云へぬの
で、その取持ちを西にたのんだのでした。狼狽ものの西は赤
阪の染次といふ藝者を稻岡のそれと取違へて口説落さうとし
ますが、女は稻岡を知る筈がないので、中々意思が疎通しま
せん。

— 何んだか變だはね。

— 變な事があるものか、稻岡は學生時代にお前を見染め
たんだよ、今日大勢の中に君が來てゐるのを見て、俺

を陰によんで是非たのむさいふことになつたんだ、君
には何んでも意地になつてゐるころがあるんださうだ
しかし、稻岡には外に染次の家から看板を借りて出でてゐる
玉蝶といふ大阪下りの着物の襟に毒薬を縫ひこんで持つてゐ
る藝者が大變なのほせ方で、ダイヤの指輪から虎の子の貯金
までも入り上げてゐるのでした。西が稻岡に赤阪の染次を取
持つてゐることを聞いて血相變へて其處へやつて來ました。

染次の幼な友達でやはり芳町の年増藝者の磯代が、さかん
に玉蝶をけしがるので遂に赤阪の染次と玉蝶は火花を散ら
しての大喧嘩、泣く、喚く、怒鳴る、大變な伊達引が始りま
した。そんなことを知らない當の芳町の染次は、何處の席で
飲んだのかしたゝか酔ひしれて足許も危く、磯代にすゝめら
れて喧嘩を見に來ました。西は染次が小萬といつてゐる時分
からの馴染でしたが、今芳町で染次と名改へて出でゐるこ
をその時初めて知つたのでした。

西も自分のおつちよこちよいから取りかへしのつかないそ
の場面を今更引込みもつかなくなつて當惑して終ひました。
漸くのこゝで赤阪の染次と玉蝶を宥めて一同が連れて行きま
した。

— 酔ひ疲れで床几へ突伏して居る染次に、西は又稻岡の話を
持ちかけました。篠崎と別れてからは堅氣で通つてゐるしつ

かりもの、芳町の姐さんにして藝一方でたて通してゐる今の染次まで、そんな浮ついた話は何んで聴かれる筈がありませう。まして篠崎の書生をしてる男も聞いて、意地張りで感情の強い染次は、西のその取持ちに極度の屈辱を感じました。

——お前さん、いくつだつけね。

——さうして。

——儲か三十九だ、四十のそらに手が届こうさいふのに、なるのならないの、引合せるのさ未だそんなピン下を働いてゐるの。

玉蝶からも薄々稲岡さいふ名前は訊いてゐたのですが、遣り口が餘りあごぎなので染次も内々反感を抱いてゐる所へ例の氣性でして我慢が出来なかつたので感情に任せて毒つきました。

——繁昌に任せて餘り姐さん顔をするなよ、子供まで生した仲だ、俺に遇つたら篠崎のこどもも一言ぐらい訊きそ

うなものだ。金がたまるささうしたものかなあ。

篠崎が火薬會社で全盛の頃、染次ミの仲を取もつたのも西でした。その頃まだ初心な染次は養母の眼を怖れながらも、篠崎に心が索かれて箱根まで一緒に逃げたこどもあつた仲でした。西から當時のこどもを話されるさ、染次も懐かしい過ぎ去

つた日が甦つて來るのでした。

——もうくきかない、昔の話だ、今更何う云つても歸らぬ愚痴さ。

すつかり諦めてゐる平靜な心を掻き亂されて染次は忘れてゐた子供のこどもから、篠崎の身の上へ心が急せて行きました……子を生んで二三年するさ、何時別れるさもなく遠々しくなつて、何うして今のやうになつたのだへ、一緒にならう云つても難しい仲ぢやなかつたのに？

……自然いつとなく遠々しくなるのが藝者さ客さ、別にあきたさいふでもなし、あかれたさいふでもないのに途絶え勝ちになるさ見えるね——はかないさか、味氣ないさかいふのはこゝらのこどもでも云つたららう染次のことやわらいで、しんみりミ打解けて來ました、其處へ玉蝶の姿が見えたので、西は入れ違ひに稲岡を呼びに行きました。玉蝶は稲岡の愚痴を言ひに來たのですが、染次が酔つてゐる中々受入れてくれないので引返して行きます。

時代の急激な流れに何時かさりのこざれて篠崎兵衛は、今日では昔の全盛もなく、彼の學說も技術も新興の時代には容れられなくなつて凋落の日を浪々に暮す人になりました。そのなるさ學者氣質の世事に疎い彼は、全く收入の道も無くなつて生活の資にもこどもを缺くやうになりました。會社の杉村

高谷は今會社で權威のある稻岡に斡旋して、篠崎を世の中へ再び廻らせやうと、この席へ招いたのでした。

夕暗のベールが四圍を掩つて寂寞とした茶店で、冷たい夕風に醉眼を見開いた染次は、偶然にも篠崎の姿を其處に見出し、ました。

—— 貴方。

—— お、お前…… 稻岡の座敷に来て居たんですか。

別れくになつても堅く信じ合つてゐる仲は云へ、稻岡の席に染次が招れてゐるのを見れば、嫉妬を感じないわけに行きませんでした。

—— い、え、もうこうなつてはおしまいです。

—— 大變繁昌してゐられるとは聞いて居ります。

—— い、え、もうこうなつてはおしまいです。一日だつて面白くない日、ありません。

—— お互です、時世が變りましたよ、自分ぢや若いこれからのつもりでも、世間では何時か葬つて居ますよ。

篠崎の言葉には現在の彼を語る實感がひそんでゐました。篠崎が直ぐに歸るに云ひ出したので染次は二人の間に生れた篤の様子を尋ねましたが、只一言冷く心配するなと云つて歸つて行きました。おちづれた情人の後姿をほんやり見送つてゐる染次の背後から、稻岡は懐さうに聲をかけた。

—— 姉さんぢやありませんか。

—— え、貴方は。

—— 稻岡です、御機嫌よろしう、お名前を聞いて實になつかしく思つてゐました、お久しぶりでございます。

染次は稻岡を訊いて、冷い先入觀の眼で見返りました。

……あの田舎臭い貴方が、そこでもこゝでも有名な女たらしにおなりなのだから、随分昔の話ですねえ。

稻岡は自制のない意思の弱い自分の破廉恥を披瀝して、中心から後悔した人のやうに振舞ひました、そうした芝居をやつてゐるうちに自分でもそれが事實のやうに思はれて、妙に感傷的な氣持ちで染次に縋らん計りに戀へるのでした。

—— 先刻西に頼んで貴方に會ひたかつたのも、實はこの弱點を聞いていたといつて貴方のお力を借りたかつたのです。

向ふ氣計り強くて情にもろい染次は、稻岡に對して次第に好意を感じて來た。「この弱い男を救つてやりたい」といふ同情心に變つて來ました…… 打解けた二人の間にはそれからいくつかの盃が往復しました。夕暗はすっかり四邊を掩つて、神奈川邊の赤い灯がちら／＼と瞬いてゐます。

一幕目 久松座樂屋

次の間附きの樂屋、艶めかしい鏡臺が四五ヶ所に並び、舞踊の衣裳や小道具がきらびやかに點在して、壁に出演順の札、最前先よりのおくりものピラナぞがはられてあります。浪花町芳町邊の夏の大さらいの當日。——大勢の藝者が集つて染次ミ稻岡の噂をしてゐます。

染次は酒癖が悪いので大概の席でも盃を口にしないこゝにしてゐます、それを鶴見の會で稻岡に意見しながらつい飲み過して、正體もなく酔ひつづれて終ひました。染次に未練を遺してゐる稻岡は親切ごかしに介抱して、同じ自動車であつて歸りました。それから二人の浮名がばつミ立つて、今日の滷習會でもその噂でもちきりです。

染次は鶴見以來篠崎のこゝ、二人の間に生れた篤のこゝがしきりに憶ひ出されて、さかく氣分が減入つて惱んでゐましたので、華やかな舞臺へでも出たら氣分も紛れやうミ、一役買つて出るこゝにしました。

染次が這入つて來たので申合せたやうに一同が口を噤んで終ひました。

——何うしたのさ、みんな黙つて終つて。何か相談でもあつたんぢやあないの。

そんなこゝはつゆ知らない染次は怪訝な顔をして、ちやらずなぞに話かけても何うも辻褄が合ひません、あつけに取ら

れた染次を遺して、一同が嘲笑をた、へ乍ら出て行きましたその跡へ落語家の圓吉ミ三徳が這入つて來ました、稻岡が大勢を連れて見物に來てゐるミ告げるので、染次ははじめて何かに行當つたやうな氣がしました。

——いろ／＼つかいものや積物があるミ思つたら、みんな稻岡さんの差圖なんだね。

染次の腑に落ちなかつた仲間の仕打や、玉蝶なぞの他所他所しい態度稻初めて合點がゆきました。稻岡の云ふこゝを眞實ミ思へばこそそれミなく姉のやうな心で意見もし慰めてもやつたのに、それを裏切つて却つて恥めるやうな態度に染次は怒氣に震へ乍ら其處へつづぶして終ひました。圓吉ミ三徳は不審さうに出て行く。それミ入れ違ひに忍びやかに磯代が入つて來ました。

——染ちゃん、大變な評判だよ……お前さんこの土地で稻岡さんに時々會つてゐたのかへ、私やちつミも知らなかつた。

——いやだよ磯ちゃん、お前さんも私の酒は知つてゐるだらう、ほんミにあの時だけは前後不覺さ。

染次が事情を話してゐる内に知らせが來たので、あわて、磯代が出て行きました。染次は衣裳を着けるのも忘れて呆然ミ考へこんでゐます。するミ向ひ會つてゐた姿見に稻岡

の影がうつりましたので、

——あゝ稲岡さん……。

——僕は何うしても諦められないんだ、染次それぢや餘り残酷だらうと思ふ。

——稲岡さん、まあお坐んなさい、呆れた方だ。

——玉蝶の姿が樂屋ののれん口に垣間見えませう。

二幕目二場 豊の家立關

待合豊の家の入口で稲岡と篠崎の妻のお増が立話をしてゐます。話の様子では篠崎の身の振り方を稲岡に懇願してゐるらしいのです。稲岡は藥品の製方を他の會社へ二重賣するため、窮状にある篠崎をその手先に使つて一儲けする考へなのです。兎に角篠崎に豊の家へ直ぐくるやうに言傳てしてお増を歸します。

——鶴見のこゝから玉蝶は染次を怨んで、他から看板を借りて出ることにしました。よもやと思つてゐた染次が生命にかへてもと思ふ稲岡を寝取つた此一圖に誤解して終ひました。しかし、稲岡に面々向つては惚れてゐる弱身か思ふこゝの半分も云へないのです。その二人が入口でばつたり顔を合せました。

——おや、そんな所に何してゐるの。

——些つこ用があつたんだ、然し威張つてゐても遂に來たな。

——稲岡は得意さうに冷笑の視線を玉蝶に向けながらいひました。

——あなたにはやつぱりかなはないわ、又騙されるんだ——

——馬鹿を云ふな、行つて見ろ、用意が出來てゐるんだ、

——あの染次の高慢ちきな鼻先を今日はギウ／＼疊へこすりつけてやるんだ。

——先刻から磯代が障子の内でその話を立聞きしてゐました。

——豊の家の前へ俣が止つて、中から降りたのは大ざらいの會から稲岡との約束で廻つて來た染次です。こかげに隠れてゐた磯代は染次の行手へ立閉つて、玄關の中で立聴きした仔細を話してしきりに引取るやうにすゝめてゐます。

——玉蝶が來てゐるんなら餘計歸つちや不可ないんだよ、

——先刻稲岡さんの心得違ひを意見してあげたんだよ……
——そしたら稲岡さんも私の話がよく分つて、涙まで滾して私に禮をいつたくらいだもの……。

——こゝろがこゝえ篠崎さんも來るらしいんだよ、何んでも話の様子では、篠崎さんが勤口か仕事の口でも頼んでゐるらしいんだよ。

——別れてから何年か消息すら判らなかつた篠崎が、今日そん

なに零落して居やうとは染次には、想像もできませんでしたやつぱり昔のやうに製薬科學の權威として、稻岡などは同日の比でないに信じてゐます、ですから磯代の話も何かの聞き違ひだらうぐらゐに考へて終ひました。其處へ玉蝶がうやうやしく、如何にもわざとらしい態度で落付はらつて二人を出迎へに來ました。染次は不審さうに磯代と顔を見合せる。

……幕……

二幕目三場 豊の家廣間

豊の家の大廣間、出入の襖はさびはす衝立さびはす、稻の丸に封じ文の切抜繪をべた／＼と張る。

稻岡は染次が手強くて中々自分の意に隨はぬので、卑怯にも玉蝶を恠にして染次に復讐しやうとして、二人を諷刺した悪戯を仕組んだのでした。稻岡、西、高野などを大勢の藝妓が取巻いて酒宴を始めてゐます。其處へ玉蝶が染次と磯代を案内してきました。

——さ、姉さんあちらへ。

玉蝶は憎く／＼しい程取りすまして染次を稻岡の隣へ座らせやうとします。染次は張りつけた定紋や玉蝶の馬鹿丁寧な態度と自分に向けられた一同の冷嘲を含んだ視線で、稻岡に謀られたこゝを初めて知りました。氣の弱い女です直ぐ歸

るころですが、負んきの例の意地張が頭を擡けて來ました磯代は染次の氣持を察して、袖をひいて歸るやうにすゝめます。

——あゝそうそう、お前さん、ご挨拶だけで後が急ぐんだらう、私もあきらま直ぐ行くから先に行つて頂戴！
何、いゝんだよ。

染次は怒りに聲も上つて涙さへた、へて、手先がわな／＼と痙攣してゐる。西や高野が染次に嫌がらせや皮肉を云ふ度に、ごつ／＼と嘲笑が上ります。染次は堪りかねて、

——稻岡さん！

——何んだね！

——貴方先刻あれ程云つて置き乍ら……私に復讐でもなさらうさいふんですか。

——復讐、へえ、これで貴方に復讐になりますか、こりや面白い、こんなこゝで復讐になるのなら、僕は喜んで復讐しますよ。

——稻岡はあくまでふて／＼しくかまへる、染次は感情が一度にこみ上げて憤怒の餘り泣くにも泣かれないのでした。

——染ちゃん、お前お歸り、私の云ふこゝきかれないの。
——歸れないぢやないの。

——磯代は案じて染次を連れて歸らうと、焦々／＼と追ひつし

てゐます、稲岡は其の上篠崎に染次を突合せてあくまで腹癒せをしやうさいふ考へなのです。一同の話題は遂に篠崎の上及びました、篠崎が窮状をうつたへて稲岡に救ひを求めに來たこゝ、時代に遅れた敗戦者であるこゝなぞを玉蝶までが一緒になつて侮蔑します。

染次は自分の唯一の味方であり、両親よりも誰よりもこの世の中で一番自分を理解してくれる大切な人、その篠崎を満座の中で羞められて、氣も轉倒せん計りです。

——稲岡さん、いかに見得の場所だつて大概になさい、現在自分の育てられた先生をおごしめして何うなりますか、この話を座敷へ入らうとして立聞いた篠崎は氣不味さに引返さうとしましたが稲岡に見附けられて終ひました。篠崎は自分の總てを投げ出して稲岡に救ひを求めました。

——いやもう背に腹はかへられない、君が命令するこゝなら、僕は何んでも喜んで服従します。

篠崎のこの言葉を聞いた時、染次の信念も期待も根底から裏切られました。染次はあさましい篠崎の姿に啞然として口も出せない程でした。しかしこの場の意氣張上こゝで引き下つては身が立たない、染次は思ひました。

——貴方そんなにお困りなら……稲岡さんに頭なぞ下けて……貴方も日本の篠崎も……

——女なぞの知らうか、餘計な口を出しなざるな……私に鶴見の時から不審に思つた事もある、何事も云つてくれるな。

すべては無駄になりました、こうなるに染次も磯代も全く憐れな立場になつて終ひました、そして一同の嘲笑は彌が上に増す計りでした。

——染ちゃん、斯うなりやお前もシヤバツ氣をお出しな——稲岡さんの膝にもたれるのさ、男をこつてやるんだよ、爲るこゝもなさらなないで、不貞の何んのこやきもちやきの顔も見られるし、高くこまつてゐる高慢ちきな女の鼻先も折るさいふものだ……

篠崎の不甲斐なさ……玉蝶の憎々しさ……稲岡の卑怯さ……染次も思案に餘つて、決然と身を起して稲岡の膝へしなだれて媚をつくりました。

——稲岡さん。何をやる。

——邪慳ね、話があるのよ……染次は涙をのんで敵の陥罪に陥りました。戀敵に不意討をされて玉蝶はむつこして立上りました。

三幕目第一場 芳町染次の家

總て浪花町邊の意氣ミ數寄好みの主の氣持が伺へる造り、上手離れへ連く廻り椽になつてゐる。

染次は意氣張つてで稻岡を引取りました。玉蝶への面當て一つには篠崎への怨みを含んでゐました。玉蝶は稻岡と別れてから、株屋の旦那がついて十二三人も抱妓を置いて素張しい全盛振りでした。離屋を普請するこか建増をするこか、玉蝶の方で何かやる度に染次は一々對抗して見符を張り新らしく離れを普請したのもそのためでした。

稻岡は遊蕩の金に窮して會社の金を費ひ込み、抜き差ししない張目に陥りました。彌縫策に會社の火藥の製法を外國會社に二重賣しやうとして、篠崎を其の手に使つてゐるのです。友人の西ミ高野は會社の命令で稻岡の身元を調べに來て、染次の養母おいくに所在を訪ねて居ます。

——至急稻岡君に會はないミ、ひよつミ同君に大事件が起るかも知れないんだよ！

——家探しても何んでもしたら好いでしやう、居ないミ云つたら居ないんですよ、此方ぢや稻岡さんのために、それ所ぢやない大へん迷惑してゐるんですよ。

おいくは染次が年下の稻岡に惚れ込んで、愛に溺れてゐるのだミ誤解して怒つて居ります。稻岡を引取つてからは染次が玉蝶と張合つて空虚などに贅澤をするのミ、稻岡の生活全

部の負擔をしてゐるので、四方に大へんな借債を生じて終ひました。その上稻岡が來てから染次が氣がそわ／＼ミして落着かず、只男のこミ乍りを案じてゐますので、養母ミしては不満で堪りません。染次は出の着物で座敷へ行こうミして二階から降りて來ます。出合頭に稻岡は外から愉快ミ戻つて來ました。そして西を見るミ突然喰つてかゝりました。

——西、何しに來たんだ——何か喰ぎ出しに來たんだらう……犬の……さあ突出すんなら突出せ、覺悟してゐる罪ある人の常ミして、稻岡も自分から名乗りを上げて、一圖に不貞腐れてゐます。二人がいくら辨解しても訊き入れやうミしません。

染次は稻岡の昨今の落着かぬ態度に、只ならぬ豫感を覺えて、罪を未然に防けたら防ごうミ焦つてゐます。玉蝶の手から離れた稻岡を社會的に葬られて終ふやうなこミがあつては今迄の染次の心づくしは何んにもならないし、玉蝶への意地もた、なくなるからでした。折があつたらたづねて見やうミそののみ案じてゐるのです。染次が止めるを突き倒して又稻岡はふつミ戸外へ出て行くので、西ミ高野がその跡を追ひ馳けて行きました。

染次の今の氣持は誰にも判りませんでした。一番親しい友達の磯代ですら染次には愛想を盡かしてゐます。一層稻岡ミ

別れさせて旦那取りでもさせたら梁次を救ふこゝが出来らうに、梁次に氣のある火藥會社の重役の豊島の語を持つて來ます。

——ぢや何かい、旦那取りは出来ない云ふんだね。

——大概つもつても……私の心のうちも察しておくれよ。

——嫌なら無理とは云はないよ——次に聞きたいのは篤さんのこゝなんだがね。

篠崎との間に出來た子供のこゝを云はれるに、梁次は致命的な惱みを覺えるのでした。子供を篠崎の處へ渡す時縁を切つたやうなものです。腹をいためた子を何うして忘れませうまして現在の恥すべき自分の姿を顧みた時それは餘り悲しいたへ難いこゝでした。

——磯ちゃん、思ひ出すよ、夢にも見るよ、黙つてゐても心の中では……。

梁次は惱みが二重にも三重にも累なつて氣も轉倒せん乍らに精神が混亂して、遂に泣き伏して終ひました。

磯代が相談があるから養母のおいぐを連れて出馳けるに其處へ稻岡が忍んで歸つて來ました。

——先刻の素振り云ひ、今の様子……私や驚かない云つて下さい、稻岡さん、貴方は何か悪いこゝしてゐるね……かくさずに何うか云つて下さい。

——梁次！何も云はず頼む、俺と一緒に逃げてくれ。

その語の折柄箱屋が玉蝶の所から荷物を持つて來ます、指輪から着物迄稻岡に拵へてもらつた品物一切を届けに來ました。稻岡の身邊が危険になつてゐるので、若しか、り合ひになつてはめんさう先を見越したからです。稻岡は玉蝶の餘りな仕打に地駄太踏みました……

犯した罪のため殆んぎ平靜を失つてゐる彼は心焦くま、一緒に逃げてくれと迫りますが、梁次は篤のこゝが氣になつて安否が判らぬうちは厭だといひますので、稻岡は怒つて愛想づかしをして出て行かうとします。

——もう姫いこゝをいひません、貴方は滿州なり米國なりへ逃げて下さい、さうす、めても罪を悔ひ自訴する心がないのなら……途中の旅費は必ず妾がつくりませう其處へ篠崎の姿が見えるので裏口へ廻るやうに合圖をして稻岡は梁次を突きつけて庭へ降りる。

火藥會社の重役豊島は梁次に心があるのでは無かつたのでした。梁次に近寄つて稻岡に會ひたかつたのです、前途ある天才稻岡の人物が惜しいので、それさなく意見をしやうと來たのです。稻岡の姿は其處には見えませんでした。

大詰 同じく離屋

未だ竣工しない普請場、灯もない薄暗の中に篠崎と稲岡が
 對談してゐます。善良な篠崎は藥品の製法書密賣に失敗して
 總ての悪事は露見して終つたミ報告します。

——勝手にせい。

稲岡は悪罵を浴びせて暗の中へ姿を消して行きました。篠
 崎は潔く自首せんミ立上りました。その時薄暗の中から染次
 は聲をかけました。

——あ、まつて篠崎さん、これが一生のお別れになるん
 です。

——む。

——待つて下さいよ、快よくお別れしたい。

——む。

玉蝶が先刻返して寄こした着物の襟に秘められたモルヒネ
 を、井の酒に混じて持つて來ました。二人は半分宛飲みまし
 た。染次は死に際してせめて篤の安否を聽いて死にたかつた
 のでした。

——篠崎さん、篤のこみをきかせて、早く〜〜〜息のあ
 るうちに。

——篤は死んだ……去年の十一月病氣で死んだ。

——え、篤は死にましたか……。

——二人は次第に毒が五體へ廻つて來ました。呼ぶこえも求む

るこえも苦しさに喘いでゐます。二人は手を取り合つた。

——篤は死ぬ時笑つて……笑つて死んだ……お前を母だミ
 聞かせた……話した。

——篤が……笑つた……。

その時篠崎は胸を掻きむしつて、微な呻きミ共に息絶へま
 した。染次はおいくの呼聲に應じて、無意識によろよろミ廻
 り縁へ五六步踏みしめました。寂ミした四圍に染次の喘ぐ息
 が微動し、手にせる懷紙がはら〜〜ミ庭に散り布いて、染次
 は仰向けに打倒れました。

月光が庭深くびえて、二つの死の斷末魔を彩つてゐます。

(おはり)

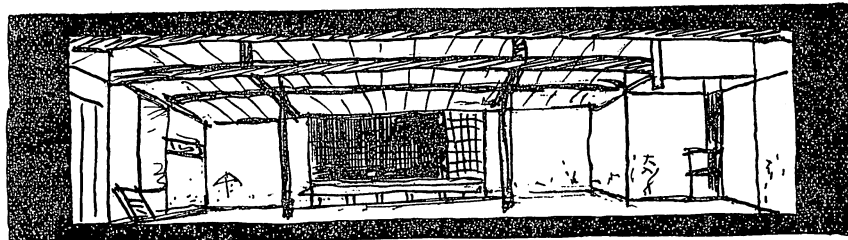
配 役

同	落語家	丹	三	桂	德	吉	山	中	團	九	郎
高	屋	杉	村	篠	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉
健	芳	兵	衛	次	蝶	代	木	吉	永	豐	次
三	夫	玉	小	河	英	木	下	吉	之	助	郎
吉	野	玉	織	合	太	太	吉	之	助	郎	郎
藤	澤	川	桂	武	太	太	吉	之	助	郎	郎
村	英	一	登	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎
啓	秀	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫
太	太	太	太	太	太	太	太	太	太	太	太
郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎

浪花座七月興行（瀬戸英一氏作）

芝居
ばなし
新四谷怪談

素木宗一



まあもつこ椽端の方へ出て下さい
こちらから涼しい風が少しは流れて
くるやうですから——。

今晚のやうに蒸暑い怪談でも凄
く聞いてみたくなりますね。……え
？そんなら「新四谷怪談」の話をし
ろつて？これは恐れ入ります。なに
しろ私は昨日浪花座の初日を見たば
かりで、お話する筋道の後先を、こ
んがらがすかも知れませぬよ。それ
でも構はないとは近頃の御執心——
ぢや、まづ、私のいこともたよりの
話を聞いた上で、河合武雄丈の凄
麗な舞臺を見物に行つていらつしやい

それも観劇の一方便かも知りませぬ。その代り、ぜひ、浪
花座へお越しにならないと私が迷惑しますよ。それほど手短
かな筋書しきやお話できないんですから……。

片鄙な田舎の芝居小屋——しかも樂屋の三階、大部屋に來
ちや眼も當てられた感ぢやありません。衣裳行李の蓋がパク
ンと開いて、紅布が汚なくかぎ裂に引ツか、つて、床山の臺
ですな……竹の皮の喰ひ荒し、古新聞が千切れて羽目板に挟
まつて……いや、見るもの觸るものがみぢめで醜くて、おま
けに哀れッほくなる。それが夜——だから、五燭の電燈で大
低ガツカリになりませぬ……。

そんな陰氣な廊下の一室にお峰は此頃、毎日毎夜、病寢れ
の細ッほい身體を横にしたツつきり、切なさうに呻いて居たの
です。お峰ではわかりませんが、この芝居にか、つてゐる
一座の役者中山仙十郎の女房です。だが、色男の亭主はこれ

を死ねがしに打ッちやりにする。従つて誰も外から構ふものはない。言はゞ今日が日では衣裳屋の女房お關丈け、そこは女同志の思ひやりで、明け暮れの面倒を、まあ、さうにか慰うにか見てゐるつて、ぐらいのものなんでした。

そんなら亭主の中山仙十郎は何をしてゐる？

これは文句通りの内を外の放埒三昧ツて羨しい寸法です。

何んでも春の家つて粹な場所に奇麗なあの女があつて、それに、ゾツコンつて、仔細で。その女をお富言ひます。

その春の家から今晚の只今、酔つた幽霊が使ひに来て……と言つちや筋がわからなくなるが、近日「四ツ谷怪談」の狂言が演るので、そのお岩の衣裳、凄い眼蓋で美々しく……美々しくも可怪しいが、なにしろ其處は役者稼業、手に入つたもので、好之助つて下ツぱの奴が、お岩に扮して、突然、物影からドロドロ……こぼれたから、圍碁で夢中の大部屋一同「うわあッ」ミ泡を喰つたわけで、正體見れば、これ、調伏也です……春の家の座敷から抜け出しましたる人語を解する幽霊、なるがゆえに、酒も飲む。こゝ元、足だけは幽霊以上に怪しいミ云ふ陽氣沙汰です。

それで仙十郎のお座敷を招はれるんだから、かゝる場合に遠慮ミ言ふ奴はなくなる。つまり、遠慮そのものが遠慮して退散するから、厚顔しいの一方——大部屋の總出だ。鯨波を

あけてドヤドヤドスンコツンミ退場しちまふ。妙な文句で形容しましたが、この最後のコツンは出がけに狼狽て、柱に頭をアツつけた奴で……いや、もう、その騒々しさツたら有りやしません。その代り、この大勢が居なくなるミ、それこそ又、月並み文句だが、そら、潮の引いた跡の静けさ言ふわけになります。

尤も、この舞臺の場面は、靜かよりも凄味のほうが強く利く。——そこが作者のツケ目なんでせう。

噂のお峰がフラフラミ出ましたね。

哀れや髪は油が抜けてバサバサ散るし、病やつれの尖々しい顔、の、半分に痣がある。そんな氣味悪い姿であるながら、風采だけはキチンミ端正に着つけて裾もみださない……だから、それがけさミくびえて、却つて益々、顔が不氣味です。この生きてゐる幽霊の如きお峰が黙々ミ階下へ降りて行かうミするから、尋常ごミでない。呻いて居る病人の智でもあります。

驚いてお關が止めた。止めたぐらいで承知しない。さうでも今から春の家を突き留めて仙十郎ミ爪びらきの談判をして來るのだ、ミ言ふ思ひ詰めたる怨恨です。無理ありませんや。……捨てるなら死んで見せる。情婦のお富の面前で死んでやる。留めれば留めるで、益々以つて逆上がる。ヒステリ

「いさ言う奴ですな。誰方でもこいつあお馴染の深いもので、かう聞くだけでも身顛ひものでしやうや、お羨ましいこころで。」

結着、お關が熱心に説伏せて、病身で其處まで行けるものでもなし、ま、兎もあれ、そんなら、内の人を使ひに立て、旦那さんに此處まで戻つて貰ひませう、ミ、内の人なる衣裳屋を走らせた。……さあ、ボツボツ怪談じみて参りますからさうか、椽側から落つこちないやうに氣をつけて下さい。

使ひは出て行つたが、さうも安心がならぬ。矢張り直に行かう、ミ起ち上るのでお關は此處を先途、必死になつて病人の風采かたちで行くは却つて何ミやら……さまで説得します。それではミお峰が……せめて女の身嗜み、髪なでつけて……ツて利白が四ツ谷怪談そのものなら、聲までお岩をつくりに凄く聞える。蚊遣りを燻して化粧が本行さほり……お岩がお岩か、お岩がお岩かです。氣味が悪くて嫌になりましたね、この時は……そして、その動作は増々深刻に、三言ひませうか、あの髮梳きの件までが似てきます。

揚句の果に、「これちや私が……お岩さまね。ほ、ほ、ほ、」

ミ凄く笑つた時なんぞ、ドキリ！ミこつちが面喰らつた。——突端に、猫が鳴いて、電燈が消える……お峯が志を隠さうと塗る白粉、その加減でノツペラボウの顔に見えて、そ

いつが、薄暗かりに、首、ミ泛ぶから禰つたもんぢやない。衣裳屋が戻つてこの物凄さに「うわッ」ミ叫んだら、その聲に怯えたお關が「キヤーツ」です。ミも角、仙十郎が現れたがこの醜態、背後にや仇ッほいお富が凜々繪姿で水々しく佇んで居るのだから、他人眼にも雪ミ墨ですよ。仙十郎さツさミ引上げる。

お峯は遂ひに、口惜しさの極みです。血迷うたです。剃刀でわが咽喉をザクミ突いちやつたんです。そして死にましたこれが「上の巻」で「下の巻」の幕がひらくまでに早くも三年の年月を、樂々ミ作者はスツ飛ばしてしまひます。

舞臺は夕まぐれの旗亭、の、小意氣な茶の間、庭をめぐらせた離座敷、確かお關は下手側だつたミ覺えてゐます。

梶棒ミ後押の二人がよりの俵が花道から出ます。乗つてゐるのが、お峯——この女は三年前に樂屋で自殺したはずそれが立派に車に捲られてゐるのを、現に、私たちが見物が一齊にこの幕明きに見るんですからチト妙です。車夫は「元は役者の中山仙十郎の家」を的に、さんざ「紫陽花」の料亭の控家を探してゐる氣配です。結局、この家がさうださわかつて俵の梶棒を降ろすミお峯が居ない。車上は空……ミ言うわけて空俵を引いて歸りかけるミ、梶の中からお峯の聲がして「仙十郎の家」は未だか、ミ聞くので怪訝顔で梶を除るミ、

矢張り、ちやんこ居る。

この不氣味な女客がこの家の立關を訪れて座敷へ上る。お八重は奇妙な客だが、亭主の名前を知つてゐるので、不審ながら應接してゐる。このお八重と言ふ女、お富の次に仰へた新らしい情婦でお峯から勘定するに三人目、と言ふ譯合ひです。

不氣味な客だが仕方がない。離座敷へ通して待たせて置くに仙十郎が歸つて来た。お八重の顔が引き釣つてお峯の事を聞く。……ばかりか、顔に痣のあるまで委しく知つてゐるのでも下駄をチャンと脱いで上つた筈……こ、来て見る、こ、それ、無い!

これでは仙十郎も不氣味で心中仲々穏かでありません。酒を飲んで寝て忘れちまうこです。……所が、庭の燈籠からお峯の亡霊が抜けて出て散々、苦しめた揚句、仙十郎は井戸へ陥りかけた……ら、パツミ部屋の灯が明るく點いた。……なあ——んだ。仙十郎は蒲團の上で漢搔いてゐるのです。お八重は亭主が夢に麗されてグツタリと寝汗を掻いてゐるので井戸水で拭いて上げませうツてんで、庭の井戸端へ甲斐々々

しく伴れて降りて金盃ミタオルを持つて来さす女中の名を呼ぶに、その名が「お峯」——「ハイ」ミ二の返辭で顔を出したのが痣はないがお峯をつくりの女中。

この刹那。釣瓶繩を持つて居た仙十郎、アツミ叫んだ虚空!途端——ズルズルツ……眞逆しま。こんごこそ本當に井戸へ陥ちてしまつて、驚いて叫ぶお八重は、宙を飛ぶ蒼白い光に氣絶してしまふ騒動で、幕——なんです。特にこの「下の巻」の現實ミ夢幻の巧妙な使ひ分けは作者一流の老練な舞臺技巧で操られ、その妙諦たるや、ぢつさい、舞臺面でないミ味が出ませんや……だから、明日にも浪花座へ是非お越しなさらなくちや……芝居ばなし丈けで要領を得やうなんて、ミても頭底も。(終)

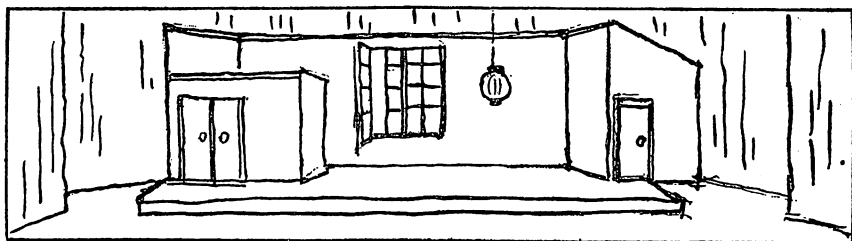
配 役

高梨依郎	吉岡啓太	玉川昇	花山英一	野澤英助	木下吉之助	藤村秀夫	河合武雄	伊志井寛	若宮井路	吉永豊次	村田式部
役者の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
A	B	C	D	徳	關	勝	お峰	お房	お富	お重	お八

角座七月興行上演（池谷信三郎氏作）

芝居 物語 歸つて來た噂

福 隅 一 孝



作家の吉村は、妻が女優な爲めに世間の男の噂が、時として耳に入るのである。然し彼は、彼女を信じてゐた。いつごんな事があるうさも作家としての彼は、女優としての彼女の立場を好く理解してゐたのである。

その吉村の友人の馬場、青木が訪ねて來て雑談に煙草の煙の渦を巻く女の噂、浮氣、戀、卑近な生活の相手を字幕に、晩春の夕暮の風景を配して、三人の男のクロスアップ……吉村は輕快に、朗らかな口吻で或る男の噂をしてゐる。

「ほんまに、かい、こゝだけの

話だ——夜汽車の二等で、二人並んで腰掛けてゐたところを窓の外からチラつみ見られたんだから」

「その前島の、やつぱりあれか？、活動の？」

馬場が吉村の顔に皮肉な視線を放けながら反問する。

「あ、……」

隣家から蓄音機が聞える……話題は何時か隣家の若い未亡人の上へ轉步する……。次は青木が口を切つた。

「僕の友人でね、女房に捨てられた男があるんだ、その當座は女の残してゐつた轉り香を蒲團の襟に感じ乍らほかんとして、寢靜つた夜など女の腕時計を獨りでこつこつ砕いてゐたそうだ」

「何うして捨てられたんだい」吉村が訊く、

「何んでも二人が餘り仲がい、ので一つの幸福を見るさ、必ずそれを崩したがる連中が、蔭で散々男の悪口を有る事ないこゝ、細君の耳に入れたんだ。金棒引さいふ奴だ」

『だつて君、そんな事ぐらいで……つまり女の愛が足りなかつたんだぬ』

吉村のこの言葉でも、彼が妻を信じてゐるこいふこゝを裏書してゐる、青木は反駁した。

『君は善良だよ、女なんてものは二本の躑躅を伸して幸福が何つちにあるか探してゐるんだ』

『君は人生の暗い方ばかり見てゐる』

『君は人生の明るい方ばかり見てゐる』

青木ミ吉村の女性觀の論議は、馬場の讀んでゐる新聞の記事に據つて、遮斷された。

『埃及の風土病で、一月も二月も眠り連ける病氣があるんだ、それを一匹の蠅が媒介するんだ……』

『なーんだ、あつちの話か……日本にはいないんだらう？』
吉村は何か反駁的に二人に對した。

『いやゐるよ、チエツ、チエツ、蠅は居ないが、あつちへぶんく、こつちへぶんく、やたらに他人の悪い印象を撒き散らして歩く好がね。そいつに刺されるミ、お互ひに愛とか友情ミか云ふが眠つてしまふ。良い評判は間接に聞くミ二倍に嬉しいか、悪口は二倍に不愉快だ。俺はちよつミ便所へ行つて来るよ、便所へ行く間も、安心して残して行ける友達は有難いよ、留守になるミ、直ぐ悪口を云はれそうな、感じの』

する男はやりきれないから、全く』

吉村は、やおら立上つてこの室を出て行つた。

噂にも色々あつて、傍觀的に批判する噂ミ、主觀に訴へての噂ミ、計畫的に出る噂ミ、良い噂、悪い噂その他數限りなくあるだらうが、悪い噂は、凡俗が聞いて喜び、喋つて嬉しがる。

然し噂された本人は、この種の噂で名譽を失つたり、生活が破壊されたり、應々結構でない事が多い。

『おや、こゝの細君のゴシップが出てゐるぞ、小暮京子つて、あれだらう、吉村の妻君の事だらう』

馬場は又新しい記事を見附け出した。

……小暮京子ロケーションの一夜……

青木ミ馬場は、その新聞を中央にしてその記事を読み出した。

『今日は！』

突然女の訪れ客である。これもキネマの女優で山住れい子

『吉村さん、貴方お氣をおつけなさらなくちゃ駄目よ、本當に』

今、友人の馬場や青木から、新聞のゴシップ種で惱まされてゐた吉村は、意外な關入者の口から、又いまいましい妻の噂を聞かされた。

「京都じゃ、もつぱら評判よ。ほら相手役の森川さんね、あれ二人でね……」

この意外な女客山住れい子は、妻の不行儀を列べ立てたそして友人の二人に今度は吉村が、かつて遊びに行つた、カフェ、テリヤの斷髮美人ミ吉村の間の話を持ち出した。

「怪しからん、俺達にかくしてそんな……」

馬場は、怒つた顔半分戯談半分、多分からかふ氣待ちで云ふた。

吉村はむきになつて辨解した。

「嘘だよ、皆んな。山住さん、駄目ぢやないですか、そんな出鱈目云つて知らない奴は本氣にするじやありませんか」

「細君を働かしやつて、留守でそんな不埒を働くなんて……」

青木は口を入れたので吉村は困り果て、しまつた。馬場や青木や山住れい子は、さんざひやかした揚句、そう

く歸つてしまつた。

吉村は今まで疑つて見た事のない妻の事が、今日に限つて妙に氣になり出した。

そこへ又、記者が、妻の噂の事で来た。果ては離婚の話までに進んでゐるミ世間では云つてゐるミ云ひ出した

吉村は堪らなくなつて来た。

「そうだ！京都へ行こう！行つて見よう……」
彼は大意で、支度をした。そうして扉のハンドルを握つたグルつミ廻した。するミ向ふでグルつミ廻し返した。

向ふの方でも握つてゐる者がある。扉が開いたかと思ふミ

「口惜しい。あたしの思守を好い事にして……あゝ口惜しい！」

妻の京子の聞である、今吉村が京都へ出向いて、世間で噂する様に妻が本當に、そうであるか、無いかミ確かめに行かうミ思つたその妻の京子がそこにあるのである。そしてその絶叫にも等しいその聲は、彼吉村を恨んでの叫である。

吉村は何が何んだを解らなくなつて来た。

「俺の方がそ云ひたいのだ。俺の側を離れたのを好い事にしてあらう事か……相手役の男……」云ひたいぞ。

「俺は今、お前の處へ出かけ様ミ思つてゐるんだ」

「ふうん、熱海へでせう、早く行つてお上げなさい、くやし」

いきなり、ハンドバックの中から、女の手紙を彼の前に四通叩き付けた。

「何をするんだ亂暴な」

「讀んだら解るわよく口惜しい」

吉村は取り敢へず讀んで見た。その手紙には全く中傷的な

好く云へば、悪戯が過ぎる、その手紙の内容、つまり断髪美人の事でもあつた。

『下らない。誰がこんな事を書いてやつたんだ』

これで吉村の方はさうやらほんのり謎が解けて来た。

それから吉村は京子にてその話をした。そして二人が苦勞して慕して来たありし日の思ひ出等を話し合つた。

『あら、あんた、墨がついてるてよ、お顔に』

京子は今までの氣持が解けて優しくなる。

『そうかい、この邊かい』

ハツケチを取り出して拭かうとしたが、うまくそこへ行かない。

『まあ、ハンカチをお貸しなさい。私しが取つてあけるわ』

京子は吉村の顔の墨を叮嚀に取つてやつた。

『噂なんて、實際、知らない間に顔につけられた墨みたいなものだね』

吉村はつくづくそう思つて云つた。

京子も吉村も、夕立の後の空の様に、カラリと請れた氣持で二人は笑つた。(完)

配 青馬 木村の友人
吉村の友人
山村の友人
山住の友人
新新聞記者
小春 京子の妻 映畫女優

竹内良一
高田二子
東柳愛子
岡田嘉子
岡田三子

道頓堀行進曲

上演脚本は、本誌新年號(第三年、第十六輯)に掲載されてゐます。御希望の方には(定價二十六錢郵稅共)にて頒布いたします。

此度の角座上演道頓堀行進曲の配役は

- | | | | |
|--------------|-------|-------|-------|
| ウエイトレス華子 | 岡田 嘉子 | 第三の女中 | 小泉代志子 |
| (幻想の令夫人) | | | |
| 音楽家 馬越淳三 | 竹内 良一 | 第四の女中 | 井上代喜子 |
| (幻想の煙突掃除夫) | | | |
| 家令 濱田老人 | 村上捷太郎 | 第五の女中 | 岡山須藤子 |
| 第一の女中 (民ちゃん) | 河村登喜子 | 寶石商手代 | 白崎菊三郎 |
| | 松尾子爵 | | 中村三四郎 |
| 第二の女中 | 香取 幸枝 | 郷田の次男 | 三國 周三 |

道頓堀行進曲の歌詞 (中井泰孝氏作 日比繁治郎氏作歌)

夜のまばりをまつ赤にそめて
あこがれつきふ劇場のちまた
道頓堀が忘れられよか

もつれ行くむれあしもさかるい

人は波うつ心はおさる

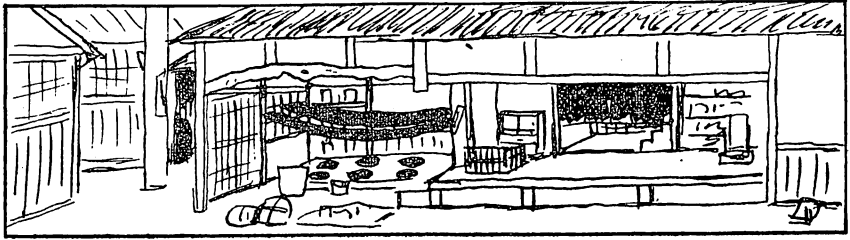
道頓堀が忘れられよか

戀はしばゐのむかしも今も

繪そらごさへうつくしものを

お、なつかしの道頓堀よ

小芝居 雨



秋の弱々しい陽が、斜めに三浦屋の店に射し込んで、雑然と置かれた染物の道具の影が、ほんやり土間に映し出している。あるか無しかの微風に干場の染物がゆらゆらと動いてそれが止まるまで、後は晝は云ひ乍らしんじ静まりかへつてまるで沈み切つた古池を思はす様な静寂が四邊を領す。が、それもほんの鳥渡の間で、土間に置いてある床几に腰を落着けてゐる三人の村の若者が、誰れに云ふこともなく、——全く燕若は旨えねえ、什麼だいな彼の節廻しの好い事、震ひ着きそうだったなア——

情

平 一 平

昨晚聴いて来た浪花節を今猶聞いている様な思ひ出し聲を出したのが、キツカケになつて、それ迄新聞を見てゐた娘のお峰までが、『昨晚の打ち入りは好かつたんだつてね。』と話のなかへ引込まれて行く。いかにも浮氣つぽそうな田舎のモダンガールである。お峰が話の仲間入りをしたので、三人の男達は話に一層に興味を起して——包む心は白浪の、寄せては砕く荒磯に——自分達が浪花節語りにもなつた様に夢中になつてゐる。——だが、あの若丸つて男は儘かに旨くなるぜ、——彼りや君、燕若の秘藏弟子だもの——旨いのは當り前だ——云はんばかりに意氣込む。『彼の人は旨いわね、私、彼の人が一番好きだわ』とお峰が情艶な瞳、かがやかして云ふ——『御馳走様——早速に男達は冷やかす——あら嫌だ——』と急に顔を真赤に染めて云ふが、事實は冷やかされるのが嬉しそうである。それから、若者達の間にはお峰を中心に昨晚の

噂の花が暫く咲く……『うむ……また性質の良くねえのが掃き集まつて居るな』何時の間に出て来たのか、魚釣りを仕事の様にしてゐるこの三浦屋の主人久兵衛が、今日も亦釣竿を持つて香氣らしく樽に腰を下し、一同の方を人の好さそうな笑を浮かべ乍ら見る。——性根の良くねえは手酷しいなア——苦笑の顔を見合す、この人達は何日も久兵衛の毒氣に當てられてゐるらしい、今日も散々毒口をた、かせ乍ら、結局、青年團の寄附帳に五圓也を書かして仕舞ふに我が事成れりさばかりに若者達はさッさ引下つて仕舞ふ、三階から女房のお辰が下りて来て『皆んな歸つたの』云ひ乍ら鏡臺の前に座つて髪を撫でつけ始める。『あ、峯ちゃん、早く仕度しておしまひよ』『はい』『お峰は急いで二階へ上る。』おやお前達は此れから何處かへ出かけるのかい』久兵衛は、いやに着飾つた女房の姿に氣がついてそう訊き乍ら、ぢつと見る。年より若く見せ様として派出な物を身につけてゐるが、額や頬に亂れてゐる小皺は流石に歳を語つてゐる。『停車場まで燕若さんを送つて行つて来るんだよ』とんでもなさそうに云ふ。『そうかい……』まだ今になつても昔してゐた茶屋女のアクがぬけないな……』好々爺の久兵衛も不快そうである『今日は、また釣道具のお手入れかね』と聲をかけ乍ら小間物やの小原清七が自轉車から下りて這入つて来る。見るから

色麗らしい男である。久兵衛は一層面白くない顔をする。そろした久兵衛の不機嫌さに更らに取り合はないで、お辰の側にござろり横になつて、——全く若いね——と女の喜びそな話をほちほち始める、久兵衛は相變らず苦り切つてゐる。清七は、娘のお峯には文吉云ふ祝言こそ未だしなが夫と決つてゐる男のある事を知り乍ら、なんさか自分の手に入れ様としてほこんで毎日の様に來てゐるのだ。着物を着替えて下りて來たお峰は、清七と二言三言口をきいて、母親と變つて鏡臺に向ひ髪をいらひ始める。『お父さん、まだ出かけやしないだらうね』お辰は久兵衛に出られては自分達が出られないので、何んさかして止めようとするが、——直ぐ出かけるよ』と久兵衛は出かけそうにするが、こうした二人の間には無論口争ひが起らない筈はない、が、やつぱり久兵衛は出て行つて仕舞ふ、清七にも嫌味を云ひ乍ら……『困つた香氣屋さんだね……』お辰は忌々しさう、『随分香氣に出來てるね』すかさず清七が合槌を打つ。『全くよく似て居るわよ』とお峯は文吉の事を云ふ。清七のズルそんな笑が通り魔の様に口邊に浮んで消える。お辰が羽織の紐を替へに二階へ上るに、清七はそろそろ色麗の本領を發揮しはじめ。『文さんは果報者だなア、こんな奇麗な女が自分一人のものになるんだもの：』出先から漸く歸つて來た文吉が、ふみ耳に這入つた自分の

噂さに家へ這入り兼ねて聞くもなしにお峰と清七の話を立
聞く、それが自分の破滅の元になることは知らずに――

「嫌な事だ、誰れがあんな……」――これがね、主のない花
だつたらね、――主のない花だつたら什麼するの、――誰に
も手を附けられないうちに俺が折つて持つて行つてしまふさ
――折つたら什麼ふ――外で聞いてゐる文吉の惱ましそうな
顔、見るも可哀想である。そうして結局、清七はお峰に響を
持つて来てやる事を約束する。過つて文吉がバケツに墮つて
音を立てたので流石に聞かれて悪い話であつただけにお峰達
は驚き、清七はそくさ歸つて往く。當然お辰は文吉をの
ゝしる。が氣の弱い文吉は悄然と奥へ姿を消す。こ入れ違ひ
に若丸が出て来て、お辰やお峰に金策を頼み、やつこお辰が
引受けて呉れたので安心をして歸へる。お辰はお峰と嘯き合
つた後茶筴等の中の三十圓の金を持つて往きかけるのを見た
文吉は驚いて止める。その金は前々から滯つて居る藍の代の
拂ひなのである。然し、お辰は文吉の泣かんばかりに頼むの
も聞かないで、持つて往つて仕舞ふ。自然、金を取りに来た
問屋の要作にも夕方には何んさかするから本意なくも歸つ
てもらはなければならなかつた。文吉の實家から妹のお花が
六十圓の金を持つて来て呉れたので、彼れもややほつこする
がお花の眼には兄の姿が何んさなく寂しうに見える。文吉

はお花のさしてゐる響を見て、それを譲つて呉れ頼む、そ
の響はお花がわずかな小使を永い間か、つて溜めて買つた大
切な物と云ふ事を知り乍ら……お峰の喜ぶ顔が見たいばかり
に、……無理な……と思つて居ても兄の心根を察してお花は
――兄さん、上げるわ――響を兄の手に渡すも清七の持つて
拭ひ悄然として歸つて往く。が、そうした響も清七の持つて
来た響にくらべられて、――此んなものを人前に出して恥を
掻くよりもお花さんの頭に乗つかつてゐる方が此の響の御爲
めでございますつて――とお辰の爲めに士間へ投げられ、そ
うして清七の響をさして喜んでゐるお峰の躰を抱く様に清七
が立つてゐるのだ。文吉ならずともカツミならう。文吉が無
意識に握つた鎌は遂に三人の血を流してしまつた。歸つて来
た久兵衛も今更ら文吉を責め様さはしない、自首をするにし
てもその姿では、……こ柔しく久兵衛は文吉に着物を着替え
させて、裁きの前へこ歩みかけた時、折りも折り秋雨が音も
なく降つて来た。傘を差しかけてやる久兵衛と文吉の手がい
つの間にか固く握り合はされ、嗚咽が、ポツポツと傘を打つ
雨音の中に段々高まつて行く……寂しい暮れ方である。(終)

配 役

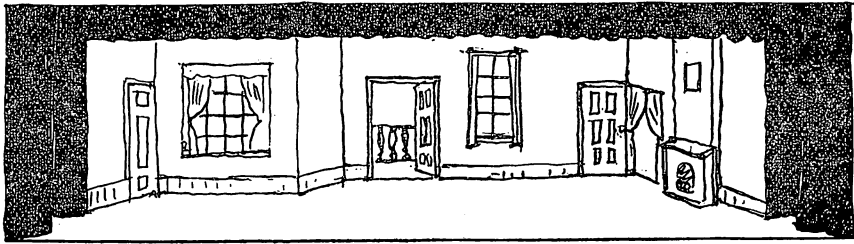
お辰の連れ子お峰 東 愛
西田久兵衛(父) 松本 要次
女房お辰 高津 左喜子
小間物屋 小原 清七
柳 永二 郎
西田文吉

角座七月興行上演（イブセン作）

芝居ものがたり

人形の家

角家宗十郎



ノルウエーの首都クリスチアニアのある大きなアパートメント——トルヴルド。ヘルマーの家庭はその中にあるのです。

妻のノラミ三人の小児ミその保母のアンナミ女中のエレンミの七人暮らし、ヘルマー一家は可成り永い間所謂サラリーマンとしての餘り豊かな生活をして来たが、今度その勤先の株式銀行の支配人に出世してヘルマーはもとより、妻のノラの喜びは一方でなかつた。

北歐ノルウエーの冬、窓から見える山々は白銀の衣を覆ひ、室内のス

トウヴには赤々ミ煙がゆらめいてゐる。近づいて来るクリスマス——今年、今迄とは違つてうんミ立派なクリスマスをして良人の成功を祝ふさいふので、小児達より妻のノラの方が大浮かれて、クリスマスに、買物や何かではじやいである。

ヘルマー（自分の室で）そこで噂つてゐるのは家の雲雀かい。

ノラ（買つて来た品物を忙しそうに開け乍ら）そうですよヘルマー 栗鼠さん、何時歸つて来たんだい。

ノラ 今歸つたばかり（菓子袋からパンを一つ二つ口の中）にぼうり込んで口をものが／＼させ乍ら）入らつしやいよ、あなた、買物をして来たから御覽なさいよ。

ヘルマー（ペンを持つたまゝ出て来て澤山の買物包みを見て一寸目を丸くする）家の無駄使家が又お錢を撒

き散らして来たね。

ノラ だつて貴方、もう可いわ、少しぐらのお金を遣ひに出かけたつて、やつミクリスマスが樂に出来るやうになつたんですもの、少しでいいから無駄遣ひをさして頂戴……。

ヘルマーはそれを吐ることも出来ない、彼れはノラが可愛くて仕方がないのである、ノラは、ほんこに明るい無邪氣な女であつた、一家の主婦さか、三人の小兒の母さか、そんなことは少しも念頭がない、雲雀の様に歌を唄ひ、栗鼠の様にはね廻つてゐる、ヘルマーは、その無邪氣な、家庭の經濟なさに無關心で無駄遣ひばかりしてゐるノラを、丁度小兒が人形を可愛がる様にノラを可愛がつてゐた。

ノラはお金さへあれば喜んでゐた。その癖直ぐ遣つてしまふ、ヘルマーは、何んでノラがそんなにお金を欲しがり、何んに直ぐ遣つてしまふのか、それを深くさがめもしなかつたが、ノラには誰れにも話す事の出来ない一つの秘密があつた、それは、夫ヘルマーが今日の様に立身しない頃、或る大病に患つた、醫者はイタリーへ轉地療養に出なければ生命が危いと言つた、ノラは、良人を助けたい一心から、父親から借りて来たと言つて、實はヘルマーと同じ銀行に勤めてゐるクログスタットに、父の名を保證人に偽證した手形を入れて二千四百圓を借りて、ヘルマーを轉地させた、ノラの心盡して

ヘルマーの病は全治して今日の様に健康になり、それからトシ／＼拍子に運が向いて遂に支配人の地位を贏ら得た、けれどヘルマーは、飽迄その金はノラの父親から借りたものであつて、イログスタットから融通したものも少しも知らない、ノラは良人が健康になり、今日の様に立身したのも、皆んな自分の力であると思ふも、良人には言はないが内心大いに誇りを感じてゐた、ノラにお金が必要のも、實はその負債をクログスタットに返済する爲めであつたのだ。

クログスタットは、銀行の帳簿をごまかしてノラに金を融通してやつたお陰で、ヘルマーの生命が助かつたのだと思ふも、自然ヘルマーに對しても何んもなく横柄で、自分の覗つてゐた支配人の椅子が、ヘルマーに奪はれてしまつたことは少なからず不満と憎悪と嫉妬があつた、ヘルマーは、クログスタットが日頃から自分に對する態度が不快でならなかつた今度支配人になつたに就て、くはしく帳簿を調べてみるも、クログスタットが銀行の金を費消してゐることを發見した。

(それがノラが借りた金も知らず)

ノラの學校友達リンデン夫人が、良人ニ離縁して職を求むる爲めに、クリスチアニアに出て来て、幼な友達ノラを訪ねた、ノラは舊友の窮狀に同情して、良人に銀行で使つて呉れる様に頼んだ、ヘルマーは早速快く承知した、そして、リンデン夫人を、クログスタットを免職してその後釜に据え

た。リンデン夫人は、ノラの友情に厚く感謝したが、クログスタットはそれに對して激しい反感と憎惡を持つた。

ノラの借用證書に、ノラが父親の名を欺證してゐるのを知つてゐるクログスタットは、もし自分を元通りヘルマーに話して銀行に使つてくれるならこの事件は秘密にするが、さもなければ裁判沙汰にしてヘルマーの名譽や地位迄破壊してやるに威脅した。

ノラは「良人に話して貴方を元通り銀行に使うようにはしませんから、さうかそれだけは……」と哀願してクログスタットを歸し、ヘルマーにいろ／＼とクログスタットの復讐を勧めながら、ヘルマーは頑固して聞入れない、返つてノラが日頃からよく言つてゐないクログスタットに、急に肩を持つこゝを變に思つて妙にこつてしまふ、ノラはもうそれ以上、良人に言ふ勇氣はない。

クログスタットは、自分の望みが斷たれたのを知つて、一切の秘密を手紙に認めて、ヘルマー宛に投函した、ノラはそれを知つて、さうか良人の手にその手紙が渡らない様、良人が手紙函を開けないよう、さうかしてその手紙を自分の手に取り返したいと苦心する。

クリスマス夜の假裝舞踏會、ノラは内心の苦惱や焦感を抱いてタランテラの踊りを踏つて、良人を少しでも長く自分の傍へ引よせておいて、その間に、リンデン夫人の力を借り

て、クログスタットから手紙を取戻して貰はふとする。

リンデン夫人が、離縁したさいふ元の良人は、實はクログスタットであつた、自分が銀行へ雇はれた爲めに、クログスタットが免職になつたことを知つて驚き、かつノラを救ふ爲めに、クログスタットに面見して、二人は元通り又家庭を持つ話しをきめて、クログスタットは手紙を取戻すことを承諾したが、それは、既にもう遅かつた、ヘルマーは、手紙函を開けて、クログスタットからの手紙を読んでしまつた。

ノラは、自分が良人を救ふためにした好意、愛すればこそ……だがそれは、返つて良人に誤解と憤怒を買ふばかりであつた。だがそれは、返つて良人に誤解と憤怒を買ふばかりであつた。だがそれは、返つて良人に誤解と憤怒を買ふばかりであつた。だがそれは、返つて良人に誤解と憤怒を買ふばかりであつた。

良人の愛が、只人形を可愛がるような上つつらの愛で、眞の愛でなかつたことを知つて、始めて、今迄の夫婦生活の空虚、妻といふものが、只良人の玩具であつて、一個の女性としての待遇を受けてゐないことを知つて、ノラは、妻と母と異なる前に、先づ「女」になることを自覺した。

そして、ノラは引さめるヘルマーの手を振り切り、三人の愛兒を残して、只一人悄然と住みなれた家を後に出て行く。

配役
ヘルマー(辯護士) 松本要次郎
ノラ(その妻) 岡田 嘉子
リンネ(その妻) 米津左 喜子
クログスタット 竹内 良一
(法律代理人)
女 女
ランタ(醫學士) 柳永二郎
アンネ・マリエ 安川浪子
(乳母) 山東君子
ヘルマーの子供 香取幸枝
中

見よ!!この大飛躍!!

急告!! 本誌年極讀者募集

内容刷新!! 紙價低廉!!

生新潑瀾、興味無限の讀もの滿載
家庭の慰安に芝居の道しるべに—

是非一部を!

山口草平書伯裝幀・寫眞口繪畫富



(一 部 た つ た 三 十 錢)

賞品

年極め申込者先着壹千名を限り抽籤を以て内壹百名に壹ヶ年間無料愛讀權を與ふ。
(但し昭和四年八月號より翌七月號迄)

特典

年極申込者全部には松竹各座に於て發行するパンフレット
案内書及優待券を發行毎に贈呈す。申込者を以て『道頓堀』
ドラマリーグを組織し演劇觀賞に就て特典を與ふ。

申込方法

壹ヶ年分(參圓四拾送錢に割引)前金お拂込みのこと。
大阪市南區久左衛門町八 松竹合名社内

申込先

『道頓堀』發送部宛

曩に本誌が年極讀者募集を企圖しました處早速各方面より御申込をいたゞき編輯部員一同感謝に堪へません。早速その結果を御報告申上る筈でしたが規定數にまだ達しませんので、延引いたしました段は平に御宥下さいます。愈々本月の應募者を以て絶対締切りとし、來月誌上には其の結果を御報告いたすと共に永らくお待たせ申上りました方々にも抽籤の如何に不拘何んとか御満足のいくやうな御待遇を講じたいと存じ、種々審議いたして居りますれば次號に其の詳細を發表いたします。本誌の愛好家諸君!!
特典附の年極讀者募集は右の次第で七月三十一日限り締切り絶対日延べいたしません。後々御悔みのなきやう、直ちにお申込ありたし。
本年秋期には年極愛讀者諸氏を優待する意味にてとても素張しい催しをいたします、切に御期待ありたし。

水無月の芝居

我童壽三郎等の

原作「冥途の飛脚」に就て

木谷蓬吟

梅川忠兵衛の『冥途の飛脚』を近松原作通りに上演したのが角座の我童壽三郎等である。改作された『大和往來』のお芝居式とは違つた、極めて自然な人間味を扱つた作だけに、ざわついた今日の舞臺には或はそぐはぬかとも豫想せぬではなかつたが、やつて見るに案外の好成績が示されたのはうれしかつた。これは一つには脚色者食満南北氏の眞摯な態度——原作の文字に拘泥せず、精神を確實に引つ擱んだ脚色ぶり——に由るのミ、登

場俳優諸君、ホンの端彼の人々に至るまでが、よく作意を飲み込んで、氣を入れての演出の賜物である云つてよい。

然かし、なほ配役の上にも舞臺効果の上にも扱ひ方の上にも、二三の修正を要したい點もあるが……こゝには只、烏江君の御注文により、我童壽三郎等の舞臺に就ての所見のみに止めて置く。それまたどの見物にして……。

我童の忠兵衛は、若くて、綺麗で、此船場あたりのおほんちらしい上品さ氣

軽さがあり、同じ放蕩兒の型ではあるがこころなく生一本の眞實さの底心にある點なきが、この人の持味にグツシリはまつて、原作の忠兵衛としてたしかに傑作であつたと思ふ。

淡路町龜屋の内、下女をたらすくだりの表現が、ホンの口先きだけ上つ面だけであつて、狡さや悪ふざけの分量が混つて居ないのが好かつた。八右衛門に懇々頼み込む長々しい言葉の間の活殺自在辨舌云ひ態度云ひ心持の扱ひ方など凡ならぬ腕の牙えを見せた。母の手前の氣兼ね、八右衛門の好意、蕩兒らしい軽い悲喜の感情が、それからそれへミ移つて行く技巧は、間然する點もない。江戸三度飛脚の無事到着の悦び、神棚に燈明を掲げての九拜も情味に富む、金を懷中に押込んでソワソワ出て行く道具變りまで、寸分の隙もない。『生きた藝』に出来上つてゐる。原作に少しの無理もないだけに、演出の効果にもそれが其儘

映發されてゐる。

越後屋の場になるに、作意も漸次に芝居がかりになつて来る。そこに俳優の技巧ミ心持ちの上に調節の六つかしさが生れてくることは今更言ふ迄もないが、我童の苦心は、大過なしに演り了せてゐる『短氣は損氣の忠兵衛』らしい味が出てゐた。封印切も『大和往來』のやうな公金ではなく、普通の爲替金であるだけに、演出に派手ではないが然かし自然で眞實さは勝れてゐた。梅川ミ二人になつて、獨吟の間に、柱を廻つての亂れ見得は異彩を放つた、凄涼な一幅の畫景である。鷹治郎の盛綱が首實檢の前、袴の裾を長く流して中腰になつて下手から見入つた形の絶妙さ、相並べて六月興行の錦畫ミして傳へたいと思ふ。

梅川ミ落ちて行く物淋しさも自然である。花道で二人相擁して泣きくづれる姿も印象に残つてゐる。以上はよい點ばかりを上げたが、尙ほ磨かれてゐない珠の

曇りも少くはない、羽織落しのくだり、封印切の前なきは、動き過ぎる恐れがある。これは常に仕馴れた舊作の演技が混入した爲めでもあらうが、一つは、一升の棗に一升の水を盛り入れやうとするかたではなからうか、十分の力を八分目に壓搾する、その餘裕に心懸けて貰ひたいものである。更に洗練された次回の『冥途の飛脚』に、曇りのない名珠の光りを見せて貰ひたいものである。

壽三郎の八右衛門も傑作である。忠兵衛は一段上の生活階級に在る男で、相當男も賣つた有産遊人の悪人ではないが純良の人間でもない、自分本位の所謂俠氣ミ、自分を光らす爲めの所謂友情を持つた男。廓などでエライ男、粹な人ミ言はれたいミ云ふ、大阪人型の見榮坊の蕩兒であり男伊達ぶりである。

この至難な役柄を、あれ迄に消化したのは推稱に値ひする。殊に龜屋内での演出の自然さは熊類である。越後屋では封

印切までに有難く頂戴するが、忠兵衛の腕を押へての注告、實は自己推讃の脱線ぶりであるのであるが、その言葉の表現が遺憾ながら練れてなかつた。一段の推敲を經ば蓋し八右衛門役者ミして隨一人であらう。

霞仙の梅川は、徹頭徹尾男に縋る處女のやうな原作の女を、頗る忠實に表はして成功である、言葉に情味の溢れてゐたのも原作に理解があつた故なのであらう大吉の母妙閑は、その人を實際に見るやうで老巧である、長い六つかしい言葉を鮮やかに趣味深う言ひ廻したのは流石である、市郎の丁稚は、仕どころのない役を演どころのある役柄に仕活したとくでも金鶏勳章は確かである、全くよい心懸けだミ感心した。我久三郎の下女おまも熱演である。右田三郎の田舎侍も雀次郎の丹波屋の使も、各異つた色彩を見せたのは、この一場の成功に與つて力がある。

越後屋では卯之助の女房が、克明な内輪な而かも充實した心持の演出を見逃してはならぬ。延太郎我久之助等の友達女郎も、原作に同化す可く努力の點は認めが、せめて梅川と同じ年齢ごろでないで原作の持つ味が出て来ない、あの若さ

近八考證

豊島扇三郎

近八の舞臺意匠

多くの院本時代劇の内で、盛綱陣屋は大變無理のない段取りで、纏つてゐて、チヨボを抜きで新劇畑の物に其儘成りそな位である。

だから、現實的に、極く寫實な演出が出来得る筈である。現今の「忠臣藏」等の演出の如く。

處が、鴈治郎丈の盛綱は、常に劇通家から多く其寫實臭味を攻撃されたる。藝に寫實演技をしたら、大道具も勢ひ、

では如何にも仕様がなない。但しこれは配役者の責任である。
以上は一見物としての藝評、今度舞臺に關係した私としての所感は可なりであるが、いづれ後日に。(六月十九日)

均合上、充分徹座した技巧を施して、舞臺全體を、矛盾なからしめたら、其罵りは免るべきである。

本來操りに初演された關係上、只陣屋作りの二重屋臺に紅葉ミ松ミ木戸をあしらつたのみの型が普通だつたのを、色々背景等に寫實味を加へた爲に、それが、陣屋の入口屋臺が、立關位な物にみえるので、(御座の設けミ奥に入る……)の淨りから思つて、首實檢から段切へを奥の廣間で演る様に何時頃か傳つて鴈治郎も羽左もそうして居る。

その爲に尙、前場が陣屋の立關口らしく見える。

私は之が大體間違つてると思ふ。自分の家へ歸つて来て、母や妻と語らうに、玄關口でやる人はなからう、殊に堅い武士の道である。しかも、敵の使、侍大將こもある人を、同じく玄關口で應接し母へ大事を希ふのも不用心な玄關口で滯るのはいけない。

亦、嚴重なるべき表口へ、怪裝の篝火がうろついたり、祖母が小四郎に死をせまるのを、表口で行ふのも可笑しい。

私は、それで、歸陣して来たら、すぐ萬事を行ふ廣間へ通つて、妻もそこへ迎へて出るのが至當だと思ふ。亦上使も、その廣間へ通すのが當りだと思ふ、だから此の近八の舞臺は、最初から、母へ願つて別れ入る込ミ、後段の首實檢から段切迄は、正面に中足の上段を作つた廣間であり、中間の篝火の出から、注進受

けは、脇門の處で内に高二重の屋臺のあ
る場面が良いと思ふ。そしたら和田が土
上を長袴でのさばり返る不合理も除かれ
やうし、前半が立派で良くなるだらう。

處で今回の中座の三杯道具である。大
體は先年京都南座の時と大差ない、今い
ふ最初の母へ願ひの件り迄を、前庭を控
へた陣の一屋の二重屋臺の極く飾氣のな
い場面で、却つて嚴めしさを増して宜く
サラリと演られた。が、盛綱も小四郎も
草履、軍卒も草鞋がけなのに和田が例に
よつて長袴で出て來る不自然は從れない
次の脇門を中心に陣の内外の場面は良い
何故かさいふも、表門口の邊であのゴチ
ヤ／＼を行はれる道理がないから。併し
屋臺は高二重にして欲しかった。最後の
奥の間は例の通りである。結局尙最後迄
和田は、石山脱出自旗を奪つて再び此處
へ訪れるのに不相變長袴でゾロリ、何
か一考を要する事だ。但し、一杯道具で
歌舞伎の形式美を尊長する演出の場合は

あれが良いが、それでも同じ對照をくり
返すより他に何か良い型が出来そうなの
だ。

大體歌舞伎の演出法に二つある。一つ
は、人物の心理表現本位で、背景や衣裳
も從つて、様式美の整つた物でありさへ
したら良い演出。

一つは、低級な民衆の望む寫實技巧を
充分取り入れて、現實的に演る法。

後者は場合によつては不可ない。併し
明治時代に一時道具や光線が自由に作ら
れる様になつた處から、盛んに流行した
其の爲に、藝に迄、寫實味が、工夫に工
夫された。鴈治郎丈の如き、漸新なる事
をしたがる優は、大にこの寫實味を取
入れて、此盛綱等にも、將又、二番目物
にも特種な型を成して、或る程度迄成功
された。そこで、前者の演出に勉める吉
右衛門等とは全く氣の違ふ演り法故、同
日に比較されるべきではない。あへて今
度の三杯道具を非難するには及ぶまい。

尙細い事を言へばあるが、後の場の平の
上縁は陣屋らしくない。板敷の方がよく
はなかつたかと思ふ。

劇評募集

劇評は、松竹經營各座の名優三言はず
新名題三言はず或ひは劍劇、新劇、新派
のあらゆる俳優演劇を各自勝手に選んで
公開状なり批評なり御自由に投稿して頂
きたいのです。

◎應募原稿は（廿字詰二十行以内毎輯十
七日締切）

讀者文藝募集

- ◎短歌俳句を募集します。
- ◎原稿締切（毎月十七日のこま）
- ◎用紙は必ず官製はがきに限りませう。
- （但し一葉のはがきに五句或は五首以
上認めないこと）
- ◎原稿用紙は出来るだけ判りよく奇麗に
認めて下さい。
- ◎入選者には粗賞を進呈いたします。
- ◎原稿には必ず住所姓名を忘れては不可
ません。
- ◎應募原稿は左記へお送り下さい。

大阪市南區久左衛門町
（松竹合名社内）道頓堀編輯部

七月の曾我廼家（中座）



曾我廼家五郎が

これから
踏まうとする道

石割松太郎

◆……夏場の道頓堀に、謂はゆる夏枯れが、来ようとする時に、いつも五郎がやつて来る、燕のやうな男である。芝居が夏枯れようが、五郎には夏枯れがないといふ自信があるのだらう、又仕打にも五郎ならばいふ腹もあらう、軽いもの、暑い時にあつさり笑うていふ趣向があらうが、五郎は燕のやうな男だ。

◆……「燕」いへば、五郎には縁故がある、五郎の堂島の居宅は、たしか「燕巢居」を名くしてゐたと思ふ、「燕」でさへ自分の家にある、天下の五郎が借家住居でもあるまい」といふのが、五郎内心の「塚魂」であつたらう、「燕巢居」の名のよつて来るころだと思ふ。

◆……のみならず、軽快なるこゝ燕のやうな男だ、五郎の一面はこの面影がある、「鈍重」な塚の土地、塚人を飛離れたころに、塚はなれのしたのが五郎の性格だ。

漫談

あじやら鵜鷗石

正岡 蓉

1、なんせんす名所めぐり

だん／＼、旅行のシーズンになります！
ぼくも、そこで、あく迄もマンダン然と、
樂天地おなじみの芝居にちなむ名所めぐりを
少し許り、させて頂からうとおもひます！

×

このあひだ、京都へゆくととき、何気なく、
汽車の窓からおもてをみたら、景色がみえま
した。——最も、大てい、汽車の窓からは、
トンネルへでも入らない限り、景色がみえま
す。

所が、その景色が、計らざりき！ 楠公父
子訣別のところ——と、棒枕が立つた、おな
じみ櫻井の驛の古蹟でした。

ちつとも、いままで気がつきませんでした
が、昭和のこんにちでは青葉茂れる櫻井の—
……つてシロモノは向日町に程ちかい、そ
れも、思ひ切つて、線路とすれ／＼の南側に
儼然としてこのつてゐるんです。

劇」について一文を草した、私は明る芝居を要求する、デメくした芝居は、少くとも今日の芝居ではない、喜劇の時代、今の會我廻家式喜劇の時代はいいはないが、「喜劇の時代」さいふこを述べた。「喜劇」さいふこが、アリストテレス以来の詩學のカテゴリに容れられた喜劇悲劇以外に「喜劇」があらう、「喜劇」さいふ言葉がまぎらはしく不都合ならば、何さでもい、明るい芝居、ほんきに面白い芝居、生活の勞苦を忘れる芝居が、今の、現代の、いま足許の眞の要求だ。

◇……理窟は捨て、おけ、理窟さいふものは後から跟いて来る、追つてくるものだコチくな理窟の芝居なきはさうでもない、だらう、大衆對手の芝居は、「明るい芝居」だ。それを文字通りに解釋してもいい、見物席を眞暗にするやうな考へ方の芝居は七里結界。觀衆が舉げて劇中の人物になるやうな芝居が、「今の要求」だらうぢやないか◇……この意味で、私は、「次の時代の喜劇」の一文で、今の歌舞伎役者のこの方面への眼の向け方を懲癒した、大阪では魁車、東京では猿之助の連中が、「詩學にいふ喜劇」以外の喜劇に、新様式の喜劇に向へさいふのである。

◇……が、既に喜劇を以て立つてゐる五郎が、恐らく今この一轉機に直面してゐるのではあるまいか。私は内部の事情は知らないが、今年の春に東京都新聞の一隅に三行ほどの記事があつた、それは「五郎一座が大變動」があるさいふ意味であつた、私は直覺した、「五郎はやつたな」思つたのである。

◇……五郎は何をやつた？その後、五郎の大變動が表面に表はれなかつた、が、五郎は「やつてる」私は、靈犀一點相通する道があつたか、この念が離れなかつた。

◇……さころが、五郎一座から、まづ小次郎が抜けた、一二の動搖があつた、最近辨天が抜けた、——五郎いよく、「やつてる」思つて、その消息に注意を拂つてゐる、最近に十五が敏雄さにもに獨立するさいふ、そして十郎觀名の報が傳つてゐる。

こんなカヤクが入つちやシマツがわるい。第一、いよく、別れといふところになつ

て

正成 「さらば、正行、もう、ゆきやるか、もう……オマ、何を、そこで、探してゐんだよ」

正行 「だつて、お父さん、いま、下りの汽車から、まだ、玉子焼の少しのこつてる汽車

辨當、投つたひとがあるから……」
正行が、汽車辨をさがしてゐるやうになつちや、蓋し、事件は、迷宮に入ります。

X

こういふ觀察を、而しあらゆる現今の名所古蹟へむけてゆくと、随分、アホらしき收穫があります！

X

大阪の千日前。
繁華第一のところですが、昔は、御案内の

あれが刑場だつたさうですな。
秋の夜は、狐が化け、虫が啼く、といふ、

極め付きのさびしい場所。
こゝで、三勝半七といふ、當年のモガとモ

ボとが心中をした！

五郎は又長い年月手を携へて来たこの太夫元の豊島ミ手を切つたさう噂がある。その眞偽は知らないが、私の頭に映つてゐた「燕」の如き「隼」の如き、五郎はいよいよ、彼が思ふところに進んで来た、「いよいよやつたな」と思つた、今でもさう思つてゐる。

◇……五郎ミ豊島ミの關係は、五郎が故人の十郎ミにも「前後亭左右」といふ五郎十郎の二人で、名前は一つさいふ、五郎劇の發祥地である「伊丹」での「滑稽勸進帳」の失敗直後に初まつてゐる。五郎が琴高屋福園の一座にゐて、和歌山でこの失敗の「勸進帳」を演じた。その話から産れた「曾我廻家の喜劇」は豊島が太夫元であつた、五郎ミ豊島ミの握手は、これが始まりで、年月からいふて明治卅七年二月十日、その翌日が紀元節で、日露の國交斷絶の紀念すべき日であつた。

◇……こんなに深い關係にある豊島ミ五郎ミが、圓滿に離れた、即ち五郎はその劇團を改造すべき機運に直面してゐるのだ。私は都新聞の三行の記事を、最も意味深く見たこの春の私の慧眼を、私は密かに誇つてゐる。が、或は慧眼の誇りぞこねで、豊島ミ五郎ミの絶縁は、まだ表面に現はれてゐないかも知れないが、この噂のあることその事が、既に五郎の内心にその劇團の大改革の念が醗酵してゐることを知るこゝが出来来る。

◇……私は、「次の時代の喜劇」の一文にもいつたが、今の大家相手の芝居は、何にしても五郎ミ澤田である、實の善悪是非には議論はあらうが、大家相手のものは、目下のところこの二劇團だ。その五郎劇團が徐々の革命を行ひつゝ、澤田のそれの如く太夫元に制肘されない位置に立たうとしてゐる、或は立つたのは、眼先の見ゆる五郎「燕」のやうな五郎のスタートはこれから切らうとするのであらう。

◇……私はこの意味において、この七月の中座における「五郎劇」に大きな興味を

而し、この心中なんぞも、これを、そのまゝ、現今の千日前を背景にして、やらせてもらはない。

けつして、しめつばいものぢやない。
心中の場は、きまり文句だ!

「七つの鐘を六つきいて、のこる一つが未來へみやげ、覺悟はよいか」
と、きくだに、うすらがなしい伴奏を要するのだが、いまの千日前の、午後九時ごろではとても、こゝういふ気分はでない。

「七つの鐘を六つきいて」
ウタ「やすーぎ千軒ーッ」

半七「いけねえな、安來ぶしなんぞきこえて
きちや……南陽館のだな、仕方がない、やり直しだ!——七つの鐘を六つきいて、の

こる一つが未來へみやげ」
辨士「又もよせける御用の嵐……チャーラチャ、チャ〜ラチャン……」

半七「いけねえな、こんどは活動だ……もう
一べん、心中、やり直さう……覺悟はよい

か、これ、三勝」
○「あーら、つめたい、アイスクリン、召上

つておためし!」
半七「べら棒め、心中のさなかにアイスクリ

大きな期待ミ、大きな意味ミを觀ようと思つてゐる。——五郎はこの間演じた「うるさき人々」の一人に、私を心筋かに數へるかも知れぬ。甘んじて「うるさき人々」の一人になつて五郎の踏まうさしてゐる道をちつミ眺めようミ私は思ふのである。



五郎雜考

山上貞一

劇界の大勢より觀る時は、傍流であるかも知れないが、歌舞伎、新派、新劇を通じて、時代は正に今、喜劇の時代を創るべく嚆望されてゐたのに拘らず、これいふ大きな反響をも與えないで過ぎ行かうミしてゐる。それは時代に適應した意味の喜劇を示し得る劇作家がなく俳優が出なかつたためだとも言へる。少くも劍劇の衰微に當つて次の隆盛期を來たすものは喜劇であるとして努力されて來たいづれもの舞臺上の喜劇が、一世を風靡するだけの力なく、試みの中に失敗の形を以て何もものかの次の時代にもろくも移乘されやうミしつゝ、あるのを見る。その基因は深く尋ねるに及ばないことであつて、喜劇には既に會我廻家五郎、五九郎、志賀廻家淡海の如く成功した確固たる喜劇團が存在してゐて、そのいづれもが、今日試みられつゝあるものより量は多分に價は廉に民衆に接觸しつゝ、あるためだと言ひ得る。

ンなんぞ、おためしになつてゐられるけえ
 ！
 とう／＼、半七が喧嘩をしなけりや、なら
 ないやうなことになつてきます。

×

花の京都！

南禪寺とくる、といふ迄もなく「金門五三
 桐」

石川五右衛門でおなじみです。

陽春3月、ドテラを羽織つた五右衛門が、

葉巻を咬へておさまつてると、「地藏經」といふお鳴物で、山門がセリあがるといふ一件です。

「絶景かな／＼、春の眺めは價千金たあ小
 せえ／＼、この五右衛門の眼からみれば、
 價千兩萬々兩、はて、うら／＼かな眺めぢや
 なあ！」

と、とにかく、五右衛門閣下は、のたまふん
 ですが、ぼんものゝ南禪寺で、何も、あれま
 で最大級の感嘆詞を陳列して欣喜雀躍するほ
 ど、果して、うら／＼かな風景だらうか？を、
 いつも、ぼくなどは疑ひます。

それは、景色はものさびてゝよろしいには
 ちがひないが、南禪寺なんぞ、どちらといへ

さすれば何故に是等の既製喜劇團の存在を無視して、喜劇に劇界の安全を求めやうと試みたのかと反問したくなる。この點こそ五郎や五九郎や淡海の考えねばならない點であつて、彼らの既製喜劇團が決して時代的に適應したものでなく、指摘すべき缺點が多く、到底改革し得ない不備さがあるためだと思はれる。その不備さは何か。私はまづ曾我廻家五郎の存在に就て考へたい。

五郎はその存在が最も永く確然として偉なるものがある。大阪に於て大劇場中座を開けるものは鷹治郎を措いては獨り五郎があるのみだ。それも既に久しい。そして今日依然として聲價を傷つけないでゐる。それは鷹治郎に對するそれとや、似た大阪人としての權威が觀客を呼んでゐるのほゞよりではあるが追従しつゝある五九郎にしても淡海にしても、敢て亞流をくみ糟粕を嘗めつゝあるものであつて、決して五郎の敵ではない。寧ろ私は悪い友だと言ふ。五郎がもし溢滞してゐるならばこの發奮しない友を持つためである。私が前述した既製喜劇團の不備さは、時代の推移を無視して何の反省もなく五郎は五郎の從來よりの領域に満足し五九郎は徒らに焦慮しつゝもその弊あり淡海に到つては新進にも拘らずその氣鋭がないことである。

今日は五郎を徒らに讚美してゐる時ではない。漸く時代より後退しつゝある彼に對して行くべきよりよき道を示すべき時にある。この時に當つて五郎が先に老役太郎と離れ、立役である小次郎を東京に放ち、蝶七を失ひ今また若女形辨天と十郎の化身ともいふべき十五の脱退を報じられることは非常な寂しい氣がする。もし斯うした人員の陶汰を以て改革であると思つてゐるならばそれはあまりに兒戲の沙汰である。

五郎劇の脚本に就てはこれまでも心ある人は必らず問題とする處であつて、五郎が座付作者として絶えざる努力を以て一座の人々にあてはめて書上げてゐる努力は實に推稱するに餘りあるが、それに慣れて決して外部より一つの脚本すら仰がない、よし

ば晝でもいと寂寞たるものです。

五右衛門「絶景かな」

誦經「なまいだぶくくく」

五「春の眺めは價千金にあ小せえ」

誦經「なまいだぶくく」

五「この五右衛門の眼からみれば、價千兩萬々兩」

誦經「なまいだぶくく」

五「ハテうらゝかな」

誦經「なまいだぶく」

五「眺めぢやなあ」

木魚「ボクくくく」

これぢや、うらゝかでも、何でも、ありやしない。

X

東京の深川は昔の辰巳。

例の「梅曆」で有名な人情本のパラダイスだ

丹次郎氏が、仇吉、米八といふ二箇の女性

にあひきかれて、ラヴシーンの見本を示す。

このあひだも、道頓堀でやつてましたが

この丹次郎閣下なんぞも、現今の、東京市深

川猿江裏か何かでヤニ下らせたら、到底、三

文のネウチもない。

仰いだ時も自分が加筆しなければ上演しない所謂自己撞着に落ちた彼を見ることは今日までは致方がないにしても、今後は改革すべき第一義ではあるまいか。座付作者としての五郎は最も極端なものであつて、ためにいかなる狂言にしても五郎がこうして蝶六があつたと言へばその筋がいかにか變化に富むものさ雖も、直ちに首肯して結果を聯想し得るものが多いのは、多くの観客を必要とする劇壇にあつて決してよい存在とは言へない。もしこの例を歌舞伎劇に當てはめ新派に聯想する時は、観客としての興味は忽ちに失滅してしまふことになる。それにも拘らず五郎劇が満員であるさすれば、それは五郎なり蝶六の演出の功果であると言はねばなるまい。なる程五郎の饒舌にして刹那的の輕妙さ、蝶六の鈍重にして見るからの喜劇味は観客を求引するの充分であるが、それは少くとも昨日の観客であつて今日は如何、明日の観客の嗜好は如何、それを思ふ時、五郎の展開すべき進路は正によき脚本に對つてではなからうか。五郎は今日の劇壇で最も儼れた演出監督である。統率力に於てこれほご偉大な演出者はない。その力量を新しく發揮すべき點はよき脚本に對してである。よき俳優たりよき脚本家たりよき演出者たりよき三技能を一人で兼ね得て妙なる時代は既に去つた。五郎が人間として時代の中心を成しつゝあつた時は既に昨日であつて、彼も舞臺にあつてよし仕出しにもせよ、モボモガの必要を自ら認めて敢て出場さしてゐる時代にあつては昔ながらの五郎劇の存在は危険ではなからうか。五九郎、淡海は既に女形を廢して女優を用ひてゐる。これなきは今日では時代を知るの明ではなく當然の理である。時代に乘じ時代と共に推移して二十幾年の歴史を有する五郎劇が、今日に於て少しも存在價値を薄くすることは喜劇界の甚だ遺憾とする處である。然し眞の喜劇さいふ意味より言へば五郎劇が正鵠なものとは言へない如く、時代より言へば五郎劇の存在には多く疑義がある。私は大の曾我廻家好みであるがいまだ批評をしたことがない。

丹「いつぞや、俺が唐琴屋を」
豆屋の鈴「カラン、カラン」

丹「遣出されたそのあとで、あの米八も廓をぬけ、この深川へ住替して、俺を引取り世帯をもたせ、何不自由なくくらししてゐるのはみんなあいつのくめんづく。いつそ、今夜はかへらうか」

警笛「ビューツ、ビューツ」
丹「オイ、何だい、いまの音は……」
○「あ、セメント會社の六時の笛で」

セメント屋のサイレンなんぞがきこえてき
ちや、これ又、丹次郎氏ダアである。

×
九段の招魂社では、明石の鳥藏と松島千太が、大鳥居んところ亂開の巻を開演するが、いくら、明治開化とはいへ、あれも、夜なかにであつてくれたからいゝ。

春秋二季の祭日の方、参詣人も多し、従つてあはよくば、巾着切の方の内職もできやうからんで、あの御兩人、お祭りの雑沓へでも、でて來られてごらんさい。

「あきららの邸へ斬込みや、どうせ、いのちはすてる覺悟だ」

たゞ理窟ぬきに面白く見るこゝを以て足れりまして来たが、敢て此一文を書いて五郎君の身上に肉迫する。



使命を果した

五郎劇

豊岡佐一郎

曾我廼家五郎の創めた芝居は「五郎劇」であつて喜劇ではない——と彼自身自負してゐる相であるが、彼の日本の近世演劇史上に印した功績を思へば、その自負を許すもいゝが、彼は何が故に彼の芝居を喜劇ミ呼ばれる事を忌避するのか、我々は彼が喜劇の世界を確立したる點にこそ、彼の功績を認めようとするのに！とまれ、彼は近世劇界の偉人である。鴈治郎が名優であると同じ意味に於て、彼は決して名優ではないかも知れない、一俳優としての名聲に於ては彼は鴈治郎の敵ではあるまい。併し鴈治郎が傳統の中にあつて、卓越した俳優として終始し来たつたに反し、彼五郎は、その傳統から勇敢に脱出して喜劇の世界を日本演劇史の上に確立した、その點に於て、彼の功績は名聲が後世、前者よりより高く評價されなごは何人が斷言し得よう。

由來、わが國の演劇には本格的な正統的な喜劇の存在が認められてゐなかつた。これは正に一つの驚異に値する事實である。此事實は何ら新しい發見ではないが、當然のこゝろして、直ちに承認出來ない事實なのである。一應は疑念をもつて過去の演

なんといふとこへもつてきて、新内ながし
あらばこそ、セロ曲馬のデンタか何かで

「ラメチヤンタラ

ギツチヨノノイ

バイノバイノバイ」

とおいでなすつたら、あはれ鳥藏も千太も、
そして、羽左衛門も、菊五郎も、一切空一
てことなる！

×

ミナサン！ そろ／＼、夏がきます。

温泉もよし、海もよし。

而し、たまには、こういふナンセンスな量
見をたづさへての古蹟めぐりなんぞもいかゞ
ですか？

九夏三伏のあつさも忽ち……いやよけ
い、暑くなつちやふだらうこと請合です。

2、観客百態

あらゆる演藝のお客がさうですが、芝居を
みてゐるお客さまにも、酸豆腐あり、ズブの
とうしるすぎるのがあり、随分、我々の方の
材料になるのがあるもんです。

清水治郎長が、秋葉の火祭、荒神山の血ケ
ムリと旺に全國をあはれ廻つてたとき、伊井

劇の足跡を見渡した上で始めて首肯し得る事實なのである。成程、日本の芝居はその根本思想が勸善懲惡に立脚し、ハッピー、エンディングをもつて一つのドラマ・マツルギの原則としてゐる程で、一戯曲には部分的に隨處に喜劇的要素を含んでゐることは云へ、全體のコンストラクションに於て、プロットに於て、その戯曲中の主人公の性格に於て、その作者が喜劇的意圖を表現した作は絶無だ云つていい。乃ち喜劇は過去何百年の間演劇の正道を歩ましめられなかつたのである。所謂檜舞臺を踏む事が出来なかつたのである。

然るに、「五郎劇」はその檜舞臺を堂々踏み、今尚ほ濶歩しつゝある！誠に壯愾である。喜劇萬歳である。五郎が傳統的僻見（彼にして尙囚れてゐるから）誤つた自負をもつて、「五郎劇」を「喜劇」三呼ぶ事を屑しきしないにしても、我々は、彼をさこまでも、「喜劇」創立者として、その功績を後世に傳へようと思ふ。「五郎劇」に於て、初めて喜劇云ふ言葉を正しい意味に使ふ事が出来る様になつたのである。「五郎劇」が過去幾年かにわたつて、文字通りの不斷の努力をもつて、創作した無數の喜劇的戯曲！この點に於て、他のいかなる喜劇團も到底、彼の足下に近寄るべくもない、誠に獨歩の境地である。勿論その創作した戯曲に、今日から見れば無價値のものも少くないが、そしてまたその描いた世界、觸れた社會が意外に狹隘なのに不満を抱かすにはゐられないが、併し、その描いた世界、觸れた社會の中にあつては的確に描き且つ觸れてゐる事を認めないわけにはいかない。藝術的見地から見て獨立の價値を有してゐるものも少くない様だ。様だ云ふのは甚だ不見識なもの、云ひ方であるが、今手許に何ら参考すべき文献がないので、一々明白な例證を擧げるわけに行かないから併し私の莫然たる記憶の中にあつてそれを承認させるものがある。

繰り返して云ふ、「五郎劇」の價値は、從來輕視され、閉却され來たつた演劇上の未

蓉峰氏も、卒先してこれをだしました、そのとき、あるメリヤス屋さんの團體が總見をした。

むろん、ふだん、あんまり、芝居をみたことのない御連中がそつてたのだが、この、人たちの觀劇談といふのが、じつに、よろしい。

「何しろ、あたしなぞは、芝居へいつたこととはじめてといつてもいい位ことし三十九ですけど、十二のとし、國で一べんと、二十八でいまの家内をもらつたとき一べんと、それにこんどと、都合三度しかみてないんですからね。——それでも、田口君などは比較的、劇に親しんでる方で、最近では大正三年に一どみたといつてました。大林君は、明治四十三年に——と、冒頭、先づ、芝居の話だか、洪水の噂をしてるんだかワケがわからなくなる。

比較的、親しんでる方が大正三年……ときちや、四隣寂寞、人跡、自ら、絶えてくる。

「……だから、伊井蓉峰つて名は、きいてましたが、どれが、伊井だか、顔をしつてゐるものなんぞありやしません。従つて、どれが治郎長だか、わからないです。——

聖地を開拓し、其處に根を下して立派な成長を遂げ得た點にある。が今やその成長は殆んどその極點に達した云つていい。もう少し嚴密に云へば、用ふべき力を出し盡して、最早成長の餘力なく、今後の新らしき進出に對していさゝか不安を感じしめるものがある。明日の事をすら豫想出来ない現世ではあるが、敢て斷言する事を許されるなれば、今日の「五郎劇」は已に行きつくべき地點に達し、果すべき使命を全うした觀がある。今日までの業績によつて歴史上の價値を決定した云つてもいい。だから「五郎劇」は今後に於て何ら新しい發展を見なくとも「五郎劇」たるもの何ら恥づべき處はないのである。此點に於て、「五郎劇」はもつと自負していいのである。この自負に立つて、徒らに時流に投じて誤れる方向轉換を試みる事なく、今日まで守り來つた「五郎劇」の正道をより力強く歩まん事を希望するものである。私の言説は甚だ消極的で生彩に乏しいかも知れないが、「五郎劇」を愛するが爲めに、敬意を表するが爲めに、至極忠實な言を寄せた積りである。



研辰の富園

漫評
漫談

五郎劇

高谷伸

毎度、猿之助で御ひいきの研屋辰次、手つ取り早く申す研辰の、その愛嬌は町人ら

みんなで、そこから、しみじみと、額をあつめて、相談したんです。どれが、一體あれ丈けたんと、舞臺に俠客があるが、治郎長なんだらう。つて。すると、大林君は一ばんハシの、黄色いキモノの男だらうつていふんです。成程、みると強さうです。正しく治郎長にちがひないと我々一同思つてゐました。すると、一と幕めの幕切れにこれがいせいよく殺されて了つたんです。全五幕からある芝居に、いままら主人公が殺されるつてのはない。第一、治郎長が殺されたなんてのは、古來、餘り耳にしな。では、これは人ちがひだつたかとぼくらがつかかりしたとき『オイ、君、み給へ』と田口君はいひます。『あの男だぜ、あの青いキモノをきた……』みると、これも亦強さうです、第一、前のより、男がいゝ。そこで、これこそ、治郎長に定まつたと、こんどは衆議一決しました。そして、みると、又、その青いキモノが、へんな三下に殺されちゃふんです。こんどは小村君があの浴衣の治郎長だといひます。これも仲々強さうでした。而し、これも、すぐ、

しさのおぎけにある。

町人の愛嬌は大阪が本場。飛びだした曾我廼家五郎の研辰、うまくひきあてやうこの研辰の富圃である。

大師は弘法に占有され、大闇は秀吉に取られたさいふ筆法で、こゝも町人上りの武士は研辰の一手販賣、稲野谷半兵衛なさは、ミづくに知らぬ顔を、きめられるのは半兵衛さいふ名がわるい。

御兩所にも滋賀縣の出身、やつぱり近江商人の所が町人優遇もすれば侍に成り上る。

なき、悪態をつく武士に、ひさく虐められる研辰が人間萬事金の世の中さいふ究所を把んで武士ミ握手するさいふ、猿之助の研辰の裏を行つたところ。

研辰萬歳

である。

ミころでこの研辰「旅の塵」や「浮世の有様」に現れてゐる研辰は限らない。稲半でも誰でも町人上りでさへあればよいのだが、前にもいふ大師大闇の筆法で、弱虫で勘定高いのは研辰さいふミこに決つた譯である。

辰公、十念寺の富の札、三〇〇五番ではない。松の十五さいふのを買った。朋輩神原三平太にその札を拾はれ油を絞られ、水茶屋の吉兵衛に捨値で賣つたが、當れば山分けさいふ條件がついた。

お定まりの當り籤だが、山分けミくれば武士たる者が立たぬ。そこで三平太と妥協が成立して、配け前をやるこゝになり半金を受取りに行くこゝミなる。

舊式の筆法であるが、他愛なく面白い。五郎の研辰、辨慶の浴衣に伊達な羽織をひつけてくる。町人上りの膳所の家中ミは見えぬ、彼是橋の上でなくてもカレコレす

殺されました。つゞいて、北澤君のみ立てた治郎長も、杉山君のも、吉岡君のも、大橋君のも、服部君のも、すべて我らのみ立てた治郎長は、すべて、惜みなくサバ／＼と片つばしから殺されてゆくのです。事件はこゝに於てついに迷宮に入りましたよ。何だか、殺人犯か、親の仇でも、人ごみの中からよりわけてるやうな騒ぎだ。

「それで、結局、最後に、やつと治郎長を誰か發見したワケですな」
そこで、あたしがたづねたら。

「いや、それが、一ばんおしまひが火祭りせう。いろんな男がでるの何のつて、とても大へんな人数なんで……乍殘念、暮のしまるまで、どれが、治郎長だかとうゝわかりませんでしたよ、ハア」ときた。

事件迷宮に入りつばなしなぞは、誠に、以而、おそれ入る！
近ごろ、アツパレ無類なる、これらは観客の一群である！

所でぼくは、コードモのじぶん、柔道とボートレースのほかは一切の娯楽をいさぎよしとしないといふ、コロモハカンニイタリ、ソ

るが、前にもいふそこが研辰でも稲半でもよい所だ。

大磯の三平太、ぐにやつくが呼吸のあふ點は何よりである。蝶六の吉兵衛、二百五十兩、ねれ手で粟の儲け役である。

幕あきの、しなだまの拍子の面白し、謠を念佛にされてしまふ滑稽も面白い。

研辰三平太のやりまりの技巧も、舊式で歌舞喜劇の技法であり、下座で因州因幡なごを賑やかに使ふ効果も面白い。

次に説く牛の人情の味が喜劇の本格ではあるが研辰の技巧もまた捨て難い。

歌舞喜劇といふ趣味を、私はこの研辰の如く推賞するに共に、所謂新派的中間存在は、もつち考究の餘地があると思ふ。

なご、理屈は申すまい。申すまい。

牛

都會へ出ての成功を望む犂の伊之助ミ、犂の希望は認めながら、娘ミ犂ミを送つてあご、ひりり残された身の寂しさを思ひ、自棄酒でみづから慰める老母ミにからむ人情噺

道話的(童話ではない心學道話の方)の結末に導かず、さこまでも人情噺で押し通したところに、いつもの會我廻家の嫌味のない上作。

流石に岡鬼太郎氏から出た題材、五郎もうまくこなしたが第一種牛がよい。

老母お種に扮する五郎、若夫婦のむつまじさを妬くかき見せて、狂言の底を前半に割らなかつたのが何よりよい。若いもの二人のこさだ。できるこなら廣い舞臺で活躍させてやりたいといふ親心、しかし二人に去られたあごの寂しさがひしひしと迫る老の影も、偽りのない心、絡みあつての人情が誘ふ涙、ほろりささせる軽いよい味

デワンニイタルの見本みたいな、コチ／＼の少年をむりにさそつて芝居へいつたら「石川五右衛門、藤の森の召捕」などはともかく、ケンゲキのめざめざりし時代、あのチャンバラにつきあつてゐたが、その次の所作事「驚娘」といふことになつたら、つひにフン然として、彼は、座を蹴つた。そしてどうしてもかへるといひだした。

「なぜ」

ときいたら

「この芝居はバカにしてゐるよ。いつまで立つたつて同じこと計りしてゐるぢやない

云々。

なるほど、所作事なんでものは、誰がやつても、三十分か四十分、さう、その間に、立廻りの如き、著るしい變化のあり得るものでない。同時に背景の變ることも先づない。廻り舞臺もないとしていふ。いかさま「同じこと計りしてゐる」たあ、並大ていの學問ではいへないコトバだな！とすつかりうれしくアハラしくなつたことがある。

帝劇では、あたら松助の舞臺姿を。

「古い役者だが、いつ迄、立つても巧くも

がある、娘お花に扮する大磯のしほらしさも褒める。李右衛門になつた蝶六、源兵衛になつた五樂さらにもよい味が出てゐる。

涙を含んだ笑ひ、くすぐらない人情、こゝをうまく把んだのが、「牛」の一幕である。

幕あきの盆踊りもあまの淋しさをひきたてゝよい。

ところで――

名題になつた「牛」牛を買はうとする氣持ちだけで、母三娘の心がほつミ落附く、それで充分、あま、こつてつけた風の音ミ牛盗人の件だけ多すぎる。あくさくなつてダツプ三郎が出るのも牛盗人だからだらう。

時雄の伊之助、演りにくい役ではあるが、生なところがある。妻のお花の赤い手柄に見るやさしさをぶちこわす、洋装して何うミかするさいふ白、前受けを狙つてゐるが、二人がこまさらに輕薄に見える。些細なこまだから大阪の上演では注意して欲しい。

もう一つ。幕外の引込み、踊子を二人出してのようさやちうさ。女團七の義平次妾アが機嫌よく踊つて行く。こゝは、曾我廼家のいつもの短所、芝居がすぎた考へ落ちであらう。かういふものは歌舞喜劇になつては困る。

あまり「牛」のこまをギウギウいふミ、モウやめてくれさいはれるから、ニクまれないうちにこちらにもチョンミ柄を入れる。

豫告!! 次號の『道頓堀』は銷夏特別號

まづ、いいからない」

と評した貴夫人があつたさうだ。「巧くもならない」などは恐れ入る! よつほど、氣丈な御夫人にちがひない。

こんな女性を、ミリオンダラカケルか何かで酔つばらせて「劇にたいする御感想を!」てなお土砂をかけたら。

「あの松助といふひと、この頃、鉛毒で苦しいで、さうですね」

てなことを仰言るかもしれない。正に、鉛毒いづくんぞ番頭の志をしらんやでアル。

あなかしこ。

――終

關西 藝界 昔ばなし【二】

瀬川 春江稿

傳説あり、逸話事説等、關西藝界に起つた古實記を書いて見たいと思ふ、幸父山口豊山の藏書に依つて、大方を知るを得、若輩を返り見ず稿を起す。(因に年代の前後は前断す)

坂田藤十郎の事

古來關西劇壇に於いて絶代の天才として、今日迄も其名聲を唄はれたる、名人坂田藤十

七月の浪花座



「己が罪」劇に就いて

菊池 幽芳

この七月に河合喜多村一座が「己が罪」上演について、何か書けとの御注文であるがあまり纏つたものを書く餘裕がないので、たゞ思ひ浮べたまゝを少しばかり書いて責を逃れる事とする。

私が「己が罪」を大毎紙上に發表したのは、明治三十二年の八月で、今日から數へれば丁度三十年前になる、今の若い青年達がまだ生れない前で随分古い話である。この小説は一時に發表して了つたものでなく、前篇と後篇に分けて、前篇後篇の間に、小栗風葉氏の小説と、小杉天外氏の小説が間にはさまつて載つてゐるのだ。前後合はして約二百回ほどの、當時の新聞小説としては珍らしら長篇であつた。で、長篇掲載を終つたのが、明治三十三年の五月である。そのころ文壇は親友派全盛の時代であつた。さて「己が罪」劇であるが、當時新派劇の勃興時代にあつて、道頓堀の成美團が天下

郎は越後の産にて、父は市右衛門と稱し京都の座主たりき、彼が今日迄かくの如き名聲を上げたる出世藝とも云ふ可きは「夕霧」に於ける藤屋伊左衛門に始る、元祿十年冬江戸より中村七三郎登り、京都布袋屋座に開演せり彼はその隣座都萬太夫座にあり座元たりき、然るに七三郎の登りし布袋屋座元山下半左衛門とは、常に興行上の競争者にして心も亦面白からざりき、七三郎の京登りは藤十郎に取りては大敵にて、心中大いに驚き居たりき、しかるに互に初日を出せしが、彼が運に叶いしか、七三郎の布袋屋座は散々の不入にて、都座は殊の外の大入りたりき、此の時一座の者、藤十郎の元に来り、七三郎の下手たるを大いに罵つたり、その折藤十郎はその者を戒め、七三郎は古今の名人にて、京の人は見物が下手なり、我等今度の成功は鼠屎の餘光たり、必らず春興行には同氏に負けを取ることと語り、七三郎の藝を崇敬したり、果して翌十一年の春、「傾城淺間獄」を七三郎演じ、古今の大入を取り百二十日間打通したりき、始めて都座の者藤十郎の先見明らかなるに驚ろきたりとぞ、それよりは藤十郎は益々七三郎をしのぎたい、七三郎亦敵の大將ながら、藤十

に覇を唱へて居た。高田、秋月、小織、木村(周平)喜多村、河合なま多士儻々で、油の乗出した最中であつたが、「己が罪」を成美團の根城である朝日座で初めて演じたのは、明治三十三年の十月興行である。最近は悪い傾向で新聞にまだ小説の載つて居る中から芝居にする事になつて了つたが、當時は「己が罪」にしても、明治三十六年に書いた「乳姉妹」にしても、いづれも當時非常の評判だつたに拘はらず、新聞の小説が濟んで、二三ヶ月後で劇になつてゐる。それはきに時代が悠長だつたので、現在のやうに神經過敏にはなつて居なかつた。この最初の「己が罪」劇の役割を左に掲げる

櫻	戸	子	爵	喜多村	綠郎
宣教師	モリ	ソン	小織	桂	一郎
塚	口	虔	三	秋月	桂太郎
箕	輪	環	河合	武	雄
箕	輪	傳	藏	木村	周平
魚	夫	作	兵	高田	實
島			衛	河村	昶

今思ふに喜多村の櫻戸子爵は畑違ひの感があるが、當時喜多村はさういふものを好んで演じたやうである。大體において役はよく割れて居た。原作のお作を高田が作兵衛で活してから、「己が罪」劇は爾來作兵衛でやつたり、お作でやつたりして居る。つまり後では河合が、お作で仕活かし木下もお作に成功して居る、山田九州男なども立派なお作を出して居る。餘題に亘つたが、さて今から二十九年前の「己が罪」劇の皮切は、非常な成功で、この劇が全國を風靡する端緒をなした。最も評判のよかつたのは河合の環、高田の作兵衛まであつた。そのころ河合はまだ十分に名を出して居なかつた云つてよく、この環が河合の出世狂言であつた。其後喜多村が環役者としてこれ

郎の藝風に敬服し、共に心易く往來なせり、名優の心情亦敬服すべきである、因に此の「淺間獄」「夕霧」並に元祿四年京都山下半左衛門座にて「蝶鏡」(半左衛門、萩野澤之丞)を三脚本を以て「歌舞伎三大部」と呼ばれ、當時は勿論其の後も屢々各所に演ぜられし程の名作たりき。

澤之丞帽子の事

ひたる帽子を掛けしは、水木辰之助是れを用ゐしに始り、其の以前は前髪かつらを付、紅の切にて鉢巻をなしゐたり、其後に至り元祿の名優萩野澤之丞、帽子をかけた、元祿七年江戸に下りし折、やはり帽子を掛けた、爲めに江戸に流行なし、稱して澤之丞帽子と云う、是れより人々眞似たりとぞ。

石井飛禪の事

操人形は其最初は、現今の形ちなく、只首斗りの物にて是れに着物を打ち着せ、手足は遣い手の實物を用いし物なりしが、石井飛禪に至りて初めて人造の手を付けた、然るそれよりしては、是れを用ゐ、又工夫せし者あつて足を付、兩眼、耳の動等それ、新らしき工夫を加へしが、是れ全く石井飛禪の手

また成功して居る事人の知る通りである。高田はその後櫻戸子爵を買つて出て、新生面を開いた。秋月も櫻戸をやり、小織も櫻戸をやつたり度三をやつたりして居るが、度三の方が小織の本役である。

今度道頓堀で河合、小織一座が三君の最初の興行以來何回目かのこの劇を二十九年ぶりに演ずるについては、私も無量の感慨があるが、三君の感慨もまた少なからざるものがあらう。役割はさういふ事になるのか知らないが、河合君のお作、小織君の度三云つたところだらう。私は終りに臨みこゝに三君の健在を祝する。(六月二十日)



怪談

沼田藏六

芝居に書かれた怪談、毎年夏季には斯うしたものを上演する事を聞く。實際私は其理由は判らない。

妖怪談好きの日本人は、子供の時から餘り多く怪談に近接を待ち過ぎて育つた。今の子供は、此傾向はない様だけれき、私共の子供の時分、否や私達の先輩の時代、もつ昔の徳川時代は、恐らく子供の聞く談云ふのは、化物物語許りしか聞かせられなかつたと思はれる。子供は早く寝かされる様に、化物の談で脅かされる。武士の子は、百物語云つて化物語の集會をする。其上で心神練磨云ふ爲に、淋しい墓場へ

を付けしより得たる事にて、彼の功績偉大とも云ふ可き也。

芳澤あやめの教訓

並に傳記

芳澤あやめは初め、吉澤といひ延寶元年に生る、女形として有名たりし同時代の水木辰之助と共に、名優の譽れ江戸に送られたり。本性を齋藤といひ父は早世す、母の手に養はれ幼時大阪道頓堀の男娼に賣られて綾之助と號し、丹波の郷土橋屋五郎左衛門に養せられ、同氏の日頃最貞となせし初世嵐三右衛門の元に、其の縁故により入門す、吉田あやめと號し立役を專一とす、師三右衛門元祿二年死去するに及び、吉澤と改名し立役より女形と成る、時に十八才たりき、それよりしては自然に名聲を上げ、寶永七年十一月京都に登り山下下かも座にて「稻荷長者代纏丸」に稻荷之助と成り、文作系圖の言立をなしたり、此の時評判記には「極上々吉」の位に昇りたりき享保十四年七月十五日五十七才にて大阪に歿す、生前彼の教草として「あやめ草」等の版本を出す、後世女形の教訓として人々に持てはやさる、今同書中に見えたる二三を爰に

まで追出される。斯うして化物教育を施される我等が、化物に興味を持つと同時に、世界の國民中第一に臆病者に育て上げられて了つた。さうして之が古來からの國民性になつて、知らぬ人を見れば怖い。云ふ様に、外國人の前へ出るに、今でも化物同様に取扱ふ様になつた。

私の知つて居る、演劇では四ツ谷怪談が一番の根強い凄さを持つて居る。私の知る限りの妖怪傳の中では、面積に於て、年限に於て被害の程度に於て、殺生人數に於て最も凄惨を極めたものは宗像怪談である。之は獨り私丈の値踏みをしなくとも、私と同じ様な臆病者なれば、此撰擇は蓋し間違つては居ないだらうと思ふ。演劇には、累物語、怪語乳房の榎、小幡小平次、牡丹燈籠、其他類似したものは幾らもあらうが、何故日本人が、四ツ谷怪談を賞美するのか？……

文藝的に書現はしたものは、累物語は殆んじ比較にならない。情話的に見れば、小幡小平次や牡丹燈籠は怪談さには云ひ條、美しさが多分にある。が陰惨な、執拗な、我儘な殘虐な、八ツ當りのな所——即ち脚色が餘り日本人の缺點を深く喰ひ入つてるからであらう。醜惡も、あの程度まで行くに、舞臺の明るさも暗さも問題でなくなつて了ふ。

だが、實際、天地を震撼するに云つた種の大事變であつたらうか、私は内容としては可成り深いものと思ふけれど、それにしても、あの毒藥だか藥が知らぬが、假令醫藥が現今より進歩して居たかも知れぬさ假定して、あんな都合のよい靈藥はあり様もない。昔は都合のいい、藥が澤山あつて、人を痺れさしたり、顔の面相を變へたりしたものだ。之を肯定するに、醫學も藥學も一年一年退歩して來た事になる。するに此大妖怪談の根本になる、主人公お岩形相變化原因は何であつたらう。

あの頃は、日本に梅毒が渡つてから二百年は經つて居た。病菌は無垢な日本人の躰

記さん。

某女形同様に女形はいかが心得たるがよきやと問ふに、彼答へて女形は傾城さよよくすればよし、もとが男なる故に、きつとした事は生れ付て持てるなり、男の身にて傾城のあどめもなく、ほんじやりとしたる事は、よくく、の心掛けなくてはならずと、されば専心傾城のけいこすべしと教えたりき、亦武士の女房にて刀を持ち、つめ寄る場合必ず刀のそりを打事、立派になす物なり、武士の妻にても常に刀を持つにあらず、刀の取りまわしは下手にすべき物なりとぞ、女形は常に色がもととなり、取りまわし立派にすれば色なくなり、赤心を付けてひなやかにせんとせば、いやみと成る、依て日常女と成り居るがよ、舞臺に出で姿が女の仕所と、思えば思う程必ず男に成る物とぞ、女形より立役に成る事を進めらるは恥の恥にて、立役に成り立派といはれる時は、必ず女形の折下手にて、立役に成り悪しき時は女形の時よかりし物なり、女形は常に貞女を亂さずと云うが本體なり、所作事は狂言の花にして、地は狂言の實なりされば花のみ見て實を知らぬは愚の至りにて地をたしかにして花をあしらふと常々若き女

内へ永住した。其當時克く道樂した若者には、此業病に犯されたものは多かつた。お岩が受けた病毒も之であつた。元々から曲つた根生を持つお岩が、此病に取つかれて激しくなつた。悪疾は頭髮を犯し、眼を犯し、爪まで抜ける様になつた。元來が親譲りの弱い病身である。それに婿の伊右衛門は、美しい女を追ふて行く若者である。醜く、口やかましく嫉妬に身を焦す女の傍なきには居たくない。遂外出勝になる。若い女に關係が出来来る。噂は輪になつて大きくお岩の耳に入る。狂氣の様になつて餓つた牀で暴れる。狂ひ死をして丁つた。其死際の陰惨さを見ては何人も遁け出して丁ふ許りだ。

妖怪に脅かされて育つた日本人は、駭くべき考察を加へて、お岩の幽霊を肯定して丁ふみ、事業家が出で、之を宣傳して飯を喰はふとした。脚本作者が之を色揚げして舞臺にかけた時には、お岩は同情の中心になつた。四ツ谷怪談はつまり斯ふして、デツチ上げた、梅毒發達史の一例に過ぎない。

近頃四ツ谷怪談を、新解釋云ふ名の許に色々理屈をつけて色々の人が書直して居る。斯ふして去年も今年も來年も、お岩ミ伊右衛門を持廻つて居る。それを無條件で受入れて飛付く程に、私達日本人には、此四ツ谷怪談は怖いもので、之を否む事も出来ない、悪みも出来ないものである。さうして、お岩の悪口乃至、俳優が演技中に不信心の事があれば、必ず祟る云ふ、之をさえ信じて怖ろしがつて居る國民である。

事大主義の支那にも斯麼執拗な怪異はない様である。怖いもの、凄いもの、強いものもあるが、仲には滑稽染みた化物もある。西洋の怪談には、いつも組織的な處があつて、大陸共通にある、一種の可笑味を多分に具備して居る處なきがうらしい。これは支那が怪物を取扱ふのに反して、西洋は足があつたり、足音がしたりする。けれど、

形に教へしとぞ、仕打が三度續き當ると、その役者は下手に成る物なりとぞ、それは當りたる程度をはずすまるとするがゆえなりとぞ、家に子供幾人ありても、自身子供心にあるは自然の上手と云ふ可き成りとぞ、此の事共若き俳優に教り語りたりき、天晴名優の心掛は愚人の知らぬ事共多かりし様なり、あやめ愁嘆のある役は實に古今無類の定評ありたり。

狂言作者の起源

狂言作者の起源に付いては、種々の説あり然し、伊原青々園氏は日本演劇史に於て、名古屋山三郎を以て其の泉視と語れるが、小生も同氏の説に合意の者なり、往昔は役者作者兼業たる事は、當時の諸本にて明かにて、寛文四年大阪にて「非人仇討」の續き狂言を作しし福井彌五右衛門に依つて初めて、專業の作者名を記録に残すに至れり、然しながら是れとても役者兼業の物にて、初めて顔見世番附に作者を役者より區別して書き記せしは、彌五右衛門の門弟金子六右衛門の門弟にて、富永平兵衛に依て初まれり、その延寶八年の事なりしがその後、平兵衛の作する物、一向

人間が化けて幽霊となり、神通力を以て空中を飛行して、あらゆる人の智識を散々に踏み蹂つても、悪虐の限りを盡すなんて事は、日本の化物丈が出来る藝當であらうで、此方の文獻は可成私達の眼に散見する。

それからお化の出る原因である。之は付うも嫉妬心に次で執着心——死度くない、殺されても死なない云ふ強情である。——生の執着が化物の要素なら、西洋人は此點は極端な筈である。が、それでも殺されて了へば夏の芝居なごへは顔を出せないそれに却つて死を求め様にして行く日本人が、直に妖怪になつて了ふ。此點は今以てハツキリしない。

化物の方から見るに、佛教はお化禮讃の宗教らしい。日本に化物が採用されるのは佛教で、英雄崇拜の日本人は、手に合はぬ化物は凡て神様に祀り込んで、暴れない様にして貰ふ奇風習がある。

が、神様に祀られても、伊右衛門の子孫でも姻者でもない無關係者に祟るに至つては、一寸困つたものである。



三人の女

河合武雄

『己が罪』のお作は、菊池寛先生の『海の勇者』の母親ミミにも私の好きな役です。母性愛を高潮したこの芝居は新時代のものとしては、余り主題が常套的なものですが。

に見物と呼ばず、座元の者心やみて、今一と工夫ある作意あるを申出しに、彼答へて「替る度毎に能き狂言を出し、もし其の狂言に見あきなば道頓堀に草はゆべし」と語りしとぞさればその作意餘りに振はざるといひ、現今俳優と作者の區別制を置きしは、全く彼に依つて初められし物なり。

芝居の起源の事

即ち歌舞伎の初めは何國に依り創立せし事世の人の知る所なり、(諸説有れど余は是に信を置く)織田信長の許を受けて、北野の人升(八升とは陣立の禮古の場所の由)を拜領し時々興行す、依つて芝居と稱ふ、其後五條河原橋の南に興行すれ共、秀吉通御の折簡、見物群集の爲めに妨と成りしより四條に移されたり、慶長八年頃は尤も盛んにして、同十二年お國江戸に下り女歌舞伎の流行を専らにせり、その爲當時江戸に於て風紀を亂す事一方ならず、徳川政府は同十三年女歌舞伎を江戸より逐いたり、されど其の根を絶す事叶はざりしが、三代家光の時即ち寛永六年、令を發して、女舞、女歌舞伎、女淨瑠璃を禁じたりき、かくの如く江戸に於ては堅くその興行を禁じられたりといへ共、京都に於ては村上交

親子の根強い愛慾を剔抉した純情さなどは、たゞ單に古いの一言で片付けられぬものがあります。薄つべらで内容の貧弱な戯曲の多い現代にこうした純眞さのあるものも何んか新鮮らしい感覺ミ手法ミで今後も永久に生かしたいと思ひます。この度もその意氣で演出は勿論、内容も大分改作して自然な新しさを出すつもりです。時間の都合から舞臺裝置は兎岩からお作の住居は引き抜きで新機軸を出して見ました。

眞山先生の「紅燈新話」は「假名屋小梅」「薩摩紅梅」ミ共に限りなく敬意を持つて居ります作品です、染次ミいふ役は狹斜の巷によくある藝者の意氣地ミか氣慳ミかいふ藝者氣質を氏一流の深酷さで解剖したもので、先生の鋭いメスの牙へが縦横に振るはれた一種の性格劇であります、私のやる染次は勿論、稻岡でも、篠崎でも、お蝶でも實によく各自の性格を描きつくしてゐます。芝居全體に一言一句の無駄のない同到な手には私は敬服して終ひます。最善の努力をつくして原作者の意氣をつたへたいと苦心して居ります。

『新四つ谷怪談』は瀬戸さんが、南北の『四つ谷怪談』を種材にして新解釋をおこしたもので、怪談ミごふもの使ひ方が實に手際よく、現代の人々にも合點の行くやうな手法で運れてゐます。旅後者の中山仙十郎の女房お峯を私が演りますが、曩に大阪で喜多村君が一度上演されましたさうですが、私ミしましては初演であります。新工風で目先を代へた演出をするつもりです。

旅先のコミで心急ぐま、筆を走らせました。未だいろいろ書きたいのですが巡業中のこむとてこのくらいにして置きます。

兵衛、承應二巳年三月歌舞伎物眞似興行を願ひ出で、明曆二丙申年四條河原中橋にて興行す、是れ關西に於ける歌舞伎芝居興行者祖とも云ふ可く、其の道の人は大いに敬む可き事なり、亦大阪の芝居は寛永の始め、道頓堀九郎右衛門町の裏下難波領に、此の所の傾城を築め、御國歌舞伎と稱し興行せしといへど、徳川令に依り停止を受けし爲め、座主鹽屋九郎右衛門若衆歌舞伎興行を願ひ、許可を受けて芝居興行をせり、即ち中の芝居の祖たり。

作者格言

前文に記せる當永平兵衛と同門にて、金子吉左衛門の弟子たりき、元より俳優たりしが彼れは作者として其の名を上げたり、元祿中の頃より享保に至る頃は彼の尤も得意とする所にて、然し彼れは元祿の三年評判記に、道外役者の「上々吉」として掲げられし所を見れば、俳優としても一塵の名聲ありし事を知る可し、彼れが大阪に現はれしは正徳二年十一月にして、享保三年十一月再度京都に歸り翌四年大阪に來り、又々京に歸りしが十三年頃より彼れの名を見出し得ぬ所を見るに、其の頃死去せし物にや、詳ならずといへ共彼



紅燈新話雜記

櫻井芳太郎

大衆云ふ言葉も可成り古い言葉ですが、此の大衆云ふ言葉が私共劇界で生活して居る人間には、尤も尊い大切な言葉で見過し得られない二字であると思ひます。劇界の大衆と言へば餘人は知らず、私は第一に婦人、そして子供老人も、最後が男子にモットを置き、これに向つて進み、此の大衆に迎へられる様な狂言の撰定が第一であらねばならないと思ひます。

新派劇の不振、こう云ふ言葉も可成り古くから私共の耳にして來た事ではあります。これは新派云ふものに對して餘りに残酷な言葉ではないかと思はれます。では歌舞伎はどうか、新劇はどうか、劍劇とか猛鬪劇とか言へるもの、現在はどうでせうか、新派劇生れて五十年近く、今日こうして生存して居るのが何より立派にそれを説明して居る事と思ひます、只一人新派劇のみ不振、不振の聲を浴せて下さるののは餘りに残酷だと思ひます、歌劇生れて歌劇去り、新劇生れて新劇滅し、劍劇猛鬪劇名づけられた怖ろしい名のお芝居の時代も、僅かに五六年の短日月の生命よりありません。現在その存在すら認められて居ないのが何より立派に、世相、觀劇大衆の方々が物語つて居られるではありませんか、其處へ行くに新派劇は昔日とさしたる變化もなく、

れが生前、口づきみしには、當り狂言の折は立者は勿論、幕引馬の足に至るもよく見える物にて、不入の時は名人上手たりともその程に見へぬ物なりとぞ、されば當らぬ時は役者物てなまげ氣を出し見苦しく、大當の時の如く工夫の上に工夫をこらせば、必らず不入の芝居も良き結果を生まんと若き人々に語りしとぞ、今の俳優には少しかゆき心地する程の良言ならん。

松本名左衛門の名言

彼れは全文に記せし、大阪道頓堀の芝居の祖、鹽屋九郎右衛門の座主役者にて、女形として其の美は大阪に知れたり、「耳塵集」に松本名左衛門の言として記して曰く、

我と人と居並び所作するに、獨り舞ふ時今一人は囃子の前に住い居る、此の時多くは休みて湯をのみおれり、我は休まず囃子の前に住い居ても、心の中にて舞ふて居るなり、然らねば後ちに姿悪しくて、所作切れる、と。

此の一言にても正に當時の名優として、平素の心掛ありし物と思う、現今開幕中、舞臺にて雑談をなせる者や、他人のおかしみを見て笑ふ等とは、天地の差あるを知るべし。

以前歌舞伎劇三對立して、今日をなして居るのが、強い我る何物かを持つて居るの
はありますまいか。

話が大幅協へ外れて済みません。

ですから現在の新派の人々は劇藝術を向上させるに云ふ點では出来得る限りの努力
と研究はして居られる様ですが、一方では又墮落しない低度の一般大衆向の狂言撰定
に苦心をするのです。今度の紅燈新話が初めて舞臺に上せられましたのは、確か大正
十年の二月東京の明治座であつたと思ひます。當時作者の眞山生先は封じ文云ふ題
名でこれを創作せられたと思ひますが、上演の際に紅燈新話三改題せられて今日にな
つたと思ひます。當時の出演俳優は、河合、小織、木下、英、村田の諸氏で書下し
當時の儘の人々を、今又此の浪花座の大芝居に集めて上演されると云ふ事は、懐しみ
があり何よりも嬉しい事と思ひます。

書下しの時は何分二月云ふ極く寒い最中の事ではありましたが、序幕の鶴見花月
園の場など舞臺一面櫻の大樹を植え、行燈に灯など入れまして極く明るい綺麗な舞臺
でありました。又大詔染次宅離れ座敷の普請場など當時舞臺装置擔當者でありまして
現在報知新聞に入社して居られる太田雅光氏が、新橋の或る待合で普請中の家があり
まして其處へ早速出掛けて行きスケッチして来て其儘の舞臺面を現出した云ふ程の
大道具でありました。今度は何分暑い盛りの事ですから出来るだけ涼味を加へ、舞臺
一面に七草の盛りを見せ、納涼氣分を十分は味へる様にしたいと装置擔當者の松田種
次氏が、可成苦心して作製を急がれて居るやうです。
寒い云ふ言葉で思ひ出しましたが、氏の紅燈新話の舞臺稽古の夜、確か一月の卅
日か卅一日の夜だと思ひました。朝の内から少しはチラ／＼と催しては居たやうです
が、夜に這入つてから大幅な吹雪になつて仕舞ひまして、九時十時云ふ頃には最ふ

嵐三右衛門の逸話

彼は攝州西の宮の人にて父は江戸に魚問屋
をなす、三右衛門は下りて諸役者となり丸小
三右衛門と名乗りたり、一夜嵐といへる狂
言に名聲を一度にあげ、同狂言中の白に「花
に嵐」とあるより得て、人異名に嵐々と呼び
しよりついに嵐と姓を改めたり、其の當り狂
言も数多く、年五十六才にて元祿三年十月歿
したりしが、其の門弟には後の名優芳澤あや
め等多く名を得し物ありき、彼は生前ある狂
言初日以前に、己が宅に相手役者數人を呼び
元より酒好なるゆえ酒を出し、盃重ねるに
つれて其の座にある子供にたわむれ、正躰な
かりき、相手の若き者その様を見格氣なし、
様々に三右衛門を罵しれる折節、坂田藤十郎
來り仲を直し盃を出し、はや初日もせまり餘
りの喧嘩口論、少しくたしなむ様申けるに、
三右衛門膝をのり出し、我等今度の役は、格
氣をうく可き役、それゆえ今若き者にそのけ
いこをなせし迄なり、宜しく今の心組にて今
度の舞臺つとむ可しと語りしに、さすが藤十
郎も發心なせしとぞ、さればその教へ子に後
世幾多の名優を出せしも、元より此の心掛け
然ればなり。

電車が止まる三云ふ程の騒ぎでありましたが、其裡でも役の早く上つた人々は徒歩に車をそれく吹雪の中を歸りましたが、然し一座懸命の舞臺稽古はなかく夜の二時三時になつても終りません一同其の寒さの中に汗までかいての奮闘振であつたからです、漸く稽古の終つたのが午前五時、それく我家に引上ぐ可く表にミ出た時は、雲は何時しか止んでゐて、空には一面の星が降つて居りました。

七月の角座



岡田嘉子のこと

日比繁治郎

岡田嘉子について

何か書かこうとする

そのくせ何んにも知らない

天才だつた新劇研究時代

踊らせ上手の岡田嘉子

北村兼子

道頓堀行進曲は靜かに開くよりも踊らせる歌である、道頓堀といふところは靜かに歩くよりも踊つてあるところである、岡田嘉子さんは靜かに沈んで考へてゐる人ではなくして踊つて世を渡る女である、舞臺で踊るのも上手だが、見物の心を踊らせるのは更に上手だ、七月興行はこの意味において確かに成功する、この前に松竹座で見た行進曲は照明もよかつた、ジャズもよかつたが舞臺装置が舊芝居の書き割りのようであつたのが玉に疵のようと思はれた。

私はいま日本の土を離れるため旅装に忙しい、この原稿が皆さま方に讀まれる時分には私はハワイの汎太平洋婦人會議で日本代表の駄尾に附して下手な英語演説の笛を吹いてゐる時分であるが碧い眼の人たちはその音いろで踊つてはくれまいかと心配してゐる、これが嘉子さんなら自ら踊つて人の心も踊らせるのが上手だから誂へむきの役者である、歸朝つてからそのコツを聞かせてもらひに參上す

花やかだつた日活のスター時代
もちろん何んにも知らない
また知らうともしなかつた
道頓堀の松竹座で
行進曲を見たのが始めてだ
けれども

何んにも心を惹かれたものがない

それにも拘はらず

此ごろのサンデー毎日に

嘉子が書いた文章を見て

すこし私の心に觸れた

亡き母を慕ひ

父を憶ひ

世の中の嘲りを忍んで

辱も外聞も物かは

生くべき道に闘へる

健氣な心、雄々しき姿

すこし私の心に觸れた

行進曲の舞臺で見た

大きな瞳

小さい軀

すこしづゝ記憶が甦つてくる。

るかも知れない、またゆつくり筆を執つて感
想を書き直すこともあらう。

私は「經濟往來」に書いた論文と「新愛知」
や「法律春秋」等に書いた漫文を置土産とし
て日本の土に告別します。

中座配役一覽

中座曾我廻家五郎一派は、七月一日初日に
て第一『ほとばしる水』一場、第二『名刺』二場
第三『研辰の富園』二場、第四『牛』一場、第五
『出船入船』一場を出した。その配役は、

建築請負師今村直吉、近習研屋辰次
母親お種、大工畑中作三(五郎)番頭上
田勤七、大工芳松、水茶屋吉兵衛、木
村空右衛門、父親畑中作兵衛(蝶六)娘
鈴子、神原三平太、妻お花(大磯)店員
堀内實、高利貸今村善兵衛、棟梁尾田
吉藏(小次郎)仲仕松助、百姓宗六、工
夫伊之助(笑將)天満屋主人中川幸兵衛
紹介人小村太兵衛、番僧良界、宿引源
兵衛(致雄)若者三吉、按摩幸兵衛、百
姓樋口源兵衛、大黒屋嘉兵衛(五樂)妻
お和歌、女房お瀧、百姓娘お米(林蝶)
妻お小夜、女房お杉、新聞賣子(蝶壽)
店員矢田平七、郵便脚夫、除隊の兵士
(三郎丸)丁稚榮吉、丁稚長松(なたね)
娘お千代、妻お里(時和)

俳句 煤蓑選

『日傘』

日傘池の柳はしほれけり
 傾けて小路へ入る日傘かな
 町の端に出るや日傘の藻の匂ひ
 砂濱を行くや日傘の影濃き
 うづくまる日傘や近き海の色
 渡舟場の芦間にひくき日傘哉
 峠まで幾まがりなる日傘かな
 川石の焼くるをつたふ日傘哉
 丘の砂小さき日傘のかけり哉
 日傘あつし眞晝の鳥の影
 日傘行く大野の果てやちぎり雲
 日傘子等が遊べる夾竹桃

『涼み』

七夕の笹に灯りて夕涼み
 涼み舟遠くなり行く橋一つ

葉 秋 夏 同 一 同 溪 同 汀 同 直 同 子 浪 静 香

盆裁の雫を見やり夕涼み
 涼み臺噂の人の通りけり
 打水をするに聲かけ夕涼み
 涼み牀くらきに置けば虫の聲
 提灯の灯し火ぬるし涼み舟
 涼みるてすゝろに寒き橋の上
 涼み舟汽船に隠るもおもしろき
 涼み牀往来も絶えて一人かな
 涼む人まばらになりぬ土堤の月
 夕涼みかろき疲れを愉しけり
 月見草に涼むきもなき一人哉
 (賞)

次回題 『月』 『朝顔』

蝶々も追はず日傘の影遠き
 夕涼み雲に故山を喚び起す

選者吟

田の水に心くばるや夕涼み

淡 秋 幸 つ 敬 同 一 同 直 同 同 同 溪 午
 水 晴 吉 子 郎 步 子 午

芝居短歌

山上貞一選

六月の道頓堀

吞舟の魚を逸してますら男があぢきなき世の秋か
 こつなり 米 坊
 あらそひは國を思ひ友を思ひなほも國ゆへ遠去り
 勝 二
 右に開き左にひらきて花ぞ咲く背きし人のありて
 俊 雄
 甲斐あり 正 明
 空の色は絶えてかわらじ空を見てこゝろなごまむ
 米 坊
 世捨人かな 米 坊
 人の世のやがて咲くべき春またで蕾のまゝに散り
 大義親を滅すさいへさいまさらに弓矢さる身の苦
 衷ぞ惚ばゆ 米 坊
 比叡山の山のおろしににほひ出づふたばに果てし
 孝子のいさをし 新 次 郎
 子のために孫をし斬らむ老ひの手をあけてかな
 しき刀のおもさ 春 野
 荒寺のふすまのひまゆ吹く風にあはれ散りゆく女
 のいのち 玉 枝
 たそがれてあかつきそめむ人の世にあかつき待た
 で逝きし黄昏 玉 枝

讀めたりな名は讀めにけり出づる日に二見ヶ浦に
 明からずぞ鳴く 銀 杏
 貢はも振りかざしたる下坂の血刀に映ゆる紅の提
 灯 銀 杏
 あでびこは悲しきいのちをはてにけりあやめ畑に
 夏の雨ふる 春 宵
 夢のごころつゝのごまくまごろみのしゝまにひゞ
 く笛のひこふし 春 宵
 盲人の手すさびに引く三味の音にあはれ言ひて
 泣きし君かな 彌 三 郎
 十字架にさゝけし身には父親のなさけもいまは仇
 になりけり 春 宵
 はなやかに踊り狂ひし人形のくるりま向きしうし
 ろのおかしさ 智 恵 子
 梅川の身代金に忠兵衛が思案にくれし夜の川端
 智 恵 子
 月おちて夜の川べのしづけさに羽織のするりさ落
 ちてさびしき 染 次
 御守殿の金のうちかけほのほのこ見えてうれしき
 櫻木蔭 智 恵 子

次號課題 『七月の道頓堀』

(狂言にても俳優にてもよろし、又新派舊派の別なく隨意隨感
 芝居にちなめる短歌)

劇

評

編輯部選

近八観たまゝ

西 岩 雄

待たるゝものは「近八」と日を數へて居た時節到來!

役者の神様成駒家丈の盛綱天下一品、氣品に富み情愛溢るゝばかり、歌舞伎の型を眞一文字に尙且丈獨特の技巧には息をもつかず觀せられた。消入らして又生かして行く等々:「聞きわけてたべ母上」と小四郎を殺してくれと頼む件は宛然士の盛綱でなく微妙の子供としての盛綱のやうだ。首實檢の型一點の打處とてない。弟うまくやりをつたなと思入、目の前に甥小四郎の自害をみ、幼き者にも忠孝の志あり、たとへ自分は切腹しても何んで犬死さゝれやうとの腹藝、グツと眼尻を上げてみせるあたり、正しく歌舞伎の典型と云つても過言であるまい。「母人ほめておやりなされ」の件、篝火、早瀬にも、褒めてやれほめておやりなされ……褒め、褒めてほほ……との潤聲、此の情愛に思はず涙誘われざるを得ない。「出かしたな」と兩手を上げ日の丸扇をかざしてきまると云ふ武道の段取、美麗と云ほか佳麗と讚えやうか、何れにしてもよい

極みである。市藏の微妙、佐々木の後室に相應しく、吉三郎の早瀬も盛綱の妻として難なし。魁車の篝火、吾子の愛に居たたまらず敵地へ忍んで来る親心さもある可と思ひやらる魁車は八方美人、好きな人だ。敏夫の小四郎も認めてやる可しだ。

舞臺装置に就て、一幕一場は二場を以て最初から通しては如何?尙又首實檢の場面、總大将も盛綱の間隔が近過ぎて重々しくないきらいがありはしないか。總じて此の劇は盛綱陣屋なれば一幕物とし十分である。

扇雀に對する希望

山本 秋晴

名優鷹治郎の御曹子扇雀丈は、筆者が好める俳優の中の最も好きな一優である。敢て名門の出とか、或は技藝が巧である計りの意味ではなく、將來我國西劇壇を双肩に荷つて立つ、重大な責任と使命を有する把持者として、十年、二十年後の劇界に風雲を捲き起す偉大さを期待するからである。然るに、最近出演の各劇場の配役を見るに、中座五月興行「天平劇」の櫻兒、「壽し屋」のお里、「戀巴」の卯月の如く、或は角座六月興行の「時鳥雲間

月」の愛妾時鳥と小織之助の二役、「長崎の鷄」の娘お雪、「延命院秘事」の条村、中座に於ける、「田舎源氏」の娘黄昏等、異常なる大役を割與へられ、他優と比較して遜色なき迄の舞臺効果を現はしては居るが、未だ名優としての畑には、前途尙遠きの感が殊に深いと思ふ。そして斯の如き大役は本人の尤も欣幸であるとしても、多幸なる同優の爲め筆者の探らざる處である。されば將來父成駒屋の名跡を繼ぎ、名人たるを望むならば、目下の辛福に嬌らず、此處二三年は東都に出て、假に端役たりとも熱心に技藝の練磨を誤らず、且つ先輩諸優の師導宜しきを得て後、自然が持つ天才を發揮せざれば、百年の梅を後世に残す事となるであらう。願はくば父鷹治郎は愛子の爲め、白井社長は名門を惜むの意味に於て、眼を此處に注ぎ、扇雀の爲め、一大發奮の好機會を作られむ事を切望して置く。

關東劇壇に劣らず

西川 劇 痴

當六月の道頓堀の歌舞伎畑は近來稀な大收穫で實に悦ばしい。狂言としては中の「西郷と大久保」、角の「冥途の飛脚」と「延命院秘事」人としては中々多々あるが先づ第一の殊勳者として壽三郎君を挙げたい。八右衛門の役の性根を充分掴み得た味さ、柳全の大膽不敵の悪黨ぶり共に近來の傑作、其上中座の桐

野も岩倉も悪くない。次は福助君の久保と我童君の忠兵衛で、其次の優等點は扇雀君の黄昏と桑村、延若君の西郷、長三郎君の光氏を見なかつたのは残念。其代役の吉三郎君熱心は認めるが調子の出し方に注意して貰ひたく思ふ。ひとし君の伏見人形扮装が特に味があつた。橋三郎君に之と云ふ役がないのは氣の毒であつた。兎に角有望な人の多い事は決して關東劇壇に劣らない。どうか是れから時々壽、長、扇、橋、霞等を主に福、延、我、魁、右等を脇にしたものを見せられたい。何しろ阪壽君の光秀の様な立派なものもあるから。終りに扇治郎氏のいつ迄も健全で我等評するは勿體ない位の盛綱や貢を又見せられん事を祈る。

扇雀の引窓をみて

大井重一郎

誰が見ても之は扇治郎の小さき模型である名優扇治郎を目あてにひとへに勉強する心掛は推賞するに足る。然かし其一言半句の白、一舉一動の科まで踏襲せんとする考へは問題だ。唯一つ變へたのは、扇は例の「河内へ越へる拔道は」の白を居所の儘、入口二階と氣を配つて言つたが（昨年南座）今度扇雀は出陣の前で立つて言ひ思入も案外アツカリした。之は父を凌いだ賢明な解釋である。いふまでもなく茲は十次兵衛が長五郎に本心を聞かせ

芝居のヤマもある譯だから特に力點を強めた此度の演出は正しい。尤も流石は扇治郎で大正十三年十月中座では之を爲てゐる。となる所詮扇雀の獨創は一つもなくなる。藝のフクラミ角々の極りは仕慣れて來れば自然圭角が取れて行くだらうの考ならば危険である。模型は遂に模型である。扇雀は自己の肉體を知り、いつまでも成駒屋はんの芝居でもない大阪の次の觀客を知るべきである。

鷹次郎への疑問

扇治郎の油屋は刀の崇りて人を斬るといふ解釋である。貢の一家三代に崇つた青江下坂故、之に一理はある。又別の案では崇りにせざとも、封印が切れてから思切つて男の意地を通す梅忠のように茲でも又、耻辱をうけた復仇をして可い筈である。之も亦舊劇の男の共通性だから。尤も前者の解釋だと扇の演出は實に巧い。其出の形のよき、刀其自身が動いて人を斬るかと思ふ程の技巧は取立て、よい。問題は幕切に喜助が出て「其が青江下坂」だといふ説明を興へるのが不可解である。成程之で解決はつくけれど、其爲に人の心に切實に訴へるものを残さない。解決を興へて目出度し、で終ると見物の氣分が散佚して劇としての面白さが缺けて來る。而かも安ぞ知らん、油屋に次で貢切腹の場がある。今度の油屋の演出を以てすれば刀が手に入らぬ爲の

申譯にする切腹の場を鷹はどう續けるかが聞きたいのである。

中座の劇評一ツ

春 月 生

成駒黨を如實に發揮したやうに昨年末から今月まで三度鷹次郎丈の芝居を見た。而し扇治郎丈を主とした劇は先輩諸氏に譲つて私はその熱演に動された延若、福助兩優を主として演出せられたる「西郷と久保」について劇評を許されたい。

序幕に於ける福助氏の久保は完全に生かされた。堅い決心を纏すあたり立流な出来だつた。けれども橋三郎丈の伊藤博文と九圍丈の黒田清隆には歌舞伎俳優の演じたると思ふ點が多少としても潜在してゐたことを肯定せずにはおられない。第二幕の閑議の場何となく寂しく感じたのは如何したものか、閑議とはあんなものかと思はざるを得ない。維新當時の三條や岩倉公の態度はあであるとは解せぬ。最も原作がかくある以上止むを得ないとしても、大詰の越後屋の寮に於ける場が延若の西郷が一番よかつた。天を見て桐野と共に歎ずるあたり一大異彩であつたことは此劇の中心たるを失はない。壽三郎氏の桐野も左圍次丈を偲はせる會心の出来だつた。正義一徹の武士らしく見へた。舞臺裝置として夢の場がよかつた、而しもう少し明るさを徐々に増して來たら如何でせうか。（冒許多謝）



新聲劇と 思ひ出の辨天座

徳田純宏

強ち、新聲劇は限らないが、新國劇

にしる、其他の劇團にしる、劍劇名をつく劇團の大半は道頓堀の辨天座へ懸つてゐるやうだ。そして辨天座のファンシ劍劇團とは密接な何物かゞありさうだ。左様した關係か奈何かは知らないが、今日迄の劍劇の歴史を繰つて見るに、何の劇團も餘り不成績には終つてゐないやうである。

今度、夏季短期興行云つた名目で、新聲劇も何年振りかで辨天座の舞臺へ上る事になつた。他の劇團はいざ知らず、新聲劇に執つては辨天座は可成り思ひ出

の多い劇場である。

辨天座から浪花座へ、浪花座から角座へ、そして角座から辨天座へ三つまで四つ目の新聲劇も道頓堀の櫓を三つまで四つ目の新聲劇のマークで飾つて來た譯である。變にこだはつた意味や、對劇場階級の觀念を無視されつゝ、ある今日の場合、民衆劇として旗幟を明らかにしてゐる新聲劇が簡易なる興行政策の下に辨天座で蓋を開けるに云ふ事は悪い事ではあるまい。況して新聲劇に執つての辨天座は因縁淺からぬ劇場である。新聲劇が今日の聲望を地盤を固めたのも悉く辨天座興行時代

の賜である。だから劇團的恩惠の淺からぬ辨天座へ縦令短期興行にもしろ、せめて夏季丈でも今回の様に出演するに云ふ事は寧ろ當然の歸結であるに重ねて一言して置きたい。

偕、新聲劇の往時、況ゆる辨天座時代を回顧して見るに可成り變遷の跡を窺ふ事が出来る。今日の新聲劇の中堅を掌つてゐる中田正造、辻野良一、伊川八郎等は脱退黨の山口俊雄、小笠原茂夫等と同様、新聲劇がある過渡期に有面した時加入した人々である。だが之等新進の諸君が連名を飾つて以來劇團の基礎は益々堅實さを見せて來たやうである。だが其以前、況ゆる新聲劇の前半期——創立以來より今日迄——としての姿を顧みて可成り惋惜たる物があつたやうだ。だが私は今茲で新聲劇の歴史を説きたくない。何れ纏めて新聲劇回顧録でも云ふやうな物を或る機会に發表したいと思つてゐる。たと此場合新聲劇對辨天座との關係上

些か思ひ出の多い事に就いて寸感を述べ
る事に仕様。先づ今日尙時々再演を見せ
つゝある一旭旗風」劇であるが、之れ等
は新聲劇十八番中の十八番物であつて、
此狂言の開演當時は素晴らしい勢ひであ
つた事は今尙眼に泛ぶやうである。それ
に次いで「荒木又右衛門」或ひは「龜甲
組」等の狂言も道頓堀の人氣を高めた事
は慥かであつた。その當時に於ける辨天
座は宛で唯我獨尊の形であつた。而も、
毎日出る大入袋はさのみ珍らしくも難有
くもない位であつた事も思ひ出の一つで
ある。

それと同時に、俳優諸君も其當時は覇
氣があつた。決つて理に馳つてゐなかつ
た。下らない輿論や批評を屁にも思つ
てゐなかつたやうに記憶する。だから常
識から論じて一瞥の價すら無い演出も、
一種異様な閃き魅力を有つてゐたので
ある。そしてそれらの力で總ゆる正當な
る批評眼を拂拭せしめてゐたやうである

同時に俳優の内の生活も今日のやうに整
然たる物が見られなかつたやうである。
私は之等内的生活の細微に涉つて此場合
説きたくない。だが慥かに一種の蕪雜さ
があつた。云ふ事丈けは云ひ得る。處が
之等劇俳優の通有性にも見られる。或
る粗野な純朴さも、時勢に對する理智の
向上に依つて一つの賢明さを現はすやう
になつたのである。そしてそれらの心
境の一端は必然的に舞臺上へも浸透して
來た。云ひ得るのである——私の思ひ
出が大分理に馳つて來たやうだからこれ
位いで止す事に仕様。たゞ最後に一言し
たい事は一つの劇團はその劇團が目標と
す。生命に對して純真であらねばならな
い事である。換言すれば、劍劇はその名
の示す内容に對しての銳さを失はしめな
い事である。劍劇のファンは劍劇から歌
舞伎の精髓を求めてはゐなからう。云
つて劍その物の字義的專横を極める事
もない。

辨天座新聲劇の配役

第一山本夏山氏作「暗若林大尉」一幕、第二大
森痴雪氏作「血染の瀑布」五幕九場で七月一日
初日を開けた新聲劇の配役は、左の如し。
(順序不同) 筏乗民沙伴、松平伯耆守(鈴木) 陸
軍大尉若林峯秋、金引の若者莊三(小波) 民會
紳士、用心松田一郎右衛門(山本) 坑夫宇勢眉
柴崎要人(一條) 澤村又七郎(伊川) 三國屋兵衛
船戸勘助(新田) 潭村又七郎(河村) 船長林
衛(芝田) 岩瀧の十藏(中田) 文珠の漁夫作兵衛
(名越) 鮮人紳士、新濱の辰吉(河村) 船長林、
橋立の久兵衛(田中) 伴信淨念(中山) 紅蓮、遊
女菊次(若柳) 新夫人たみ子、遊女小稻(金剛)
妻かな子、腰元松ヶ枝(濱地) 伯耆守愛妻萩江
(和歌浦) 母親お花(中村)

尙「血染の瀑布」の梗概は左の如し

伯耆守は國防の充實を計るため金引の水を
城内に引入れた。城下の百姓は連日の旱魃
で困つてゐたので、妻萩江が化粧水に引い
たと宣傳へ罵つた。此時、偶然にも萩江
の戀人であつた十藏が露領から歸つて來て
萩江の父が百姓等の迫害から救ふ、そして
吉三郎、莊三と計つて村民のために盡す。
斯うしたうちに、吉三郎は萩江の金布の溜
遊覽中ピストルにて撃つ、そして金引の大
堰關を破壊すべく三國屋の子分、家中の武
士等と亂闘の末目的を遂げて城下の村民を
助け、十藏、吉三郎は自刃をする。

脚 本



天井裏の散歩者
二幕
三場
瀬戸英へ

登場人物

會社員 森本 俊治 藤村 秀夫
その妻 お杉 杉 英 太郎
劇場の事務員 宇田川 秀夫 野澤 英一
その妻 お糸 村田 式部
お杉の父 輝 造 福井 茂兵衛
家主 尾崎 小織 桂一郎
仕事師 甲 玉川 清
同 乙 山口 良之助
同 丙 井上 芳夫

第一幕 (二軒長屋)

二軒長屋、同じ構造。

上手の一軒は或る會社員の森本俊治の家下手は或る劇場の事務員宇田川秀夫の家。

幕が開いた時は宇田川の妻のお糸が寝てゐて、森本は酒をかたむけながら新聞を手にして怒鳴つてゐる。朝である。

森本 おいお杉お杉お杉……まだ歸へつて来ないのかな、酒がないぞ酒が……へん馬鹿にしやがつて川崎造船所がなんだ、十五銀行がなんだ(新聞をたゞきつける) どうして呉れるんだ、此の森本俊治の損害を……ポーナス金二百圓也正に盗まれ候事實正也どうしてくれるんだ。

お杉出て来る、手に一升徳利。
お杉 貴方お願ひですからそう怒鳴るのは止めて下さい。

森本 何。

お杉 そりや貴方の氣持ちはよく分つてますけど、盗まれたものなら仕様がないうですから勿論私も贅澤は言ひませぬし貴方さへ少し不自由を我慢してくだすつたらあのポーナスを使はなくても済むんですからもう盗まれたものは諦めませうよ。

森本 馬鹿、お前はそれだから薄情だと云ふんだ俺は金が惜んぢやない此の半年の努力が惜しいんだ、お前は自分で豫せがないから盗まれたポーナスならと云ふ氣になるんだらうが俺にして見る、半年間電車では人にもまれ、會社では課長ににらまれ、カフェーでは女給に嫌はれ。

お杉 え、何んですつて。

森本 いや、その……それは何んだカフェーへも行かずに働たらいた半年間の汗の結晶を泥棒に盗まれた此の腹立ちを何處へ持つてゆけば可いのだ、此の新聞を見る堂々たる大會社大銀行が儲けるときは儲けておいて重役配當金百五十萬圓也だ、いゝか一朝經營困難におちいれば政府に泣きつく、

政府もこれを救済しようとする、大臣なんでもは俺達よりは金持だ、いゝか、金持ちが金持ちを救済するのには俺達薄給のサラリーマンが半年間の汗の結晶たるボーナス金二百圓也を盗まれて之れを救済してくれるものがないとは何たる社會相の矛盾だ、此れを欺かずに居られるか。

お杉 まア貴方、御近所もありませぬ、あまり大きな聲をなさないで下さい。

森本 いゝや俺は大いに怒號する、此の新聞を見る、背任横領罪で收監された重役があるいゝか、彼等は俺より高い月給をむさぶつてゐる、其奴がだ、社長専務色々に共謀して不正を働らいてゐたのだ、正直に働らいてゐる奴は盗難に會ひ、不正直な奴は其の罪の曝露するまで酒池肉林を徘徊してゐるのだ、こんな馬鹿氣話があるか。

お杉 貴方、貴方は酔つて被在るんですから少しお休みなさい。

森本 お杉お前はどうかしてさう良人に對する愛情がないのだ、俺がこの浮薄な不正な功利的な現代世相をなげいてゐるのに何故も

つと同情してヒヤヒヤとか何んとか合槌を打つてくれないのだ。

お杉 あなただつて醜くないぢやありませんか、ボーナスを盗まれたからといつて自暴酒をのんだり。

森本 え、さう云ふ奴だ、此の新聞をみる、

いゝか六十八になる父親これが中氣だ六十三の母長男が三十で月給三十圓だ、長女が十九で十九圓の内職をしてゐる、次女が十七で之れが死んだんだ、葬式を出す事が出来ない、其の費用がないんだ、まだ三女があるんだぞ、五人暮して四十九圓の収入だ、いゝか米を五斗食ふとする、一升四十錢として四五二十圓だ、家賃が十六圓かな三十六圓が消えてしまふ、残る十三圓でどうして生活が出来ぬ、オイ何んとか云へ。

お杉 もうお休みなさいよ。

森本 出てゆけ、お前みたいな薄情な女と一生の苦樂を共にすることはできない出て行け。

お杉 貴方先刻からいかに薄情だ、つて仰有いますけど、私が何處の薄情なんです。

森本 薄情だ、いゝか第一自分の亭主が借金二百圓也のボーナスを。

お杉 お止しなさいよ泥棒に會つたのが何の自慢になるんです。

森本 馬鹿誰が自慢してゐる。

お杉 だつて大きな聲で怒鳴りちらしてまるで自慢してゐるやうぢやありませんか。

森本 自慢してゐるんぢやない、世の中の不公平なることを絶叫してゐるんだ。

この時隣家へ宇田川秀夫が歸つて來る、稍々疲勞してゐる形オツオツ入つて來たが、お杉が眠つてゐるので安心した體、自分もそつと浴衣と着替へて横になる、お杉は但し狸をしてゐるので寢返りをうつ、秀夫は吃驚したがお杉がねてゐるので安心してまた眠る。

森本 森本の方の會話は宇田川の方の事件に關係なく續く。

お杉 まあ可いからお休みなさい、私も洗濯物があるし何時迄あなたの相手をして居られませんから。

森本 さういふお前は不人情なんだ、良人が

偶に休暇を得て一日を愉快に暮らさうとしてゐるのを妨げやうとするのだ、お前は現在連れ添ふ良人より洗濯ものゝ方が大事なのか。

お杉 何を言つて居るんですね、下らない、ぢアア貴方勝手に召し上がつて下さい、私は自分の用をしますから。

と言ひすてゝ臺處へ入る。

森本 怪しからん、こら貴様は亭主の存在を認めないのかオイお杉杉。

此の聲する度に宇田川の方では秀夫が度々頭を持ち上げる可笑味あり、その内に森本は居眠りを初めて終に横になつてしまふ。

宇田川の方ではお糸が起き上る。

稍々異上りの気色、煙草を吸つて自暴に吐月峰を叩く

秀夫が吃驚して目をさます。

秀夫 あ目がさめたかい。

お糸 どうも濟みませんでした、お歸りになつたのを少しも存じませんで。

秀夫 なアに俺も起きさうと思つたんだが餘りよくねてゐたからね。

お糸 さうでしたか、昨夜お歸りを三時まで待つて居りましたのでつい朝寢をしてしまひましたのどうも濟みません（と惡ていねいに云ふ）

秀夫 いやその昨夜ねお前に云つとくのを忘れたんだが今度の芝居が莫迦にカブツたんでね、大入祝をすることになつたんだ、云ふのを忘れてゐたのが不可なかつたがそれで縁喜物だし俺だけ外すわけにはゆかないしね、何處へも行きやしないよ、俺は茶屋で寝てしまつたんだ。

お糸 まあ結構ですわね、お芝居はそんなに大入で當り祝ひまでなさる景氣なら大したものですわ、ええ貴方のお勤めさきですもののお勤先きのお芝居がそんなに大入でしたら私なんかもどんなに肩身がひろいか知れやしません、縦しんば家の米櫃が空つぽでもね。

秀夫 え。

お糸 兎に角男は世間が大事つてね紙治のおさんが云ひますね、ですから私もお米屋がお米を持つてこなくつてもチャンと斯うお

ひざに手を突いて待つてますわ。

秀夫 オイ本當に米がないのか。

お糸 この頃の商人は困りますね、お拂ひをしないと品物を持つて來ないんですから。

秀夫 オイ本當にお前は今日まだ飯を食つてないのか。

お糸 お米がないんですから御飯がたけなかつたんですの、いゝえ一度や二度御飯を食べなかつたつて死にもしないでせう、千松だつてお腹がすいても、ひもじゆうないつて云つてますもの、況して私なんか大人なんですもの。

秀夫 分つた分つた、俺がわるかつた、だがなせさうならさうと昨日にでも云つてくれなかつたんだい。

お糸 云ふのは分つてましたけど貴方も此のごろはお苦しさうでしたからね、いゝえ芝居がそんなに景氣が良いんなら確かにあなたの方でも可い筈ですから私の方からは渡して下さらないと思ひますそれを渡して下さらないのは必つと芝居の方も入

りが思はしくなく自然あなたの都合も悪い
んだらうと思つて控えてましたの。

秀夫 そりや下らない遠慮だつたね、昨日に
でも云つてくれりや芝居で借りてきたんだ
がな。

お糸 借りられますか。

秀夫 何。

お糸 貴方人をだますのも可い加減にして下
さい、貴方は第一昨日芝居へ行つてますか

秀夫 え。

お糸 一體何處まで私をだませば気がすむん
です貴方は昨日芝居へ行かなかつたんぢや
ありませんか、昨日ばかりぢやない一昨日
も一昨日も、貴方は芝居へ病氣届を出し
てゐるつて云ふぢやありませんか。

秀夫 お前芝居へ行つたのか。

お糸 忘れてたんですか、昨日は家族招待の
日でしたよ。

秀夫 あ。

お糸 貴方また始めましたね。

秀夫 いゝやその。

お糸 ぢや二日も三日も芝居を休んで何處へ

行つて居たんです。

秀夫 ウ、ンそれはその。

お糸 聞いてますよ昨日、芝居で都築さんに
きいて來ました、氣をつけなきやア不可な
いつて又これを(鼻を指す)やつてるつて成
るべく大將の耳へは入れないやうにしてゐ
るが宇田川君も此の頃のやうぢや困るつて
都築さんが心配して言つて下さいましたよ
秀夫 濟まないあやまる。

お糸 私にあやまるより米屋と炭屋魚屋とそ
れから。

秀夫 おいそんなに何處も拂つてないのか、
先月の晦日に確かに家の拂ひだけは渡して
ある筈だが。

お糸 家賃が幾つたまつてゐると思つて居る
んです。

秀夫 大屋の方へ拂つたのか。

お糸 拂はなきや立退を食ふぢやありません
か。

秀夫 そんなことを言つて來てゐるのか。

お糸 此間からですよ。

秀夫 だつてそれは怪しからんぢやないか、

家賃を六つや七つためた位で。

お糸 家賃をためるのと銀行の貯金とはいつ
しよにはなりませんよ。

秀夫 それは確かにお前の云ふ通りだが。

お糸 どうしたつて二百圓なきや今日にも夜
逃げしなきやなりませんよ。

秀夫 二百圓。

お糸 一體勝つて居るんですか負けて居るん
ですか。

秀夫 それがその。

お糸 負けて居るんでせう、大體あなたがあ
んな事に手を出すといふのが間違つてます
ハネケンを二たたくつき三本だなんて云ふ
人なんですから。

秀夫 此の頃はそれ程でもないよ。

お糸 そんな事は自愧になりませんよ。

秀夫 ハイ。

お糸 一體家をどうするつもりなんです。

秀夫 此の時天井から紙幣が二三枚落ちて
來る。

お糸 何んだい天井からこんなものが落ちて
來たが、オやお札だ。

お糸 え、お札。

秀夫 お札だよ十圓札だよ。

お糸 贋造ぢやありませんか。

秀夫 (すかして見る) 贋造ぢやない確かに本物だ。

お糸 どうして舞ひこんで来たんでせう。

秀夫 誰も家の前を通りやしなかつたね。

お糸 え。

秀夫 するとどう云ふ譯なんだ。

お糸 どう云ふ譯つて。

秀夫 此の不景氣の世の中に誰がお札を撒いてくれたんだらう。

お糸 變ねエ。

秀夫 變だよ。

お糸 どうして交番へ届けませうか。

秀夫 だが可笑しいよ、天井から(上を見あげて)誰れも居ないね。

お糸 いやあよ氣味のわるい事を云つちや。

秀夫 天より我に授くる命かな。

お糸 天なら分つてるけど、天井が可笑しいわね。

秀夫 天井を調べてみようか、よくある事だ

先祖が金を藏つといってくれたなんてえのは

お糸 だつて此處は先祖代々住んでないぢやありませんか。

秀夫 さうだつたな。

お糸 第一調べてみるのが大變ぢやありませんか。

秀夫 それもさうだな、無暗に天井板を引きはがして大屋に小言を食はないものでもないからな。

お糸 何しろ七つですからね。

秀夫 どうだらう兎に角これは天の授けた命なんだ、縁喜が可いと思ふ、これで乗るか反るかの勝負したら。

お糸 さうさうね可いかも知れないわね。

秀夫 一寸やらしてくれないか。

お糸 何處でやつてるの。

秀夫 寺島の處だ。

お糸 寺島さまなら私も行つても可いでせう

秀夫 お前が来てくれると氣丈夫だな。

お糸 行きませう今日あたり亦かけとりが来る時分だから。

秀夫 ぢや出かけやう。

と立ちあがる。

この以前に森本が目をさまして此の話をきいてゐる、天井ときいてしきりに天井を見あげては何か考へてゐる。

宇田川の方では夫婦身じたくを調べて出て行く。

お糸 (蔭の聲)あの奥さん一寸出かけて参りますから、留守をお頼み致します。

お杉 (蔭の聲)え、宜しういいます、行つて被在いませう。

秀夫 (同じく)どうか願ひます。

森本 (突然叫ぶ)さうだ。

と急に立ち上つて便所へ入る。

お杉 貴方、貴方、どうなすつたんです、あなた、あなた。

森本 森本が出て来る。

お杉、貴様といふ女は。

何です血相變へて。

森本 夫婦でゐながら亭主の金を盗むとは。

お杉 え何んですつて。

森本 俺が便所の天井へかくしておいたボー

ナスを貴様盗んだな。

お杉 え、ポーナスを。

森本 今思ひ出したんだ、ポーナスを盗んだのは貴様に相違ない。

お杉 貴方そりや何を仰るんです、私がポーナスを盗すんだなんて、何を證據にそんな事をおつしやるんです。

森本 證據呼ばはりをするのか、便所の天井を見る、俺が天井へかくしたのは俺だけしか知らない事だ、それが失くなつたのはお前がかくす處をみてゐたからだ。

お杉 貴方仰有ることと仰有らない事がありますよ、貴方がポーナスを貰つて歸つて被來つたのは先月の二十五日でしたね。

森本 さうだ、月給日だ。

お杉 大層酔つてお歸りになりましたね。

森本 タイガーへ寄つたもんだから。

お杉 え。

森本 いやその大概ア何んだ酔つて歸つて來たのがどうしたんだ。

お杉 歸つて被來つてポーナスは貰つたよと仰有いましたか。

森本 サア。

お杉 仰有いませんよ、今年は財界のどうかでポーナスは出ないのさだから自棄で酔つて來たんだと斯う仰有いましたよ。

森本 さうだつたかな。

お杉 明くる日になつてポーナスを盗まれたと仰有り出したんですよ。

森本 さうだつた。

お杉 私は其の時直ぐさう思ひました、これは何處かのカフェーの女給に指環か着物かをねだられて其の拂ひにポーナスをお使ひになつたんでテレカクシに盗すまれたなんて仰有つて被在るんだと。

森本 いやそんなことはないよ。

お杉 ですから私なまじ交番へ届けたりしちや貴方の面目を潰すもんだと思つて何にも届けなかつたんです、便所の天井へかくしたなんてどうして私が知つてます、又何の必要があつて便所の天井へかくしたりなんだなすつたんです。

森本 ウンそれはその。

お杉 分つてます私にはよく分つてます。あなたには私に嘘を吐いて、ポーナスで其の女

給と何處かの海岸へでも被往つつもりだつたんです、それで便所の天井へかくしたりなんだなすつたんです。

森本 そんな事はない、そりや違ふと、絶対に違ふよ。

お杉 いゝえさうです、それでなければ何の必要があつてポーナスを便所の天井へかくしたりなんだなすつたんです。

森本 それは其の別に悪氣があつてした譯ぢやないが、其のなんだ、つまりお前に見せるとお前の贅澤にばかり使はれてしまふと思つたから。

お杉 贅澤ですつて何時私が贅澤をしました

森本 いや贅澤をしたとは言はないがさ。

お杉 女中も使はずに一人で働らいてゐるものを贅澤だなんて貴方そりや餘りです、餘りです。

森本 いや、今のは失言だ取り消す。

お杉 此の手をみて下さい指の先がこんなに太くなつて……それに贅澤だなんて貴方と云ふ方の心の奥底が私にはつきり分りました、あなたは本當に私を愛して居ては下さ

らないのです、あなたは私より女給の方が大事なんです。

森本 オイ一寸待つてくれ先刻から女給給つて云つてるがそりやカフエーへ行きや女給は居るが俺が何處の何といふ女給と關係してゐるんだい、やきもちも可い加減にしてくれ。

お杉 何がやきもちです何と云つたてもあなが私に對する愛情のないのは事實です私に愛情がなければこそボーナスを便所へかくしたりなんぞなされるんです、つまり貴方は妻として私を信じてゐては下さらないのです、妻を信じない良人を私は良人として尊敬することは出来ません、良人良人たらさんば、妻妻たららずです、私は今日限りお暇頂きます。

森本 オイ謝つた勸辨してくれ。
お杉 話は實家の親がしてくれろと思ひます兎に角私を出て参ります。

と言ひすてて出て行く。
森本 オイ待つてくれお杉待つてくれ。
と追つて行く。

——幕——

第二幕目 (同上)

森本、お杉、お杉の父輝造居並ぶ。
森本は絶對的に恐縮してゐる。
第一場から三時間位経過。

輝造 兎に角これは一應警察へ届け出ることですな苟にも五百圓と云ふ金を粗末に扱ふから斯ういふことになるのです。

森本 御尤もです、私も少しズボラ過ぎました、唯當日少し酔い過ぎて居りましたのこの手前隠さなきやならんと思つて隠しました。

輝造 それがよくなかつた。

森本 全くです、こんな事になると知つたら

輝造 併し不思議だな、外部から忍び込んだ形跡がなくつて天井裏の金が粉失したとは奇怪至極ですな。

森本 それに就いて私は此の犯人に心當りが出来て来たのです。

輝造 ハテ、それは誰です。

森本 (隣りを指差す) どうもおかしいです、先刻うたゝねをして居まして不圖目がさめ

た時、天井の金がどうか云つてゐました
輝造 フン成程、それで。

森本 段々と考へて来た事ですが、此處は長屋建て天井裏は何處も彼もノベタラだと思ふんです、貴方は讀んで被在らないかも知れませんが、江戸川亂歩の屋根裏の散歩者といふ探偵小説があります、屋根裏を這ひまはつて天井の節穴から毒藥を垂たして人を殺すんですなア。

輝造 (氣味悪く天井を見上げる)
森本 天井へ上つて見なけりや分りませんが或はと思ふんです。

輝造 成程、そんな事がないと言へませんな。

お杉 それが本當なら呆れ返つた人ですね。併し之れといふ證據がない事ですから輕卒に訴へる譯には行かんと思ひます。

輝造 それも理屈ですな。

森本 で暫らく形勢を觀望したいと思ひます成程、それもよからう。

お杉 ですけどそんな事を云つてゐてボーナスを全部使はれてしまつたらどうなります

それより、早く警察へ訴へた方が早手廻しですわ。

輝造 成程これも一理屈だ。

お杉 私、警察へ訴へて来ますわ。

森本 まあ待て、滅多なことを云つてあべこべに誣告罪で訴へられないとも限らない、確かにさうだと云ふ證據がないんだからな輝造 それもさうだね、これは兎に角盜難届けだけ出しておいた方がよきはありませぬかな。

森本 ですが併し。

お杉 貴方五百圓といふお金を粗末に扱へる私達の身分ぢやないんですよ。

森本 だが少し極りが悪いぢやないか、これを訴へりやどうしたつて新聞物だよ、亭主がポリーナスを貰つて来たのは可いが、細君に見せると使はれてしまふと思つたので便所の天井裏へかくしたところがそれを盗すまれたのを妻君がくすねたと云ひ出した爲めに離縁騒ぎが持ちあがつた、亭主大面喰ひ、實家へ追駈けて行つて百萬圓も謝罪して漸く我が家へ連れ戻したなんぞ森本俊治

の面目に關する事さうさぶる甚大だからね。

お杉 それもつまりは貴方は私に對する愛情のない結果ですわ、世の中の薄情な良人に對する懲罰の犠牲になる意味であなたはそれだけの制裁をうける必要があります。

森本 オイ何ほ何んでもそれは餘りぢやないか、先刻からお父さんの前だと思ふから我慢してゐるんだぞ。

お杉 お父さんの前でなきやどうしやうといふんです、妻たるわたしに秘密をつくりながら權威ある良人としてわたしに臨むことが出来ますか。

輝造 お杉、言葉が過ぎるぞ。

お杉 いゝえ、お父さん、これ位いのことは當然云つて然るべきことです、私はこのポリーナスの泥棒よりポリーナスをかくした此の人の心持ちを怨みます。

輝造 それにしたつて何だ、森本さんはお前の良人だぞ、妻たるものが良人に食つてかゝるとは何たる不埒だ。

お杉 妻に秘密を持つといふことは不埒な事ではないのですか。

輝造 男には世間がある、女房に對して多少の秘密をもつことは當然然るべきことだ。

お杉 さうですか、ではお父さんもお母さんに秘密を持つて被在るんですね、宜う御座んす、私は此のことをお母さんに云つて来ます。

と云ひ捨てゝ出て行く。

輝造 オイ待て、そんな事をいふ奴があるか
オイお杉。

と云ひ乍ら後を退ふ。

森本 一體全體俺達は何を騒いでゐるんだらう、併しあのポリーナスだけは可笑しいな。

(と考へ込む)

秀夫 秀夫とお杉が歸つて来る、途端にまた天井から紙幣が落ちて来る。

秀夫 あ。
お杉 貴方、またお札よ。

森本が聞耳を立てる。

秀夫 一體どうしたと云ふんだ。
お杉 變ね。
秀夫 變だね、俺達は夢を見てゐるんぢやないかな。

お糸 一遍天井を調べたら。

秀夫 併し無暗と天井板を引はがして大家に小言を喰ふのもつまらないからな。

お糸 それもさうね、それにあの大家さんのことだから、これは自分の金だなんて云つて持つて歸つちまはないとも限らないしね

秀夫 其奴も馬鹿々々しいからな。

お糸 鼠小僧見たいな義賊がゐて、私達を助けてくれているんぢやないんでせうか。

秀夫 何とも知れないね。

お糸 きいてみませうか。

秀夫 何を。

お糸 あなたは義賊でいらつしやいますかつて。

秀夫 馬鹿。

お糸 だつて變ですもの。

秀夫 變は變だがね、少し氣味が悪くなつて來た。

お糸 大家さんへ屈けて來た方がいゝかも知れないわ。

と、言つてゐるところへ、今度は細い紙片が降つてくる。

お糸 ア又だ。

秀夫 今度は、オヤお札がちぎつてある。

お糸 キヤツ。(と秀夫にかちり付く)

秀夫 驚かすなよ。

お糸 だつて貴方。

秀夫 大家に屈けて來やう不思議過ぎる。

お糸 私も行くわ、一人ぢや氣味が悪くつて。

秀夫 よし、おいで。

と、兩人出て行く。

森本頻りに考へ込む。

何か心に首肯いて便所に入る。

輝造がお杉と共に歸つて來る。

輝造 森本さん、森本さん、オヤ居ないよ便所かな。(便所の傍へ行つて)森本さん、便所ですか、ハテ何處へ行つたらう。

お杉 貴方、々々。

輝造 可笑しいな、俺達の跡を追ひかけて出たんぢやないかな。

お杉 さうかしら。

輝造 さうだよ、必とさうだよ。

お杉 さうだとすると、お母さんに餘計な心配させる様なものね。

輝造 お前が悪いんだ、あんな事を云つて飛び出すから。

お杉 だつて瘡に障つたんですもの。

輝造 どうもお前は母親に似て直ぐ家を飛出したがへて可憐ない。

お杉 だつて現在の女房を信用しないなんて輝造 もう止さう、その話に、又飛び出されると大變だ。

お杉 だけど本當に森本は私を探しに行つてくれたんでせうか。

輝造 そうだらう、居ない處を見ると。お杉 そんな愛情があると頼母しいけど。輝造 そんなにあの人はお前に激情かい。お杉 いゝえそれ程でもないわ、私の肩なんか揉んでくれる事があるわ。輝造 親を馬鹿にするな。お杉 あらそんなつもりで云つたんぢやありませんわ。輝造 夫でいてどうして便所の天井へなんかポーンスを隠したんだらうな。お杉 それ私瘡に障るのよ、必とさうな

んですわ、私に見せると全部取上げられる
恐れがあるから今年は不景氣でボーナスが
少なかつたとか何とか云つて二百圓位自分
の用に使はうと思つてゐたのよ。

輝造 ある手だな。

お杉 お父様もやつて被在んですか。

輝造 いや、俺はそんな不正なことはした事
はないが、世間にはよくある事だよ。

お杉 どうしてそんなことをするんでせう。

輝造 つまり金使いの荒い女房を持つた男が
よくやる事だよ。

お杉 ぢや私もお金使いが荒いと仰有るんで
すか。

輝造 いや、お前は別だが。

お杉 ようござんすお父さん迄がそう仰有る
んなら、私は良き妻たる資格がないのです
から、森本が家へ行つてゐるのを幸ひお母さ
んの前で離縁を取つて頂きます。

輝造 オイ困るよ、そんな事を云つちや、お
前に悪い所が少しもない森本が悪いんだ、
悪いからこんな事になつたんだ、俺が保證
する。

お杉 必とですか。

輝造 必とだ、必とだ。

お杉 そんなら、宜う御座んすけど。

輝造 それにしても森本さんが本當に家に
行

つたかしら。

お杉 私一寸電話をかけて來ますわ、多分
タクシーで行つたでせうから、着いてる時分

でせう。

輝造 そうだな、それがよかるう。

お杉 ぢや一寸留守をお願いしますわ。

輝造 お母さんが出たらあんまり餘計な事を
云ふんぢやないぞ。

お杉 え。

と出て行く。

輝造 段々母親に似て來るな、我娘乍ら森本
さんも氣の毒だ。

此の時宇田川の家の方へ秀夫、お杉
家主の尾崎外に仕事師二三人入つて
來る。

秀夫 これがそうです。

尾崎 成程これは確かに正真正銘の札だ、然
しからちぎれたんぢや、日本銀行へ持つて

行つても取り換へてくれまいなア、札のま
んま降つては來ないのですか。

秀夫 (お糸と顔を見合はせる) え、札の屑ば
かり降つて來るのです。……

尾崎 不思議だなア。

仕事師甲 此處から降つて來るんですね (と
帚で天井を突く)

仕事師甲 オヤ

尾崎 何んだい。

仕事師甲 旦那變ですぜ、これは。

尾崎 何だ。

仕事師甲 (乙に) お前突いて見ねへ。

同乙 (突いて見る) 何だか居る様だな。

秀夫 え、居ますか。

仕事師乙 居ますよ手答へが違ふ。(尙突く)

と天井板が破れて森本が落ちて來る
今度は人間だ。

秀夫 オヤ貴方は森本さんぢやありませんか

尾崎 森本さんだ。

秀夫 貴方ですか、こんな惡戯をしたのは。

尾崎 一體どうしたつて云ふんです。

幾等聞いても森本は身體が痛いので

返事が出来ない、森本の家では輝造が聞耳を立てゝゐる、お杉が歸つて来る。輝造がお杉にさゝやく。

秀夫 森本さんハッキリ仰つて頂きませう
どうして手前共の天井裏に忍んで被來つたのです。

森本 鼠……鼠(ハツキリ云えない)

秀夫 鼠がどうしたんです、眞逆貴方
彈正の子孫でもありません。

森本 鼠……チヌウ、チヌウ、五百圓、ボ
ナス。

秀夫 何を云つて被在るんです、兎に角これ
は警察へ届ける必要がありますな。

尾崎 森本さん一體貴方何んでこんな眞似を
なすつたんです、宇田川さんも貴方も私に
取つては同じ借家人ですから貴方の爲にな
らない様な事もしたくありません、どうし
たんです。

お糸 眞逆、お札が降つて來る話を聞いて恐
んで被在つたのぢやないでせうね。

お杉 (自宅から聲をかける)失禮な事を仰有
いますな。

お糸 何んですつて。

お杉 手前共の主人はそんな卑しい事を致す
様な人間ではございません。

お糸 でもかうして天井から落ちて被來れば
云ひ譯は立たないでせう。

お杉 それは手前共で盗まれたボナスの行
方を探す爲だつたんです。

お糸 何んですつて……

お杉 手前の主人が便所の天井えかくしてお
いた五百圓のお金が何誰かに盗まれてしま
つたんです。

お糸 私共で盗んだと仰有るんですか。

お杉 今朝天井のお金がどうかと仰有つて被
在いましたね。

お糸 それが何だと云ふんです、御宅では便
所の天井へおかくしになつたんぢや御座い
ませんか、私共の家はお宅の便所ではない
んでございますからね。

お杉 では天井のお金はどうなんでございま
す。

お糸 存じません、唯お札の切れつばしや人
間が落ちて來たりするんです。

お杉 貴方其處で何をして被在るんです證據

を見届けたんでせう、何故ハツキリ泥棒が
誰れだか仰有らないんです。

森本 ねず……チヌウ、チヌーの巢……チ
ヌウチヌーの巢。

お杉 何を云つて被在るんですお待ちなさい
今其處へ行きますから。

輝造 俺も行かう。

と共に出て行く。

尾崎 何が何だか分らなくなつた別に建方が
悪かつたわけでもないがな。

お糸 悪くないとは云へませんよ、人間が落
ちて來る様なヤワな天井を、誰が葺いたん
です

尾崎 冗談云つちや不可ない、誰が家を建て
るのに人間が天井を歩ける様にこしらへる
奴があるか。

秀夫 併し此方の家で話してゐた事が隣りの
家へ聞える様な雑作は困りますね。

お杉 (入つて來る)どうです貴方がたは確か
に天井のお金の話をして居たでせう、何が
どうある共、手前共の便所の天井へかく
した五百圓のお金が御宅の天井え來て居た事

は事實なんです。

秀夫 それを私共が盗んだと云ふんですか。

お杉 江戸川亂歩者の屋根裏の散歩と云ふ探偵小説を御存じありませんか。

秀夫 亂歩だか、散歩だかそんなものは知りません。知つて居りやどうなるんです。

お杉 (言句につまる) 貴方何んとか言つて下さいよ。

森本 チノウチ、ユウ、の巢、チノウ、チノウの巢。

輝造 舌をかんでるんだ。

秀夫 ところでどうなるんです。此のランプとか電気とかの屋根裏の散歩者が私に似て居るとも云ふんですか。

お杉 つまり、何んです、貴方の天井裏を散歩して宅の便所の天井へ被來つたんです。

秀夫 貴方はどうかしてゐる、誰が、鼠ぢやあるまいし。天井裏を散歩するなんて。

森本 それ〜。

お杉 何がそれなんです。

輝造 筆談をしたらどうだ。

お杉 濟みませんが何か紙と硯箱と。

お糸 お生憎くですが、手前共には御座いませんの。

お杉 貴方指で書いて下さい、え、鼠が引いて行つて五百圓の札で巢を作つて居た、まア。

秀夫 とお糸とは顔を見合せる。

お杉 貴方それは本當ですか、え、札が滅茶々に食ひちぎつてある。

輝造 贅澤な鼠だな。

お糸 奥さん如何です、これでも手前共が盗んだと仰有るんですか。

秀夫 立派に名譽が毀損されて居るんです。お糸 訴えませう。

お杉 貴方、貴方が便所の天井へかくしたりするから、こんな事になつたんですよ、私を信用してゐりや、こんな事にはならないんです、第一尾崎さん、貴方も貴方ぢやありませんか、どうして外の家の鼠を私共の宅へよこす様な建築をなすつたんです、こ

うなれば、貴方に損害賠償を要求します。

尾崎 冗談云つちや困りますよ、此方こそ天井の修繕代をお貰ひ申したい位だ。

秀夫 同事に立派な家宅侵入罪だからな。

お杉 それはみんな尾崎さんの責任です、建築費を値切る事ばかり考へて、丈夫な板を使はないからこんな騒ぎが起るんです。

尾崎 これは驚いたな、何處の大屋だつて屋根裏の散歩者の都合迄考へて家を建てるものはあるまい、それは少し江戸川亂歩だ。

この時、蔭で『大變ですよ、火事ですよ』と叫び聲が聞へる。

皆驚く。

——幕——

二幕目(二) (同じ家)

夜になつて居る。

森本家の方では秀夫、お糸、お杉、輝造、尾崎、仕事師等が打ち解けて飲んでゐる。

森本だけが一人悄然としてゐる。

お糸の三味線で仕事師の甲が唄つて居る。

やがて唄ひ終る。

輝造 やんや、やんや。

お杉 貴方まだ飲めません。

森本 ウム、どうもまだ舌にしみる。

秀夫 兎に角、今日(けふ)は森本(もりもと)さんが一番(いちばん)ひどい目(め)におあひでしたね、奥(おく)さん、とは喧嘩(けんか)する、天井(てんじやう)からは落ち(おち)る、おまけに危(あや)うく火事(かじ)に焼(や)け出(で)されようとする。

尾崎 森本(もりもと)さんには全くお氣(き)の毒(どく)ですよ、でも先刻(さきごころ)のボヤ(ぼや)も人手(にんず)が揃(そろ)つて居(ゐ)たから直ぐ消(け)えた様な譯(わけ)ですからね、天井(てんじやう)の散歩者(さんぽしや)事件(じけん)がなかつたら、私も居(ゐ)ない、頭(かぶ)も居(ゐ)ない。

尾崎 私(わたし)も居(ゐ)なかつたでせうか。
左様(さやう)ですな、兎(う)に角(かく)五人(ごにん)の人手(にんず)が缺(か)けるところだつた、おかげで、私(わたし)も自分の持(も)ち家を焼(や)かずに済(す)みました。

秀夫 私共(わたくしども)の家(うち)こそ自分の家(うち)ぢやないが荷物(にもの)や道具(道具)を焼(や)かずに済(す)んで大助(おほたけ)かりです。

お杉(おすぎ) 全くですわ、私共(わたくしども)では荷物(にもの)を焼(や)いたら五百圓(ごひゃくえん)どころの損害(そんがい)ぢやないんですもの、斯(か)うなると鼠(ねずみ)が有難(ありがた)くなつて來(き)ますわ。

輝造(てるぞう) 物は云(い)ひやう氣(き)取りやう、禍(わざ)轉(ま)じて福(ふく)となり、雨降(あまふ)つて地固(ぢがたま)る、こんなお目出度(めでた)い事(こと)はない。

尾崎 (おすぎ)だが不思議(ふしぎ)ですな、鼠(ねずみ)といふ奴(やつ)は、大(おほ)

火事(かじ)でもある時(とき)は、その五六日(ごにちまた)前から姿(すがた)をかくすといふが、今日(けふ)森本(もりもと)さんが天井(てんじやう)を散歩(さんぽ)した時(とき)も、五百圓(ごひゃくえん)の巢(ね)に何(なに)一匹(ひとひき)も居(ゐ)なかつたとは考(かんが)へると不思議(ふしぎ)ぢやありませんか
秀夫 (てるぞう)すると先刻(さきごころ)のボヤ(ぼや)を五六日(ごにちまた)前から知(し)つた譯(わけ)ですな。

輝造(てるぞう) 今日(けふ)の騒(さわ)ぎも知(し)つてゐたかしら。
お杉(おすぎ) 貴方(あなた)方(かた)、これにこりなきや、駄目(だめ)ですよ
つまりを云(い)へば貴方(あなた)が妻(つま)に對(たい)して秘術(ひじゆ)を持つてゐるから、斯(か)ふ云(い)ふ事(こと)になるんですよ

森本(もりもと) もうそれは分(わか)つた。
お杉(おすぎ) 何か(なに)と云(い)ふと、すぐ分(わか)つた、分(わか)つたでござましておしまひなさるけど、本當(ほんとう)に之(これ)にこりて、私(わたし)を信用(しんよう)しなければ駄目(だめ)ですよ。

お糸(おいと) 奥(おく)さんの仰(おつし)る通り(とおり)ですわ、宅(たく)なんかも何時(いつ)も私(わたし)をござまかす事(こと)ばかり考(かんが)へて居(ゐ)りますよ、一體世(たい)世(せい)の中の男(おとこ)つて云(い)ふものは、女房(にやぼう)を、ござまかすものだと考(かんが)へて居(ゐ)るんぢやないでせうか。

輝造(てるぞう) フン、却(かへ)つて面白(おもしろ)い。
秀夫 (おいと)不可(い)けませんよ、御老人(ごらじん)がそんな事(こと)を仰(お)

有(あ)つちや。

お杉(おすぎ) いゝえ、お父(ちち)さんなんかも、度々(たびたび)お母(おかあ)さんをごまかして被(か)在(ざい)るんですよ。

輝造(てるぞう) これは手酷(てごつ)しいな。

お糸(おいと) 何故(なにゆゑ)男(おとこ)つてものは斯(か)う嘘(うそ)吐(は)きなんでせうね。

秀夫 (おいと) オイ、そう一概(いっぺい)に云(い)ふな、お前(まへ)だつて随分嘘(うそ)を吐(は)く時(とき)があるぜ。

お糸(おいと) そういや貴方(あなた)方(かた)。

秀夫 (おいと) 何(なん)だい。

お糸(おいと) あれ……

秀夫 (おいと) あ、あれかい。

お糸(おいと) ええ。

秀夫 (おいと) 明日(あした)にした方がよくはないかい。

お糸(おいと) でも氣(き)にかゝりますもの、早(はや)い方が可(い)いね、待つて居(ゐ)るんでせう。

秀夫 (おいと) ウン(と)、モジ、しながら懐中(かいちゆう)の紙(し)入(い)りから紙幣(しへい)を若干(せうぜん)取り出(だ)す、森本(もりもと)さん、實(じつ)は其(その)先刻(さきごころ)から申上(まを)げやう、と思(おも)つてゐた所(ところ)なんです其(その)鼠(ねずみ)の巢(ね)ですな。

森本(もりもと) 鼠(ねずみ)の巢(ね)。

秀夫 (おいと) あの五百圓(ごひゃくえん)ですよ。

森本 五百圓はどうしたんですか。

秀夫 貴方は全部風が食ひかちつたと思つて被在る様ですが、實はその完全な奴も中にはあつたんで。

森本 え。

秀夫 十圓紙幣で六枚完全な奴が實は今日天井から落ちて來たので、眞逆か宅の一件とは知らなかつたものですから無斷である資本に使はして頂いたんで。

森本 へえ。

お杉 まア。

お承 どうも、奥さん濟みませんでした。

秀夫 お蔭で大勝利を得ましたので、一寸これをお返し致します。

誰も彼も呆れてゐる。

秀夫と承は無暗矢鱈に御辭儀する。

— 幕 —



朝 郎 生

角座興行に、山田珠樹氏翻譯のヴィルドラツクの『商船テナシチイ』が上演される豫定だったので、右戯曲に就いての御感想を求めたところ、能島武文氏から玉稿をお送り下された。處が、急に中途から『人形の家』に変更されたので、折角の御厚意も無駄になつて仕終つて、筆者には誠にお氣の毒な次第、幾重にもお詫び申し上げます。何卒悪しからず御寛容の程お願いいたします。

『道頓堀』も、もつと目新しいことを始めたいと思ふのだが、何しろ雑誌の範圍がきまつてゐるのだから仕方がない。讀者諸氏も嘸御退屈のことゝ御推察申し上げる。何れ、そのうちには變つた方針を立てる事も出来やうと思ふ、先づそれまでは……

處で、來月號は、銷夏號として、奇抜な記事を集めるつもり、さしづめ、關西に於ける若い作家諸氏にお願ひして夏らしい涼しい讀物を頂だいするつもりです。面白い面白くないかは芝居と同じで蓋を開けて見なければ判然したことは言へない、まあそれがたのしみといへば楽しみであります。然し、

皆んな意氣込んでゐられるので御期待を願つてもかまひません。

讀者文藝は、近頃急に投稿者が増して、編輯子、少々心丈夫な思ひをしてゐます。扱て、樂書帳ですが、先月の訛言が利いたと見えて、今月は集りも集つたり、何んと三十三四通といふ盛大ぶり。處で、今月號になつて見ると、どうしても頁のやりくりがつかないといふので、掲載出来ませんでした。誠に申譯けの次第もありません。が、これに懲りず來月も相變りませぬやう。

扱て、この暑いのに、うだ／＼と並べ立てると皆さんもお氣の毒なら、私共も少々氣がひけます。が年極めの讀者募集の話です。前月號にも書きました。が、今月號にも更に募集することにしました。規定は別項の通りです。何卒おすゝめ合はされまして、どし／＼御申込みの程、幾重にもお願いいたします。

寄贈雜誌

- 創作時代
- 新國劇
- 舞臺評論
- 川柳きやり
- 蛙群
- 家庭の教
- 警世
- 實業の大阪

昭和三年七月一日發行

雜誌『道頓堀』第三年 第廿二輯

誌代は前金でお拂ひを願います。

郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵費五厘税)

昭和三年六月廿八日印刷
昭和三年七月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名會社

編輯者 鳥江 鏡也

大阪市東區船場二丁目三〇

印刷者 山上 貞一

大阪市東區船場二丁目三〇

印刷所 中央堂印刷所

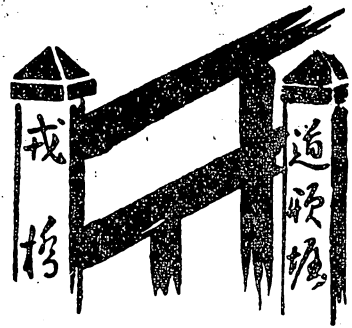
大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編輯部

電話 (一三四〇番) (六八五番)

川
魚
御
料
理



道頓堀各劇場へは……
 鰻まむし並に調理品一切
 迅速丁寧に仕出しいたし
 ます
 御観劇の砌りは何卒御電
 話下さいませ

電話南
 シバト 四八〇番
 クイニ 九五二番



裂 小・具道小

貸 衣 裳

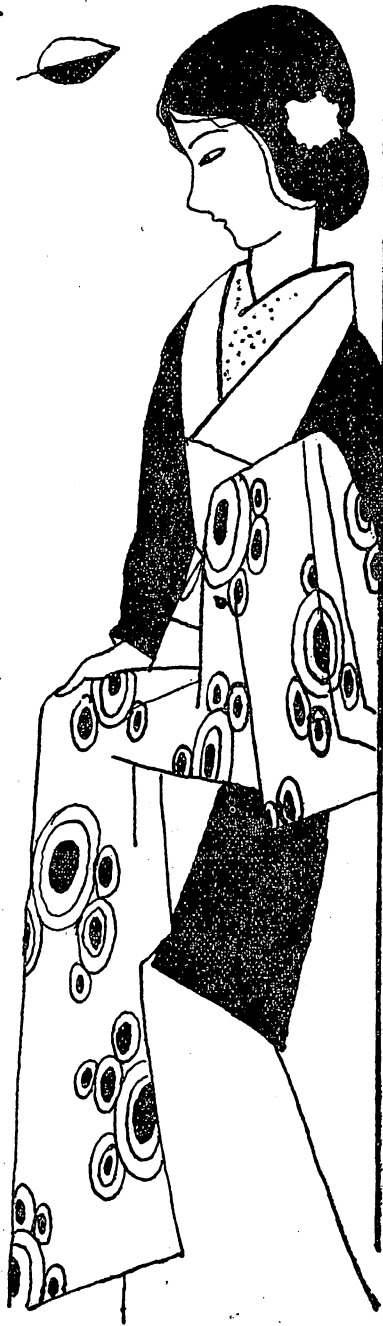
素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部



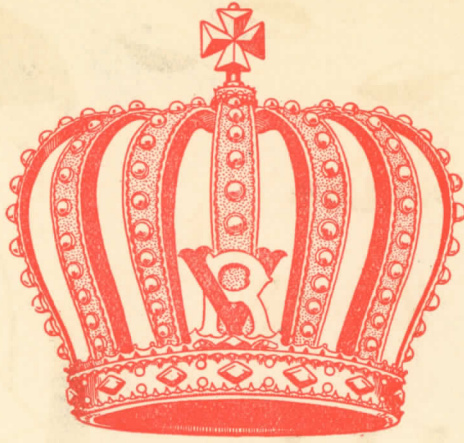
(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

本店 大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番



Restaurant Vitamin

SHINSAIBASHI OSAKA

TEL. MINAMI 533

七月十日開業

近代都會人向

ビタミン食堂の出現

美味ミ營養ウイタミン料理

音樂的な酒ミ繪畫的ウエーター

高尚な施設ミ優雅なサービス

清楚な感じミ自由な雰囲気

歡樂の殿堂に溢る、交響樂

ウイタミンは都市のパラダイス

夜の天國レストラン、ウイタミン

大阪市心齋橋南畔

ビタミン食堂

電話五三三番

一階 民衆食堂
二階 高級酒場
三階 宴會俱樂部

若く明るいの顔になる

リート白粉

東京大阪平尾釐平商店



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年六月廿八日印刷
昭和三年七月一日發行

金參拾錢(郵一錢五厘稅)